

— 茨城県土浦市 —

# 赤弥堂遺跡(東地区)

—— 県営畠地帯総合整備事業(担い手支援型) ——  
坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

土浦市教育委員会  
有限会社勾玉工房M o g i

— 茨城県土浦市 —

# 赤弥堂遺跡(東地区)

— 県営畠地帯総合整備事業(担い手支援型) —  
坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

土浦市教育委員会  
有限会社勾玉工房M o g i

## 序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など、豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところがありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。このような遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のために大切なことあります。

この度、上坂田地区と下坂田地区において大規模な畠地帯総合整備事業が計画され、今年度は下坂田の赤弥堂遺跡など、記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成21年3月

土浦市教育委員会  
教育長 富永善文

## 例 言

1. 本書は茨城県土浦市下坂田（旧新治村）1,350—1 外に所在する赤弥堂遺跡（東地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi が実施した。
3. 発掘調査面積は 871m<sup>2</sup>である。
4. 調査期間は、平成 20 年 9 月 24 日より 11 月 11 日まで実施した。また、出土品の整理作業及び報告書の作成は、平成 20 年 12 月 5 日より開始し、同年 3 月 17 日まで実施した。
5. 発掘調査は現地調査を荒井英樹・長谷川秀久（発掘調査員）・大久保隆史（調査員補助）が担当した。整理作業は大賀健・大賀さつきが担当した。
6. 発掘調査の参加者は以下の通りである。（敬称略）

大塚惣市 中川茂之 山口豊 山藤直樹 小野豊 吉田みち 塚本芳枝 櫻戸徹 糸賀文子  
中川裕 平林敬子 小角みや子 金塚暎 山崎一義 中川俊三 栗原孝 箱守よしい  
植木昭子 齊藤京子 長南節子 渡辺由美子 齊藤与志郎 中村薰 中島貞雄 中島秀雄  
中島トミ子 市原チヨ 沖日出夫 露久保三郎 海老原龍生 高野正行 櫻戸洋子 高野和子  
大賀智章 川口和之
7. 整理調査は有限会社勾玉工房 Mogi において行い、参加者は以下の通りである。

遺物基礎整理作業 棚原美代子 稲坂なお子 越川範子  
遺物実測作業 大賀さつき 廣井さやか 木村春代 小山獅子 岩崎美奈子  
デジタル編集 大賀智章 大賀文香  
事務・経理 宇佐美薰
8. 本報告書に用いた遺構写真は、荒井英樹・大久保隆史が、また整理作業における遺物写真は、大賀健・大賀智章が撮影した。
9. 執筆分担

第 1 章第 1 節 黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）  
第 1 章第 2 節 荒井英樹（有限会社勾玉工房 Mogi）  
第 2 章第 1 節・2 節 関口満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）  
第 3 章・第 4 章 大賀健（有限会社勾玉工房 Mogi）
10. 遺跡の航空写真は株式会社スカイサーベイに依頼した。
11. 本報告書に関わる出土品及び記録図面・写真等は、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。
12. 本遺跡の略号は ASSE（赤弥堂遺跡東地区）とした。遺物の注記もこれに従っている。

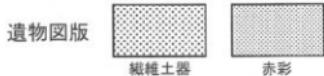
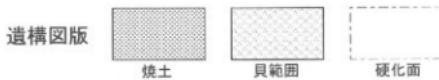
13. 協力者

本遺跡の発掘調査から本報告書の作成に当たり以下の方々に協力を賜った。ここに記して感謝の意を表すものである。（敬称略）  
阿部芳郎（明治大学教授）西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授）齋藤弘道 上守秀明 鈴原正  
林田利之 及川謙作 茨城県土浦土地改良事務所 土浦市産業部耕地課 有限会社カワヒロ産業 佐々木建設  
株式会社 茨建航業株式会社 株式会社マツイ商会 株式会社スカイサーベイ

## 凡 例

1. 第1図は国土地理院2万5千分の1地図常陸藤沢を用いた。

2. 本遺跡の報告書に用いたスクリントーンは以下を表す。



3. 本遺跡において検出された遺構は5・6・8号住居跡、7号土坑、3～5・8～21号ピットは擾乱や根の痕であると判明したために欠番とした。従って、本報告書に於いても遺構番号の振替は行わず、調査時の番号の今まで報告している。

4. 遺物の注記に用いた略号は以下の通りである。

遺跡名 ASSE

住居跡 SI 土坑 SK 溝 SD ピット P

尚、貝塚はどれも住居内貝塚であったために、1号貝塚は1号住居跡(SI01)、2号貝塚は2号住居跡(SI02)、3号貝塚は3号住居跡(SI03)とした。

5. 本遺跡出土遺物の修復にはセメダインC及び樹脂材のエボキシレジン6113を用いた。

6. 本報告書における実測図は全体測量図500分の1、グリッド網図1,000分の1、遺構は60分の1、遺物は2分の1、3分の1、4分の1の縮尺で掲載した。尚、一部の遺構、遺物に変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。

7. 本書における遺物写真的縮尺は、基本的に実測図の掲載に合わせているが、一部原寸縮小または拡大したものもある。

8. 堆積土層の観察及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。

## 目次

### 本文目次

序

例言

凡例

目次

#### 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

　　第1節 調査に至る経緯.....(1)

　　第2節 調査の経緯.....(1)

#### 第2章 遺跡の位置と環境

　　第1節 地理的環境.....(3)

　　第2節 歴史的環境.....(3)

#### 第3章 調査の方法と標準堆積土層

　　第1節 調査の方法.....(7)

　　第2節 標準堆積土層.....(8)

#### 第4章 検出された遺構と遺物

　　第1節 検出された遺跡の概要.....(10)

　　第2節 遺構外出土遺物

　　第1項 遺構外出土遺物の概要.....(10)

　　第2項 遺構外出土遺物を基にした遺物の分類.....(10)

#### 第3節 検出された遺構及び遺構出土の土器

##### 第1項 繩文時代

　　1 住居跡.....(30)

　　2 土 坑.....(39)

　　3 炉 穴.....(44)

　　4 ピット.....(45)

##### 第2項 古墳時代

　　1 古 墳.....(46)

　　2 方形周溝墓.....(49)

　　3 住居跡.....(49)

　　4 土 坑.....(55)

　　5 ピット.....(56)

##### 第3項 中・近世

　　1 土 坑.....(57)

　　2 溝・道状遺構.....(59)

#### 第5章まとめ

　　1 遺跡の概観と検出された遺構の所属時期.....(63)

　　2 繩文時代前期の土器.....(64)

3 翡翠製玉について ..... (64)

4 古墳時代前期の遺構 ..... (64)

参考引用文献

写真図版

抄録

挿図目次

第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	(4)	第 30 図 1・2・3 号炉	(45)
第 2 図 遺跡の地形とグリッド配置図 1/1000	(7)	第 31 図 1・2 号ピット	(45)
第 3 図 標準堆積土層	(8)	第 32 図 1 号古墳・出土遺物	(47)
第 4 図 遺跡全測図	(9)	第 33 図 2 号古墳・出土遺物	(48)
第 5 図 遺構外出土遺物 (1)	(12)	第 34 図 1 号方形周溝墓出土遺物	(49)
第 6 図 遺構外出土遺物 (2)	(17)	第 35 図 1 号方形周溝墓	(50)
第 7 図 遺構外出土遺物 (3)	(19)	第 36 図 4 号住居跡	(51)
第 8 図 遺構外出土遺物 (4)	(21)	第 37 図 9 号住居跡	(51)
第 9 図 遺構外出土遺物 (5)	(25)	第 38 図 11 号住居跡	(52)
第 10 図 遺構外出土遺物 (6)	(29)	第 39 図 11 号住居跡出土遺物	(53)
第 11 図 1 号住居跡 (1 号貝塚)	(29)	第 40 図 13 号住居跡	(53)
第 12 図 1 号住居跡 (1 号貝塚) 出土遺物	(30)	第 41 図 7・14 号住居跡	(54)
第 13 図 2・3 号住居跡 (2・3 号貝塚)	(32)	第 42 図 2 号土坑	(55)
第 14 図 2 号住居跡出土遺物	(33)	第 43 図 10 号土坑	(55)
第 15 図 3 号住居跡出土遺物	(33)	第 44 図 10 号土坑出土遺物	(56)
第 16 図 10 号住居跡	(34)	第 45 図 6・7・22・23・24 号 ピット	(57)
第 17 図 10 号住居跡出土遺物	(35)		
第 18 図 12 号住居跡	(36)	第 46 図 5・6・8・9・11 号土坑	(59)
第 19 図 12 号住居跡出土遺物	(36)	第 47 国 6 号土壙出土遺物	(60)
第 20 国 15 号住居跡・14 号土坑 ・14 号土坑出土遺物		第 48 国 9 号土壙出土遺物	(60)
	(37)	第 49 国 1 号溝 A・B(道状遺構)	(61)
第 21 国 15 号住居跡出土遺物	(38)	第 50 国 2 号溝 (道状遺構)・出土遺物	(62)
第 22 国 3・4 号土坑	(39)		
第 23 国 3 号土坑出土遺物	(39)		
第 24 国 12 号土坑	(40)		
第 25 国 12 号土坑出土遺物	(40)		
第 26 国 13 号土坑	(41)		
第 27 国 13 号土坑出土遺物	(42)		
第 28 国 15 号土坑	(43)		
第 29 国 15 号土坑出土遺物	(44)		

## 表目次

表 1	周辺の遺跡一覧	(4)	表 8	2号古墳出土遺物観察表	(49)
表 2	遺構外出土遺物観察表	(29)	表 9	1号方形周溝墓出土遺物観察表	(49)
表 3	1号貝塚 A 地点貝組成	(31)	表 10	11号住居跡出土遺物観察表	(53)
表 4	1号貝塚 B 地点貝組成	(31)	表 11	10号土坑出土遺物観察表	(56)
表 5	2号貝塚貝組成	(33)	表 12	6号土壙出土遺物観察表	(58)
表 6	3号貝塚貝組成	(34)	表 13	9号土壙出土遺物観察表	(61)
表 7	1号古墳出土遺物観察表	(47)	表 14	2号溝出土遺物観察表	(62)
			表 15	1~3号貝塚貝殻長幅分布表	(66)

## 写真図版

図版 1	1 赤弥堂遺跡東地区全景航空写真	2 7号住居跡セクションE→
図版 2	1 遺跡調査前全景	3 8号土坑セクションW→
	2 1・2・3号住居跡（貝塚）全景	4 9号住居跡セクションE→
図版 3	1 機材搬入状況	5 同 炉
	2 トイレ設置状況	図版 10 1 9号住居跡完掘全景
	3 テント設営状況	2 10号住居跡完掘全景
	4 遺構確認作業状況	図版 11 1 10号住居跡セクションE→
	5 遺構検出状況 E→	2 同 遺物出土状況全景
図版 4	1 遺構確認状況中央部分	3 同 遺物出土状況 1
	2 遺構確認状況中央部分から西側	4 同 遺物出土状況 2
図版 5	1 遺構確認状況西側	5 同 遺物出土状況 3
	2 基本層序中央部南壁	6 同 遺物出土状況 4
図版 6	1 1号住居跡（1号貝塚）貝層検出状況	7 同 炉セクションS→
	2 同 セクションN→	8 同 炉完掘状況
	3 同 A貝塚出土状況	図版 12 1 11号住居跡全景
	4 同 A～D貝塚出土状況	2 同 セクション
	5 同 D貝塚出土状況	3 同 ピット1セクションS→
図版 7	1 2・3号住居跡（2・3号貝塚）	4 同 ピット3・炉セクションS→
	2 同 セクションW→	5 同 ピット4セクションW→
	3 同 セクションN→	図版 13 1 12号住居跡全景
	4 2号住居跡A・B貝塚出土状況	2 同 セクション
	5 同 B貝塚出土状況	3 13号住居跡セクション1
図版 8	1 2号住居跡A貝塚出土状況	4 同 セクション2
	2 3号住居跡貝塚出土状況	5 同 炉セクション
	3 同 ピットセクションN→	図版 14 1 13号住居跡全景
	4 4号住居跡セクションE→	2 14号住居跡全景
	5 4号住居跡全景	図版 15 1 14号住居跡ピット1セクション
図版 9	1 7・14号住居跡、8号土坑完掘全景	2 15号住居跡遺物出土状況

- 3 15号住居跡・14号土坑全景
- 4 同 セクション
- 5 同 調査風景
- 図版 16 1 1号古墳全景
- 2 同 セクション東側
- 3 同 セクション西側
- 4 同 セクション全体
- 5 同 調査風景
- 図版 17 1 2号古墳全景 航空写真
- 2 同 東側セクション
- 3 同 西側セクション
- 4 同 完掘E→
- 5 同 航空写真撮影実施状況
- 図版 18 1 1号方形周溝墓全景
- 2 同 南東セクション
- 3 同 南西セクション
- 4 同 北西セクション
- 5 同 遺物出土状況
- 図版 19 1 1・2号土坑全景
- 2 2号土坑セクションN→
- 3 同 セクションE→
- 4 3号土坑セクション
- 5 同 完掘全景
- 図版 20 1 4号土坑
- 2 5号土坑
- 3 6号上塙確認状況(石塔検出状況)
- 4 同 セクションS→
- 5 同 人骨出土状況
- 図版 21 1 9号土塙
- 2 同 セクション
- 3 同 人骨出土状況近景
- 4 11号土坑セクションS→
- 5 同 完掘全景N→
- 図版 22 1 12号土坑完掘全景
- 2 同 セクションW→
- 3 同 遺物出土状況
- 4 同 遺物出土状況近景
- 5 13号土坑完掘全景
- 6 同 セクションSW→
- 7 同 遺物出土状況
- 8 15号土坑セクションE→
- 図版 23 1 15号土坑完掘全景
- 2 同 遺物出土状況
- 3 1・2号炉セクション
- 4 同 完掘全景
- 5 3号炉完掘全景
- 6 1号ピット完掘全景
- 7 2号ピット完掘全景
- 8 6号ピット完掘全景
- 図版 24 1 7号ピット完掘全景
- 2 22号ピット完掘全景
- 3 1号溝(道状遺構)硬化面
- 4 同 セクションN→
- 5 同 完掘全景
- 図版 25 1 2号溝(道状遺構)全景
- 2 同 セクションIN→
- 3 同 セクション2S→
- 4 3号溝セクション
- 5 作業風景(杭打設状況)
- 図版 26 遺構外出土遺物(1)
- 図版 27 遺構外出土遺物(2)
- 図版 28 遺構外出土遺物(3)
- 図版 29 遺構外出土遺物(4)
- 図版 30 遺構外出土遺物(5)
- 図版 31 遺構出土遺物(1)
- 図版 32 遺構出土遺物(2)
- 図版 33 遺構出土遺物(3)
- 図版 34 遺構出土遺物(4)
- 図版 35 遺構出土遺物(5)
- 図版 36 遺構出土遺物(6)

# 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

1995（平成7）年2月、新治村（当時）教育長宛に茨城県土浦土地改良事務所から、坂田地区において県管轄地帯総合土地改良事業を計画しており、その予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が提出された。現地踏査を行ったところ、包蔵地、貝塚、古墳群の存在が確認され、試掘確認調査が必要である旨を回答した。2002（平成14）年8月、茨城県土浦土地改良事務所から、埋蔵文化財の有無と遺跡が存在した場合の取扱についての照会が提出された。それを受け、同年11月に赤弥堂遺跡の北側について試掘・確認調査を行った。結果、埋蔵文化財は確認されなかった。

2006年、土浦市との合併後に計画が具体化し、6月に現地踏査、2007（平成19）年2月に赤弥堂遺跡の東側について、遺跡の範囲や密度、性格を把握するための確認調査を行った。翌2008（平成20）年3月には、赤弥堂遺跡の西側から事業区域西端の坂田峯の台古墳群にかけて試掘確認調査を行った。

試掘・確認調査の結果をもとに、茨城上浦上地改良事務所、土浦市産業部耕地課と協議を行い、道路となる箇所について、記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。

2008年3月25日、茨城県知事と土浦市長とで覚書を締結し、同年7月、茨城県知事と土浦市長で協定書を締結した。

文化財保護法関連では、2008年6月17日付けで茨城県土浦土地改良事務所長より遺跡の発掘届（文化財保護法第94条）が市教育委員会に提出され、6月27日付けで茨城県教育長宛に進呈した。発掘調査は有限会社勾玉工房 Mogi が実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査の通知（文保法第92条）を、8月25日付けで茨城県教教育長宛に進呈した。

## 第2節 調査の経緯

### 1 発掘調査

半成20年9月24日 本日より調査を開始する。機材の搬入、テント設営、トイレ搬入等。調査前全景写真撮影を行う。教育委員会黒澤氏現地にて調査の打ち合わせを行う。

10月2日 雨天続きで調査が中断していたが、本日より再開する。遺構検出作業を行う。

7日 遺構検出状況の写真撮影を行った後、1・2号古墳の掘り下げに着手。遺構調査に入る。平行してグリッド杭の打設を実施する。

9日 1・2号溝、1号方形周溝墓、4・12・13号住居跡、1・2号ピットの掘り下げに着手する。

15日 1号古墳の掘り下げを終了。終了写真撮影を行う。1号から12号までの住居跡調査に着手する。また、セクションの実測作業に着手。3号土坑、4号住居跡セクション、6号土壤遺物分布図の作成を行う。

16日 基本層序の観察坑を設ける。1号方形周溝墓の調査を行い平面図の実測に取りかかる。13号住居跡まで調査を進める。

20日 遺物包含層の調査を開始する。平行して各遺構のセクション写真撮影。2号古墳の実測を開始する。

23日 1・2・7・11・13号住居跡セクションの実測を行う。1・2号炉の調査を開始する。

28日 15号住居跡、1・2号溝、1号方形周溝墓、10号住居跡平面図作成。

31日 天気に恵まれ、写真撮影を中心に行作業を進める。4号住居跡完掘全景、1・2・3・7・9・10・12・13・14号住居跡セクション、2・3・5・9号上坑セクション並びに完掘状況、1号溝、1号方形周溝墓完掘写

真を実施する。10・15号土坑掘削を進める。

11月4日 9・10・11・15号住居跡掘削継続。10号住居跡遺物出土状況並びに炉の写真撮影を実施する。

10日 全景写真の撮影を航空撮影で実施する。写真撮影終了後、貝塚の貝採取に取りかかる。各遺構の終了写真撮影を実施する。

11日 貝塚の貝採上げを終了。各遺構の個別写真並びに終了平面図の作成、住居跡掘り方調査を終了して、本地区的調査を終了する。同日、教育委員会より調査終了の確認を得る。

## 2 整理作業

平成20年12月5日 水洗い作業を開始する。平行して図面の整理、写真の整理を開始する。

10日 水洗いが終了した遺物より、注記作業に取りかかる。

25日 土器水洗い終了。貝の洗浄を開始する。

平成21年1月18日 注記作業を終了し、貝の洗浄が終了した分より任意サンプルを抽出し遺構別貝の計測作業にとりかかる。

25日 出土遺物の分類作業を開始する。

2月10日 遺物の選別を終了し、台帳を作成する。

11日 遺物接合、実測、採寸を開始する。遺物分類に平行して、遺物原稿の執筆を開始する。

25日 遺構図面修正を開始する。平行して遺物のデジタルトレースを開始する。

3月7日 報告書の編集を完了する。

8日 印刷屋へ入稿する。

10日 初項原稿の校正を実施する。

12日 2校原稿修正を行う。

17日 報告書刊行。教育委員会に納品する。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1図）

赤弥堂遺跡は、土浦市下坂田1,350-1外に所在する。この遺跡の所在する上浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置し、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部は古鬼怒川により形成された桜川低地（現在の桜川流域）、東部には霞ヶ浦の上浦入り、南部は筑波稲敷台地から成り立っている。周辺市町村としては市域の北部は石岡市と接し、北部から東部にかけかすみがうら市と接する。西部はつくば市、南部は牛久市や稻敷郡阿見町と接している。

今回調査が実施された赤弥堂遺跡は、桜川北岸の標高26～27mの新治台地上の縁辺に位置している。この遺跡がある坂田地区は、およそ常磐自動車道の西側で国道125号の南側に広がる地域であり、市内でも有数な畑作地帯で、特に梨の栽培や花卉栽培が盛んに行われている。細かく見れば坂田地区の東側が下坂田、西側が上坂田となる。下坂田の集落は台地上に集まり、上坂田の集落はおよそ台地上にまとまっている。

### 第2節 歴史的環境（第1図）

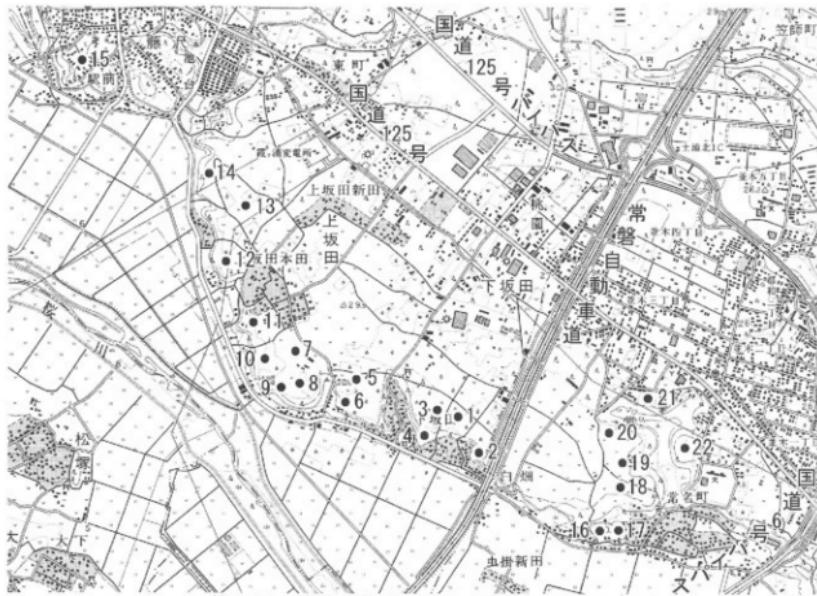
以下は、赤弥堂遺跡の周辺の遺跡で、試掘確認調査を含め調査のなされた遺跡を中心に取り上げ、時代順にその概要を述べてみたい。

**旧石器時代** この時代の遺構が明確な遺跡は、山川古墳群（18）の第2次調査や神明遺跡（19）の第4次調査を除いて今のところない。特に前者では層位の異なる石器集中地点を3ヶ所確認した。これらの内、最も下層の石器集中地点からは台形様石器や楔形石器が出土し、周囲からは炉跡も確認された。同炉跡出土炭化物の年代測定を実施したところ、今から約3万2千年前のものであると測定された。市内でも最も古い石器集中地点の一例といえ、炉跡の確認と関連して興味深い事例といえる。

**縄文時代** この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、馬場先貝塚（3）、中台遺跡・中台貝塚（5）、下坂田塙台遺跡（9）、上坂田寺裏貝塚（11）、上坂田貝塚（14）、神明遺跡（19）がある。中台遺跡・中台貝塚や上坂田貝塚は、筑波大学により踏査や確認調査等が実施された。前者では地点貝塚が環状に巡る様子が指摘され、ヤマトシジミを主体とする後期（加曾利B式期）の貝層が確認された。後者ではハイガイを主体とする前期（関山式期）の住居跡内貝層が調査された。神明遺跡では数次にわたる調査で、中期（加曾利E式期）の集落跡の存在が明らかになっている。同遺跡では中期（加曾利E式期）の土坑からサルボウやハマグリを中心とする地点貝塚が確認された。馬場先貝塚、上坂田寺裏貝塚についても、ハイガイを主体とする前期（関山式期）の地点貝塚とされ、坂田地区の台地上に前期の地点貝塚が広く点在する様子が理解できる。このほか、坂田地区における集落遺跡の展開状況について、本事業に伴う平成18・19年度の試掘確認調査や平成20年度の赤弥堂遺跡東・中央区の発掘調査によりその輪郭が明らかにされつつある。それは、前期の地点貝塚の点在以外に、中期の集落跡が濃密に広く展開することが指摘できる。また、中台遺跡・中台貝塚では中期から後・晚期に及ぶ地点貝塚を伴う集落跡が広く展開するといえる。

**弥生時代** この時代の遺跡としては、山川古墳群（18）の第3次調査で住居跡2軒と、北西原遺跡（20）の第2次調査で住居跡が1軒調査されている。本事業の試掘確認調査の結果では、赤弥堂遺跡（1）の西側や下坂田塙台遺跡（9）で僅かながら弥生土器片が採集されているのみである。坂田地区から常磐自動車道を挟んだ常名地区にかけての台地上には、弥生時代の痕跡が非常に乏しいことが想定される。

**古墳時代** この時代の遺跡は多く、特に古墳や古墳群の存在が特徴的であり、現状でも台地の縁辺に墳丘の



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1/25000 (国土地理院発行 1/25,000に加筆)

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代						備考
		旧石器	縄文	赤井	古墳	真良・平良	中世	
1	赤弥堂遺跡	○		○	○	○		H14・18・19年度試掘確認調査
2	石橋古墳			○				
3	馬場先貝塚	○						H18年度試掘確認調査、坂下坂田鹿島前貝塚
4	积迎久保古墳群			○				
5	中台遺跡・中台貝塚	○				○		H12年度調査、H19年度試掘確認調査、坂下坂田貝塚
6	坂田台山古墳群			○				H19年度試掘確認調査
7	武者塚古墳群			○				S48年度調査、市指定史跡
8	下坂田塙台遺跡			○	○			H19年度試掘確認調査
9	坂田塙台古墳群			○				H19年度試掘確認調査
10	峯台館跡					○		
11	上坂田寺裏貝塚	○						
12	坂田立野古墳群			○				
13	塚原古墳群			○				
14	上坂田貝塚	○						S56～57年度調査、旧上坂田北部貝塚
15	藤沢城跡					○		
16	瓢箪塚古墳			○				埋蔵
17	常名天神山古墳			○				H2年度測量調査、市指定史跡
18	山川古墳群	○		○	○	○		H7・15年度調査
19	神明遺跡	○	○			○		H9・13～15年度被調査
20	北西原遺跡・北西原古墳群			○				H15～7・14年度調査
21	西谷津遺跡			○	○			H14年度調査
22	弁才天遺跡			○	○			H18年度調査、埋蔵

残る古墳が比較的の残り、古墳群を形成している。坂田地区には、石橋古墳（2）、糸迦久保古墳群（4）、坂田台山古墳群（6）、武者塚古墳群（7）、坂田塙台古墳群（9）、坂田立野古墳群（12）、塙原古墳群（13）があり、常名地区には常名天神山古墳（17）、過去に湮滅した瓢箪塙古墳（16）、山川古墳群（18）、北西原古墳群（20）が存在する。石橋古墳に近接する今回の赤弥堂遺跡東区の調査でも塙丘の削平された古墳が検出され、本来は古墳群として存在するものといえる。坂田台山古墳群は3基の古墳からなり、第1号墳は昭和39年に國學院大學と十浦第二高等学校により発掘調査が実施された。武者塚古墳群は2基の古墳からなり、この内の武者塚古墳は昭和58年に筑波大学によって発掘調査が実施され、特異な形態の石室を持つ終末期の古墳であることが判明した。出土品には銀製帶状金具や飾太刀、そしてみずらも発見され、現在県指定考古資料となり、古墳自体は市指定史跡となる。坂田塙台古墳群は合計13基の古墳で構成され、第2号墳は通称「武具八幡古墳」とも呼ばれ、安政元年に武具類が出土し、その遺物と状況を記した古文書が現在も地元に残されている。第11号墳は本古墳群内最大のもので、全長およそ30mを測る前方後円墳であり、平成20年に筑波大学によって測量調査がなされた。このほかにも、本事業に伴う試掘確認調査で塙丘が削平された古墳が多数確認されている。坂田立野古墳群は4基の古墳からなり、塙原古墳群は2基の古墳からなる。常名地区の常名天神山古墳は全長90mの前方後円墳で、5世紀初め頃の古墳と想定され、現在市指定史跡となる。その北側に広がる山川古墳群では3次にわたる調査で、33基もの古墳が確認され、前期から終末期の古墳が検出された。その中でも20基を超す大小様々な前期の方墳群の存在は特筆される。そして、同一台地上のより北側には北西原古墳群が存在し、終末期の方墳4基で構成される。

この時代の集落跡としては、赤弥堂遺跡（1）、中台遺跡（5）、神明遺跡（19）、北西原遺跡（20）、西谷津遺跡（21）、弁才天遺跡（22）で確認されている。特に北西原遺跡を中心にその周辺の神明遺跡では数次にわたる調査で、100軒以上もの前期の竪穴住居跡が検出された。西谷津遺跡や弁才天遺跡でも同時代の集落跡が検出され、前期や後期の竪穴住居跡が目立って確認されている。

**奈良・平安時代** この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、下坂田塙台遺跡（9）、西谷津遺跡（21）、弁才天遺跡（22）で確認され、竪穴住居跡によって集落跡が形成されている。遺構の時期が明確なのは西谷津遺跡や弁才天遺跡で、前者は8世紀前半から9世紀中葉まで継続する集落跡であり、後者では8世紀前半から9世紀後半までの竪穴住居跡60軒以上で構成される集落跡であることが確認され、掘立柱建物跡もまとまって検出された。弁才天遺跡は市内でも数少ない8世紀代の規模の大きな集落跡といえ、同期の多彩な出土遺物が出土している。出土遺物としては、銅製品として皇朝十二錢の一つである和同開珎、杏葉、帯飾りなどがあり、鉄製品としては匙や鏽先などが見られる。縁釉陶器や灰釉陶器も出土し、「億万」などと書かれた墨書き土器も出土している。

**中世以降** この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、中台遺跡（5）、峯台館跡（10）、藤沢城跡（15）、山川古墳群（18）、神明遺跡（19）がある。赤弥堂遺跡や中台遺跡の試掘確認調査では性格不明の溝跡や大型の掘り込みが確認され、内耳土器などが出土している。峯台館跡は台地縁辺部をくぐるように土塁が明瞭に巡り、その中に存在する坂田塙台古墳群第11号墳も土塁の一部として利用されている様子が窺える。坂田地区的台地北西端と谷を挟んだ対岸には藤沢城跡がある。その範囲は明瞭ではないが、現在の藤沢集落の多くを含むものと思われ、その中には一部上塁や堀跡が残る。常名地区では山川古墳群の第2・3次調査や神明遺跡の第1・3・4次調査の成果で、東西長125mで南北長103mの方形の溝で囲まれた方形館跡と考えられる遺構が確認されている。方形の区画溝内には掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、竪穴式遺構などが検出され、遺物は少ないものの鎌倉時代の上質土器小皿や竈泉窯系青磁の画花文碗や常滑産陶器片、錢貨が出土している。

このほか、近世が主体となる遺跡はないが、赤弥堂遺跡（1）、神明遺跡（25）などで溝跡や墓坑が確認されている。

#### 参考文献

- 増田耕一 編 1981『筑波古代地域史の研究—昭和54～56年度文部省特定研究費による調査研究概要一』筑波大学  
新治村教育委員会 1986『図説 新治村史』  
新治村教育委員会 1986『武者塚古墳』  
前田 蘭 編 1991『「古墳ケ浦湾」沿岸貝塚の研究 昭和63年度～平成2年度文部省特定研究費による  
調査研究概要一』筑波大学  
土浦市教育委員会 1998『神明遺跡（第1次・第2次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化  
財発掘調査報告書 第5集』  
茨城県教育委員会 2001『茨城県遺跡地図』  
土浦市教育委員会 2002『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第5次調査）－土浦市総合運動公園建設事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集一』  
土浦市教育委員会 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡（第6次調査） 神明遺跡（第4  
次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集一』  
土浦市教育委員会 2004『山川古墳群（第2次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘  
調査報告書 第8集一』  
土浦市教育委員会 2007『山川古墳群（第3次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘  
調査報告書 第10集一』  
土浦市教育委員会 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡（第5次調査）－土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋  
蔵文化財発掘調査報告書 第4集』

## 第3章 調査の方法と標準堆積土層

### 第1節 調査の方法(第2図)

発掘調査は、土浦市教育委員会において確認調査、並びに表土掘削作業が終了していたために、グリッド杭の打設並びに遺構確認精査作業より開始した。

グリッドは調査区域の形状が東西に長い道路幅であるために、道路の主軸方向に合わせて、任意の5m グリッドを設定した。その呼称は南北方向に北から南に A・B・C・・・、東西方向は西から 0・1・2・3・4・・・28 グリッドとした。調査終了後に任意杭の D-1 及び D-2 杭に座標を取り付け、D-1 が  $X = 11501.230$ 、 $Y = 31033.910$ 、D-2 が  $X = 11497.194$ 、 $Y = 31036.850$  とした。尚、基準の BM は E-0 グリッド横に 26.802m で設定した後、調査区内に BM1 = 26.700m、BM2 = 26.800m、BM3 = 27.700m の 3カ所を設定し測量の基準とした。

遺構調査は東側より開始し順次西へと調査を進めた。当初予想されていた遺構は縄文時代住居跡 6 基(内 3 基は貝塚)、古墳 2 基、古墳時代前期住居跡 1 軒、時期不明大形土坑 1 基、炉 1 基、溝 4 条、包含層 1 力所であったが、精査の結果、縄文時代住居跡 5 軒(貝塚 3 基)、古墳時代住居跡 6 軒、方形周溝墓 1 基、古墳 2 基、溝 3 条、炉跡 3 基、上坑 14 基、小ピット 6 基、遺物包含層 1 力所が検出され、遺構の数は上坑を中心に増加した。

各遺構は確認後に全体での写真撮影を行った後にセクション用のベルトを残して掘り下げを行った。セクション並びに遺構の実測は 20 分の 1 を基準に行った。



第2図 遺跡の地形とグリッド配置図 1/1000

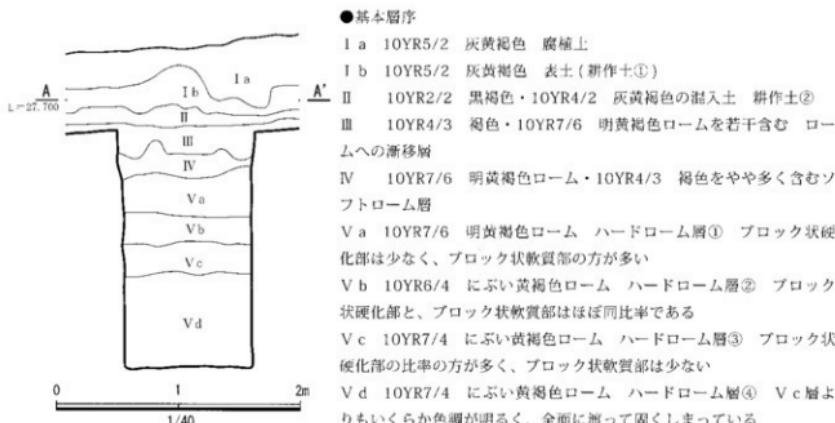
写真撮影は35mm白黒フィルム及びカラーリバーサルを用い行い、600万画素のデジタルカメラでの記録撮影も平行して実施した。遺物の取り上げは、覆土中のものは一括で取り上げ、床面直上の遺物については記録した後に取り上げた。

貝層は当初コラムサンプル採取を予定したが、覆土中に廃棄された貝の総量が比較的少量と判断されたために全量採取を行うことにした。従って、遺構は貝を残して掘り下げを進め、住居内に廃棄された貝層の範囲を記録した後に貝の採取を行った。

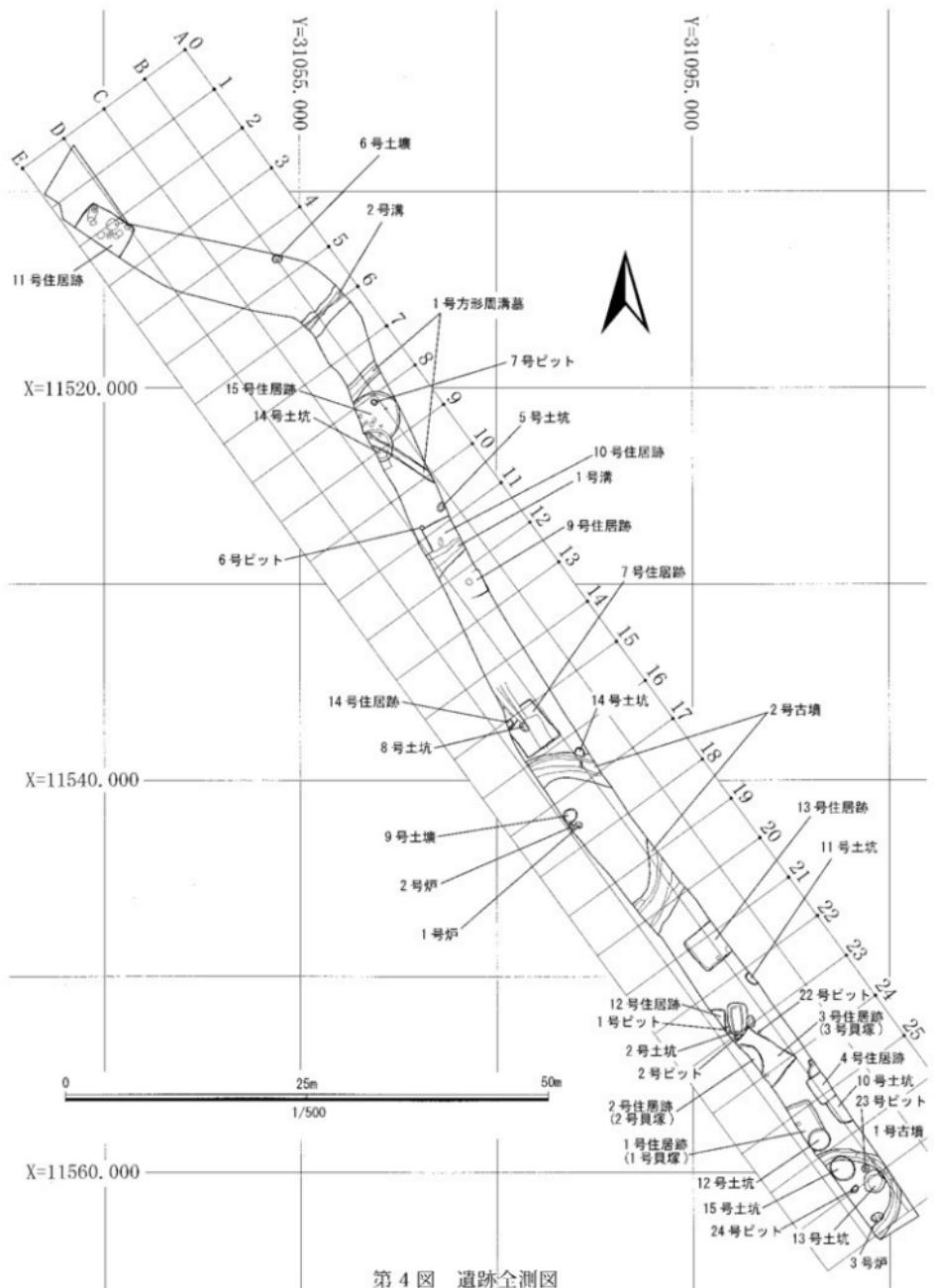
調査終了全体図は200分の1で実測を行い、終了の全景写真はラジコンヘリコプターによる空撮を実施した。

## 第2節 標準堆積土層（第3図 図版5）

本遺跡の標準堆積土層は調査区の中央やや東よりのC-22 グリッド調査区域南側壁部分で行った。基本的な層序は全域にわたりほぼ同様で、表土層の下に旧耕作土層が確認され、その直下に第Ⅲ層ローム漸移層が確認されこの土層が遺構確認面となっている。第Ⅳ層のソフトロームまでの厚さはおよそ 20cmを測る。以下V層ハードローム層は綿まりの状況及び色調から a～dまで4層に細分される。



第3図 標準堆積土層



第4図 遺跡全測図

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 検出された遺跡の概要

上器・土製品・石器は次節に示すとおり、縄文時代草創期から縄文時代晩期にわたるもので縄文土器では関東地方の編年に即した遺物が満遍なく出土している。このことより、遺跡が縄文人にとって長期間に渡り好環境にあったことを物語っている。人々は縄文時代後半にほとんど姿を消している。続く弥生時代では遺物の出土が見られるが量的には少ない。古墳時代では前期に集落や方形周溝墓の存在が確認されており、再びその足跡を見ることができる。中期以降になると古墳が造られて古墳が群集化する傾向が見られる。しかしながら奈良・平安時代では全く遺物遺構とともに検出されず、再び確認できる時期は中世以降である。近世になり墓や道が造られ、崖下の集落から耕作地や墓域に向かうための道が造られたものと判断される。

### 第2節 遺構外出土遺物

#### 第1項 遺構外出土遺物の概要

本遺跡より出土した遺物の礫及び五輪塔・宝篋印塔を除く遺物総量は 104728.5 g で、このうち縄文上器は 64851.4 g の山上があり、全体の 61.9% に及ぶもので、ほぼ本時代を中心とする遺物が中心である。さらにサンプル採取を行っている為に全量の重量把握ができていない縄文時代前期の貝を含めると、縄文時代の遺物が全体の 90% を超える分量となる。

弥生時代の遺物は 1 点のみ検出されているものの、明瞭な資料とはいえない。

続く古墳時代では、遺構出土の遺物では十師器・土製品・滑石製模造品があるが須恵器の出土はなかった。

奈良・平安時代の遺物はやはり明瞭な遺物の出土はない。僅かに常縦型と思われる甕の細片が検出されているのみである。

中世では石塔類として五輪等の空風輪・水輪・宝篋印塔・かわらけが出土している。

近世の遺物では中世末から近世初頭と想定される志野焼皿 1 点と、陶磁器類が少量出土しているのみである。出土した遺跡の概観を語る上で、次項で遺構外出土遺物を分類し、その分類を基に各遺構の位置付けを行う。

#### 第2項 遺構外出土遺物を基にした遺物の分類

本遺跡を概観するにあたり、遺物の水洗い注記終了後に全遺物の分類を行った。これらの遺物を群・類・種別に分類し遺構外出土遺物をもって遺跡の内容を把握することにする。分類結果より本遺跡出土の遺物を代表する 234 点の遺物を抽出し、以下のように分類した。

##### 第1群土器 縄文時代草創期

###### 第1類 草創期井草式直前段階の上器

###### 第2類 夏島式土器

###### 第3類 その他の燃糸文系上器群

##### 第2群土器 縄文時代早期

###### 第1類 田戸下層式土器

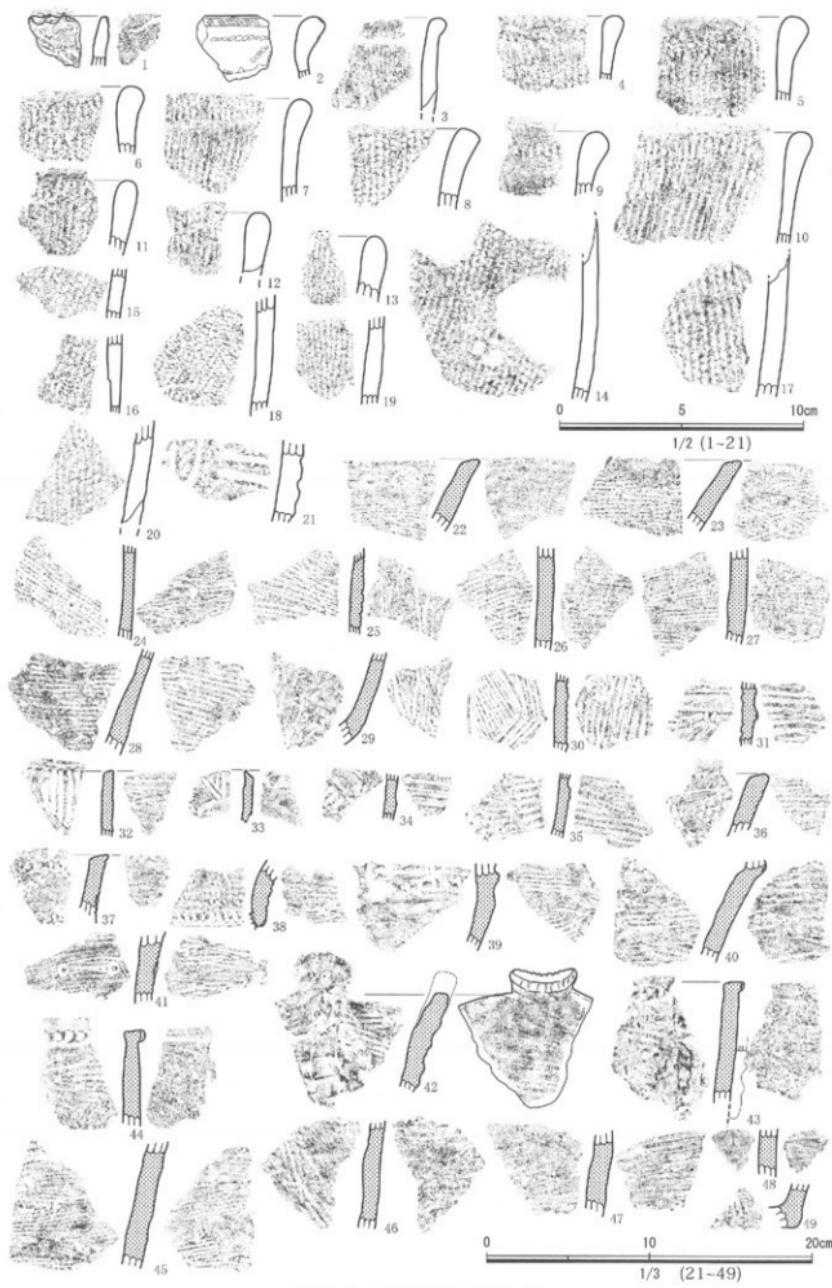
###### 第2類 子母口式土器

###### 第3類 野島式土器

###### 第4類 鶴ヶ鳥台式土器

##### 第3群土器 縄文時代前期

- |                  |             |
|------------------|-------------|
| 第 1 類 関山 I 式土器   | 第 2 類 陶器    |
| 第 2 類 関山 II 式土器  | 第 3 類 石塔    |
| 第 3 類 黒浜式土器      | 第 12 群上器 近世 |
| 第 4 類 浮島式土器      | 第 1 類 陶磁器   |
| 第 5 類 十三菩提式土器    |             |
| 第 4 群上器 繩文時代中期   |             |
| 第 1 類 五領ヶ台式土器    |             |
| 第 2 類 阿玉台式土器     |             |
| 第 3 類 勝坂式土器      |             |
| 第 4 類 中峠式土器      |             |
| 第 5 類 加曾利 E 式土器  |             |
| 第 5 群上器 繩文時代後期   |             |
| 第 1 類 堀之内式土器     |             |
| 第 2 類 加曾利 B 式土器  |             |
| 第 6 群上器 繩文時代晚期   |             |
| 第 1 類 大洞 A 式並行土器 |             |
| 第 7 群土器 土製品      |             |
| 第 1 類 土器片鍊       |             |
| 第 2 類 土製円盤       |             |
| 第 8 群 石 器        |             |
| 第 1 類 打製石斧       |             |
| 第 2 類 磨製石斧       |             |
| 第 3 類 石 匙        |             |
| 第 4 類 磨 石        |             |
| 第 5 類 凹 石        |             |
| 第 6 類 敲 石        |             |
| 第 7 類 絆石製石製品     |             |
| 第 8 類 石 簪        |             |
| 第 9 類 剥片石器       |             |
| 第 10 類 楔         |             |
| 第 11 類 大 珠       |             |
| 第 9 群土器 弥生土器     |             |
| 第 10 群 古墳時代の土器   |             |
| 第 1 類 古墳時代前期     |             |
| 第 2 類 古墳時代中期     |             |
| 第 3 類 中期末用～後期初頭  |             |
| 第 11 群土器 中 世     |             |
| 第 1 類 かわらけ       |             |



第5図 遺構出土遺物(1)

## 第1群土器 縄文時代草創期

### 第1類 草創期井草式直前段階の土器 (第5図 図版26)

a種 1・2

1は赤褐色を呈し胎土が緻密で薄手の口縁部細片である。口唇部は指により摘まれたような整形を行うもので刻みを有する。勝田市原の寺遺跡出土遺物に類似する。口辺直下に僅かながら縄の側面圧痕らしき痕跡が観察される。無文系上器群・微隆起線文上器の可能性がある。口唇部の細片である為に明確ではないが、特殊な遺物であることより問題提起としてここに提示しておく。

2は胎土中には多量の白色粒子(石英・長石)が混入している。口唇部に異方向の縄文が施文され下位に斜方向の原体側面圧痕により文様構成を意図している。本遺物は形状及びその特徴から他の土器と明瞭に差異が認められるものである。類似するものとしては井草式直前段階の遺物の可能性がある。

b種 3・4

本種の土器は口縁部が外反し、口縁直下に指による押さえが観察される。器形は小形で胎壁も薄い。胎土中には石英や長石の粒子を多量に混入する。3では口唇頂部に横方向の撚糸が施文され、胸部には縱方向の撚糸が施文される。4は口唇部にRLの縄文が施文され胸部には縄文が縱方向に施文される。やはり井草式直前段階の資料と判断される。

### 第2類 夏島式土器 (第5図 図版26)

a種 5～10

本種は口縁が僅かに外反肥厚する土器で、第2類の遺物とは異なり口唇直下の指による押さえは観察されない。撚糸は口唇部にまで施文されるもので、異方向の縄文の施文もない。胎土は第2類a種の上器と同様に石英や長石の粒子を多量に混入する。口縁部の形状から判断して夏島式でも古い段階のものと判断される。6・7は断面形が丸みを帯びるが8のみ上端部が平坦になる。b種に含めるべきか、やや新しくなるものと考えられる。夏島1式土器を本類とした。

b種 11～13

本種は口縁部の外反が殆ど見られず、直口縁になる点が前種と異なる。縱方向の撚糸の施文状況は前種と同様であるが比較的砂粒の混入は少なくなる。夏島式でも2段階に含まれるものと判断した。

### 第3類 その他の撚糸文系土器群 (第5図 図版26)

a種 14～20

本類は第2類a・b種に伴う上器の胴部片である。縱方向の撚糸が施文されるものであるが、15～16はやや薄手で砂粒の混入量が多い点より1類b種に伴う可能性がある。また、17～20はやや厚手となり器形もやや大形の深鉢と判断される。さらに砂粒の混入量もやや少なくなる点から第2類b種に伴う胴部片と判断される。

## 第2群土器 縄文時代早期

### 第1類 田戸下層式土器 (第5図 図版26)

a種 21

本種の土器は遺跡全体の遺物の中で1点のみ確認されている。21は所謂沈線文系の土器である。太い沈線により横位の平行線が描かれる。田戸下層式と判断した。

### 第2類 子母口式土器 (第5図 図版27)

a種 22・23

本種の遺物は口縁部が内削になるものである。何れも胴部には横方向の条痕が施文される。22では内面の条痕は浅く、23では口唇部に僅かな刻みが施され、内外面共に明瞭な条痕が施文される。胎土中には纖維の混入は微量で、特に23では白色の石英や長石・雲母を多量に含み纖維の混入は殆ど見られない。南関東地域における同時期の資料とは明らかに胎土の点で差異が認められる。

b種 24～29

第2類に伴う胸部及び胴部下半の資料である。24・25は23と同様の胎土で同一個体の可能性がある。29は尖底部の付近の破片で、想定される器形はやや細身と考えられる。

第3類 野島式上器 (第5図 図版27)

a種 30～35

胎土中に纖維の混入は殆ど見られない。何れも薄手の上器である。微隆起線により区画された内部に太い沈線が充填される。微隆起線が明瞭ではなく、沈線部分のみの構成となる33・35の破片もあるが、沈線が太く、繊細な手法より本類とした。やはり薄手で纖維の混入が殆ど見られることから県北地域に於いて見られる、東北地方南部の楓木下層式段階の影響を受けるものと判断される。

第4類 鶴ヶ島台式土器 (第5図 図版27)

a種 36～41

胎土中の纖維はやや明瞭で、36・37は口縁部の破片で口唇部はほぼ平坦に面取られる。口唇直下に沈線により区画された内部に角棒状の工具により刺突列が加えられる。また、36・37・39では沈線、微隆線の交点部分に円管状の刺突が加わる。また、40・41は胴部に段を有するもので、段上には刻みが施される。

b種 42～49

42は吸盤状の突起を有する波状口縁の破片である。内外面に条痕を有し、突起部より垂下する沈線にこれを円形に取り囲む押し引き文が施文される。厚さがあり、纖維の混入は明瞭である。43・44は同一個体と考えられる。直立する口縁の上端部には刻みを有する降帯が1条巡る。何れも纖維の混入量はやや少なく、砂礫の混入が多い。43には棒状の貼付文が垂下している。条痕は内外面共に浅い。常世式など東北地方の影響を感じさせる。45～48は胴部の破片である。内外面に条痕が施文され厚みがある。また纖維の混入も明瞭である。48には赤彩が施されている。49は底部の破片である。小形の平底で、外面には条痕が施文される。纖維が多い。本類の遺物は鶴ヶ島式上器でも後半段階の資料と考えられる。

第3群土器 繩文時代前期

第1類 関山I式上器 (第6・7図 図版27・28)

a種 50～52

口縁部の破片で、梯子状文様が描かれる。50は半截竹管による平行沈線を描いた後貝殻の復線によって刺突が加えられ梯子状の文様を構成させている。二ツ木段階の可能性も考えられるが、半截竹管の使用から関山式でも古い段階であろう。51・52は同様に半截竹管による平行沈線で梯子状の文様が描かれる口縁部の破片である。

b種 53・54

本種は口縁部の直下に降帯が2条巡り、口縁部文様帶を画している。文様帶には梯子状の文様が半截竹管の平行沈線によって描かれる。関山I式上器でも古い段階に含まれるものであろう。

c種 55～61

本種は半截竹管による平行沈線を描いた後、刺突を加えて梯子状の文様を描くものである。55・58・60に

は円形の貼付文が付される。55～59では直線を斜方向に描く梯子状の文様で、60では羊角状の曲線が描かれる。地文は無い。61では胴部の屈曲部に梯子状の文様が刻まれている。56・61では多段の環付末端(以下ループ文)が描かれる。56は4段のループ列の下に単節RLの縄文が施文される。58では文様部分に地文ではなく胴部に単節LRの縄文が施文される。59では無節LとRLの縄文が施文され羽状を構成している。61では梯子状文様の下位に多段のループ文が施文されるもので、上2列が左方向のループ、下5段が右方向のループと同一個体でループ文の施文方向を変えている。関山I式土器でもやはり古い段階と判断される。

#### d種 62～65

本種は半截竹管により平行沈線を描くものであるが前種の手法とは異なり、爪形状の刺突押し引き文が加わるものである。何れも口縁部の破片で62～64は波状口縁となる。62では口唇部には刻みが施されている。何れも梯子状の文様により菱形文を構成させるもので、62～65では円形の貼付文が付される。62では文様帶の下位に左方向のループ文が多段にわたり施文されている。いずれも文様帶部の破片である。

#### c種 66～68

66・67は接合資料である。68も同一個体の可能性がある。波状を呈する口縁で、波頂部には貼付文風の刻みが施される。口縁部文様帶ではなく、地文の上に口縁部付近のみに縱長の楕円形貼付文が施される。地文にはRLおよびLRの縄文を横帯施文させ、羽状を構成させている。関山I式土器と判断される。

#### f種 69～73

本種は半截竹管により曲線及び直線をあわせて描く土器である。69は口縁部の破片で地文にループ又は結節縄文が施文され円形の貼付文が施される。70は平縁の口縁で円形の貼付文が口唇部に付けられている。浅鉢若しくは台付の鉢形土器の口縁部であろうか、円形の文様を直線で放射状に連結させ、端部は羊角状に屈曲させている。地文には単節RLおよびLRの羽状縄文を施文している。71は胴部の破片である。平行沈線により羊角状の文様が描かれる。地文は器面が剥落して明瞭ではないが、複節の縄文が施文されている可能性がある。72は70同様の円形分文から放射状に平行沈線が連結される。地文には前々段合撫LRL(R)の縄文が施文される。73は円形文から平行線が連結される部分の小破片である。地文には縄文が施文されるが判読できない。関山I式段階である。

#### g種 74～76

本種は半截竹管による平行沈線を直線的に描くもので、曲線は用いられない種である。74は口縁直下に1条の沈線が巡り、直下に斜方向の平行沈線が描かれる。地文には0段多条のRLと無節Lによる羽状の縄文が施文され、縄文を区画するようにコンバス文が上下2段に描かれる。75では鋸歯状の平行沈線が描かれる地文には右と左のループ文が2段に施文され一部に0段多条のLR縄文が観察される。76はやや屈曲して内傾する口縁部の破片である。口縁部に沿って2条(3本)の平行沈線が巡り、屈曲部以下は斜方向の平行沈線が描かれる。地文には前々段合撫LRL(R)の縄文が施文される。関山I式段階の資料と判断している。

#### h種 77～83

コンバス文を施文するものを本種とした。77は口縁部の細片である。口唇直下にコンバス文が描かれる。地文は前々段合撫LRL(R)の縄文か。78・79は同一個体と判断される深鉢形土器胴部の大破片である。コンバス文が描かれ、地文には0段多条のRLと単節LRの縄文を横方向に交差に回転施文させ菱形の構成を行っている。78の下位にはループ文が描かれる。80は胴部屈曲部の大破片である。屈曲部の中央部分にコンバス文を横方向に描き、上下にこれを挟むように多段のループ文を施文する。上半では無節Lの縄文、下半では単節RLとLRの縄文が羽状に施文される。81は円筒状の器形を呈する小形の土器である。口縁直下にはループ

文が3段左・右・左と方向を変えて施文される上半部には0段多条のRL及び単節のLR繩文が羽状に横施文される。さらに下位にループ文を1条配した後、0段多条RLが施文される。胴下半にはコンパス文が1条巡る。82は肩曲部の破片である。肩曲部に4段のループ文が左・左・右・右の順に施文され、以下に0段多条のRL繩文が横方向に幅広く施文される。同文下半の最大径部分にコンパス文が横走する。83は胴部下半の接合部分の破片である。ループ文、0段多条のRL、2段のループ文、コンパス文の順に施文され、ループ文の下に右巻RR左巻LL組紐文が回転施文される。

本種の遺物はコンパス文の多用、組紐文の出現等から閑山I式新段階の資料と判断される。

#### 1種 84～95

繩文及びループ文のみを施文する一群を本種とした。84は口縁部の破片である。左方向のループ文が4段にわたり施文されている。85は直立気味の口縁部破片である。端部に環状のループを有する単節LR繩文を7段にわたり丁寧に横回転施文させている。施文の幅に変化をもたせることにより、下位に多段のループ状の効果を出している。86は円筒状の胴部破片である。単節LRと0段多条の繩文を交互に配し、菱形状の効果を出している。原体の幅は3cm程でやや幅広で平行に施文される。繩文帶の間には3段右・左・左のループ文が施文される。87は0段多条のRL及び同じく多条のLRを交互に配し菱形の効果を出すもので、端部に環状の処理を行っていない繩が用いられている。88は87同様に0段多条の繩によって菱形を構成するが、下半に端部を環状に処理した繩の端部を回転施文することによりループ状の文様を描出している。89は同様の0段多条の繩文を羽状に施文する胴部片である。端部に纖維束の圧痕が見られ端部自巻きの痕跡と考えられる。90は0段多条の繩文を羽状に施文するものであるが、上のLRの端部、下のRLの端部がそれぞれ環状に処理されたものが重なるように施文されており、結束繩文的な雰囲気を出している。91は僅かに外反気味に開く口縁部の破片である。口唇部直下よりRLの細かな単節繩文が粗く施文されている。92は平縁の口縁部の破片で、瘤条の突起が付される。口縁直下に単節RLとLRの繩文を羽状に施文する。89同様の纖維束の圧痕が見られ、端部自巻の繩が用いられる。RLの繩は上端部が環状の処理が行われている。93は太いRLの単節繩文が全面に施文され、口縁直下に以上のループ文が巡る。94・95は外反気味に開く口縁部の破片である。何れも口縁直下に無文部を有するもので、94では末端を環状に処理した単節RL、95では単節LRの繩文が施文される。

閑山I式の古段階より新段階に渡る資料が含まれるものと判断される。

#### j種 96

結節繩文を施文する破片である。補修孔が穿たれている。結節文は端部が閉じた8の字の繩を用いるもので、仮称結節回転B(上守2009)と称されるものである。3段にわたり施文され、1段ずつ方向を変えて4段にわたり施文されている。二ツ木段階から閑山I式古段階に多く見られることが指摘されており、本遺物も閑山I式の古段階の資料と判断される。

#### 第2類 閑山II式土器 (第7図 図版28)

##### a種 97

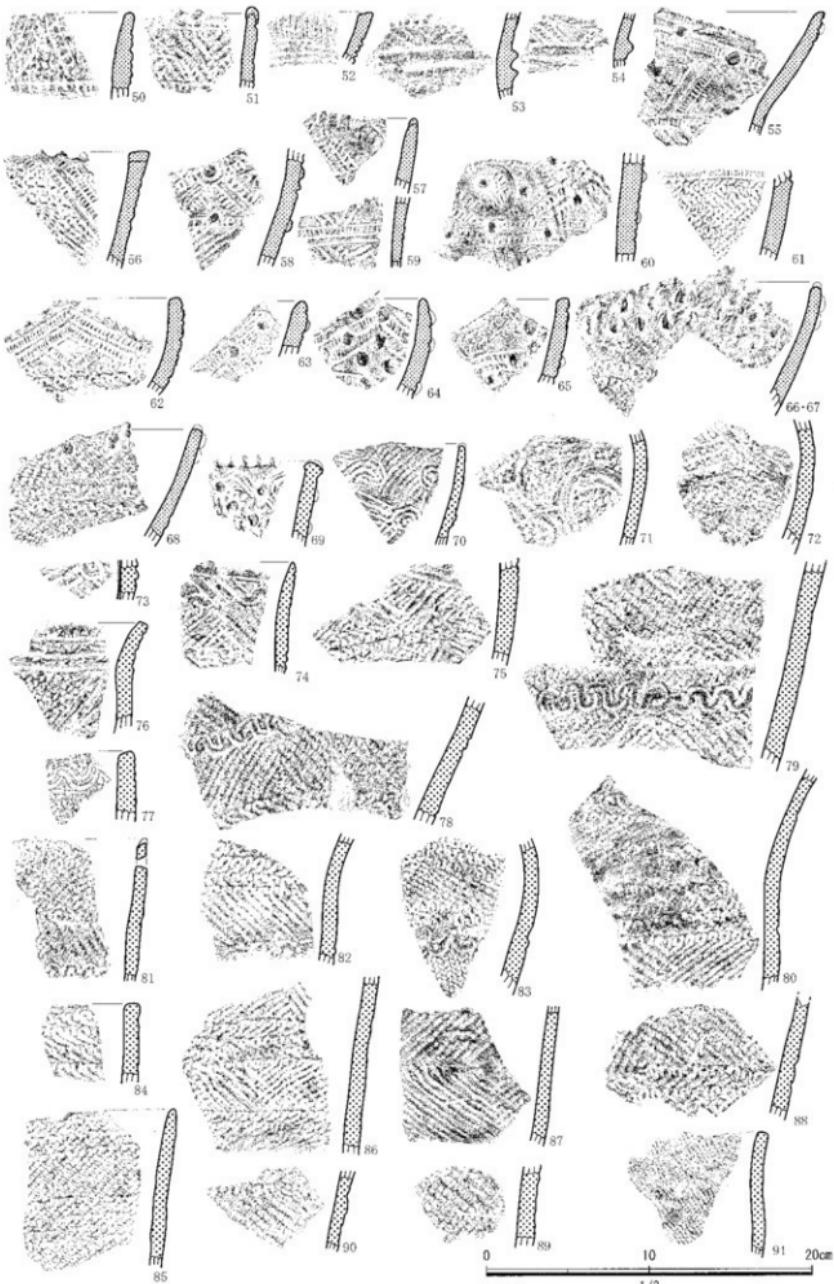
胴部が大きく括れるタイプの土器。括れ部にループ文が配される。下半には単節LR、上半には単節RLとLRの繩文により羽状構成を行う。器形より閑山II式とした。

##### b種 98

平縁の口縁で地文にLRの単節繩文を施した後に半截竹管により口縁直下に鋸歯状文様が描かれる。

##### c種 99

波状口縁を呈し双角状の突起を有する。繩文は単節RLの繩文が斜方向や縦方向に施文される。繩文の施文



第6図 遺構外出土遺物(2)

状況より関山Ⅱ式とした。

d種 100

胸部細片である。単節 RL 及び LR の縄文が羽状に施文された後、棒状工具による刺突列が 4 条施文される。同様の類例が不明であるが、縄文が小さく不鮮明な点より関山Ⅱ式に含めた。

e種 101～104

片口を有する土器を本種としてまとめた。101 は片口部の下端にまでループ文が施文され、半截竹管による鋸齒文が描かれる。102 は c 種に見られるような不規則で小粒の縄文が施文される。103 は片口部周辺に条線状の工具により鋸齒状の文様が浅く描かれる。104 は 102 同様の縄が施文される。片口部を有する器形より本種は関山Ⅱ式段階とした。

f種 105～110

組紐文を多用する七器群を本種とした。105・106 は右巻 LL 左巻 RR、107・108 は右巻 RR 左巻 LL である。109 は 0 段の糸を用いる右巻 II と左巻 rr と判断される。(山内は 0 段の糸を用いるものについての表記を示していないが、円筒式にその存在があることを述べている。) 110 は 105・106 同様の右巻 LL 左巻 RR の組紐を用いるもので、胸部括れ部分にはコンバス文が 1 条巡らされている。組紐文の多用から関山Ⅱ式にしたが、110 はやや古くなる可能性がある。

g種 111～118

直前段合撫の上器を本種とした。111 は口縁部の破片である。1 段で LR と RL の糸をしに撫ったもの(以下 LLR・RLL・RRR・LLL と表記する)である。112 は胸部の破片である。111 と逆方向の直前段合撫 RLL の糸である。113 は LRR 直前段合撫の糸と RLL 直前段合撫糸を交互に施文し羽状を構成している。114 は口縁部の破片で 111 と同様であるが、0 段多条の糸を用いている。115 は RRR、LLL の糸を用いて羽状を構成する。113 と同様であるが 0 段多条の糸を用いている。116 は LLL の糸を用いるものであろうか表面が剥落して明瞭ではない。付加条第 2 種の可能性もある。117 は上半に付加条第 2 種の糸を、下半には RLL の直前段合撫の糸を配し、羽状を構成させている。118 は細片のために明瞭ではないが付加条第 2 種の可能性がある。本種の遺物は関山Ⅱ式段階の資料と判断される。

h種 119・120

櫛齒状工具による流水文状の文様を描くものである。横位の条線により区画帯を設け同一の工具によって流水文を充填させている。119 では 2 段の流水文が、120 では 1 段が観察される。119 では地文は観察されない。120 では単節 RL の糸文がやや斜方向に施文される。いずれも櫛齒の単位は 4 本 1 単位と判断される。胎土中の纖維及び器面の調整は関山段階の資料と大差なく同時期の資料と判断した。

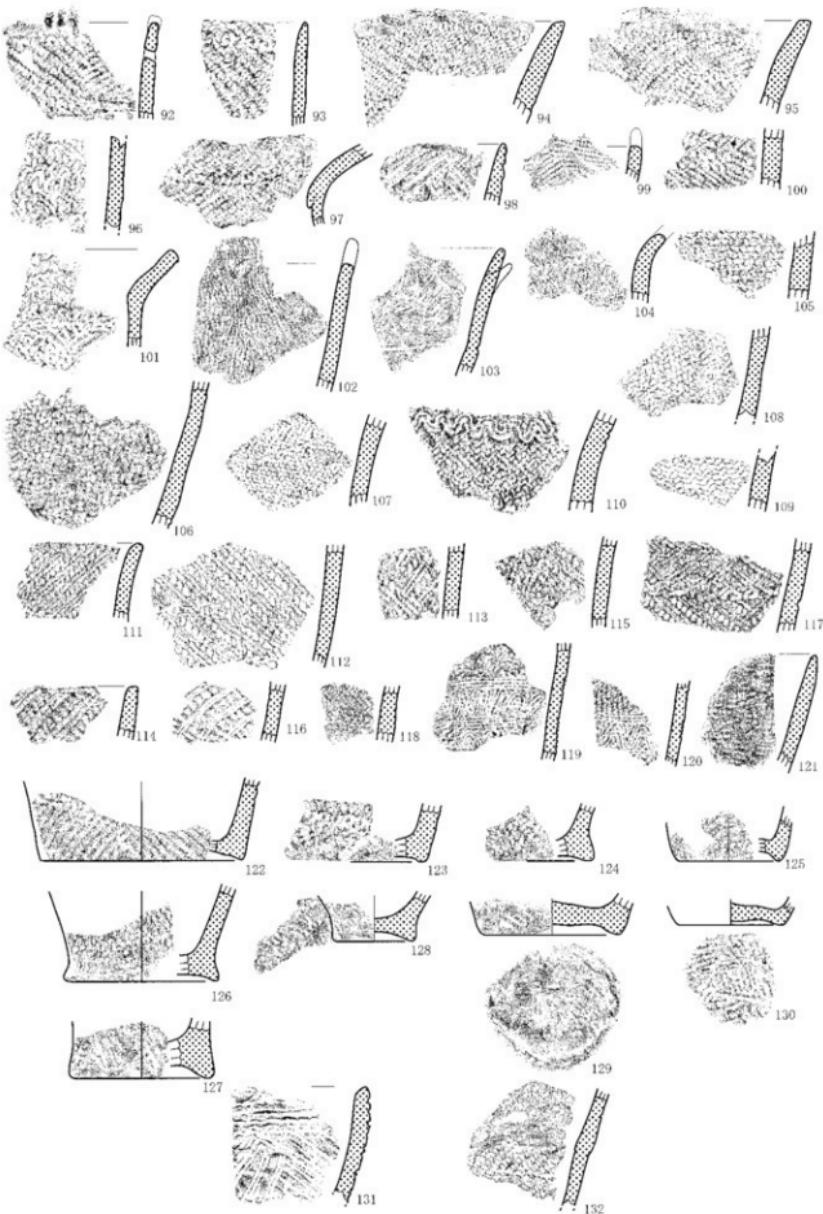
i種 121

やや内湾気味に立つ深鉢の口縁部破片である。ハイガイ等の肋脈のある貝殻の復縁を刺突して擬似縄文的な文様を構成する資料である。纖維の混入量は微量で、器面はサンドイッチ状に丁寧に整形されている。

j種の資料とした底部の 128 と同一個体と判断される。

j種 122～130

第 3 群 1・2 類の土器の底部破片資料である。122・123 は 0 段多条の糸文により羽状構成を行う資料である。端部の突出ではなく底部は上底状となる。124 は 2 群 g 種の底部で下端がやや突出し、直前段合撫の RLR が施文される。125 はやはり g 種の資料である付加条第 1 種の糸文が施文される。下端部の突出は見られずや上底になる。126 は下端がやや突出し上底状になる底部である。胸部には右巻 LL 左巻 RR の組紐が施文される。



第7図 遺構出土遺物(3)

127は下端の突出は見られない。上底状で胸部下端部に半截竹管による鋸齒状の文様が描かれる。128は胸部下端の突出は弱く、上げ底状になる。本類1種の遺物同様で、ハイガイの復縁が刺突され擬似縄的に表現されている。129はやや大形の底部破片で、僅かに上底になる。器面の剥落が激しいが、0段多条の縄文が僅かに観察される。130は円形に破損した底部の破片で、0段多条の縄文が全面に回転するように施文される。

### 第3類 黒浜式土器（第7図 図版29）

本類と明確に判断される資料は極めて少ない。縄維を混入する土器群の大半は前類の遺物と判断されるもので、僅かに本類の初頭と想定される遺物が2点検出されているのみである。胸部の細片の中に本期の遺物が含まれる可能性もあるが、未使用となった大半の縄維混入土器は前類の遺物と判断している。

#### a種 131

口縁部の破片である。内面の整形がやや粗い。外面には半截竹管による平行線が4条巡った後、以下は肋骨文を意識するように斜方向に平行沈線が附く引かれる。地文は観察されない。

黒浜1式と判断される。

#### b種 132

胸部下半の接合部の破片である。接合部の上半に破先端の鋭い沈線によって格子目文が描かれる。接合面より下には単節LRの縄文が施文され、接合前に縄文が施文されている。岡山II式から黒浜1式にかかる遺物と判断される。

### 第4類 浮島式土器（第8図 図版29）

#### a種 133

緩やかに外反する口縁部の破片である。口縁部直下に原体の側面圧痕が2条に渡り押圧され、下半に纏糸状の縄が僅かに観察される。胎土中には縄維の混入は見られず、口縁部の整形も指の圧痕が残るなど早期以前の資料の可能性もあるが、胎土の状況と器形より本類に含めた。浮島1式と判断した。

#### b種 134・135

変形爪形文を横方向に施文するもので、地文はない。爪は120でやや幅広となる。121は2列の変形爪形文が横走するもので幅はやや狭い。胎土は何れも砂質で焼成は良好である。浮島2式と判断される。

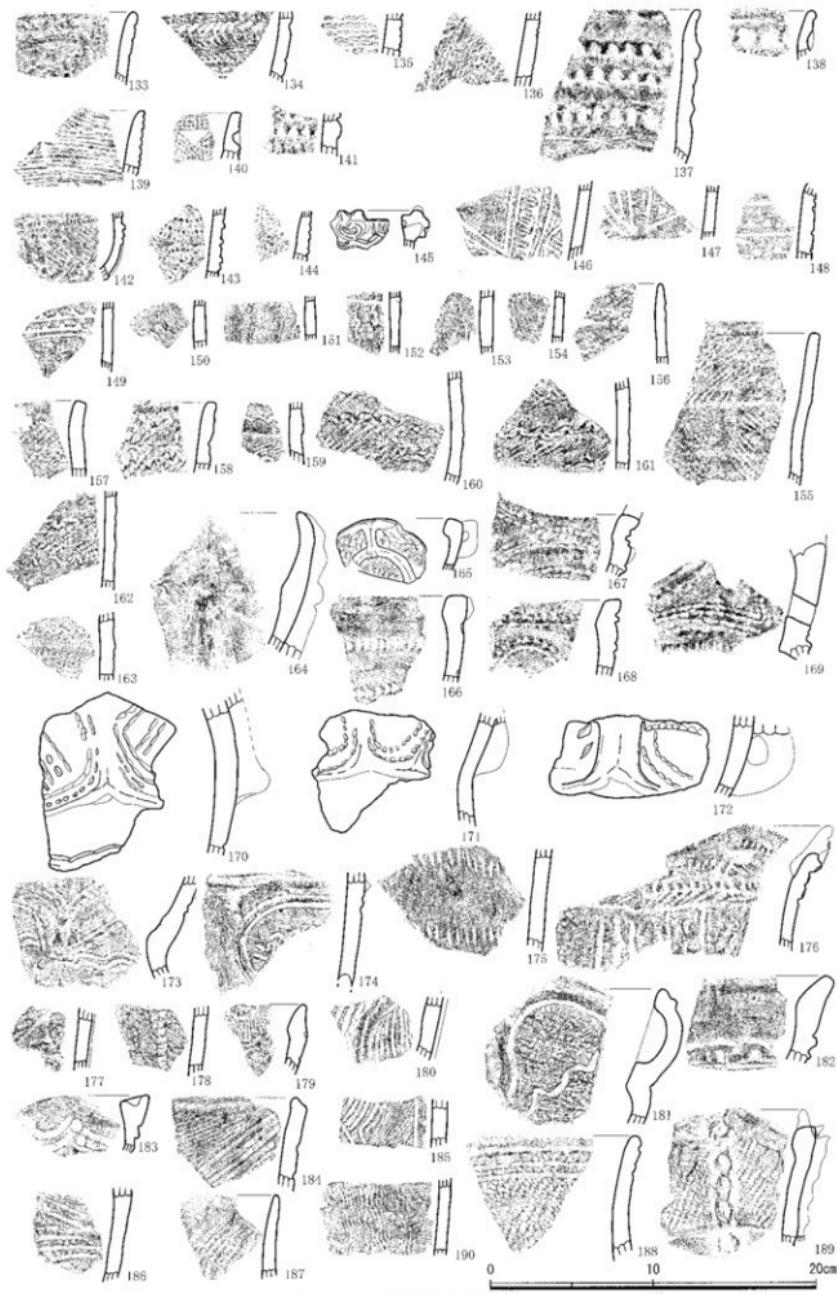
#### c種 136～138

136・137は口縁直下に棒状工具による刺突列を有するもので、口縁部文様帶は簡素になる。138は同様の遺物胴下半部の破片であろう。肋脈のある貝殻復縁により支点を交互に変換させて鋸齒状の文様を施文している。焼成はb種同様に良好で、胎土中には砂の混入が目立つ。浮島3式と判断した。

### 第5類 十三菩提式土器（第8図 図版29）

#### a種 139～145

139は集合沈線を描く波状口縁の破片である。細い平行沈線による菱形の文様を構成させる。文様部の下端には三角形の印刻文が刻まれている。140は集合沈線を描いた間際に三角形の印刻文を充填させる口縁部の破片である。141は三角形の印刻文が上下に段に連続施文されるもので、地文はない。本類に含めたがやや下る可能性もある。142～144は結節浮線文を施文するものである。142は口縁部直下の文様部の破片であろう。大きく内湾する破片である。地文に単節RLの縄文を施文した後、結節浮線文により横円形の区画を設け内部に縦方向の結節浮線文2条を垂下させている。143・144は同一個体の可能性のある細片である。地文に集合沈線を密に描き、結節浮線文により曲線を描くものである。中部高地に見られる晴ヶ峰式土器の影響を感じさせる土器で、雲母の混入が目立つ。145は小突起部の破片である。鋸齒状の文様及び口肩部に縦方向の沈線が



第8図 遺構外出土遺物(4)

描かれている。胎土・焼成より本種に含めた。

#### 第4群上器 繩文時代中期

##### 第1類 五領ヶ台式上器 (第8図 図版29)

a種 146～149

146は沈線により幾何学文様を描き、沈線に沿って三角形の印刻文を刻んでいる。蓮状文様に類似する。

147はやはり沈線による幾何学的な文様を描き、三角形の内側に画体の内部に三角形の印刻文を充填させている。

148・149は横位の沈線を描き、沈線に沿って三角形の印刻状の刺突を加えるものである。149の脛部には縱方向にZ字状の結節文が施文されている。何れも薄手で147・149では砂粒の混入は少なく雲母もあり目立たない。148は多量の砂が混入され、雲母の混入も明瞭である。五領ヶ台式でも前半期に位置付けられるものであろう。

b種 150～154

何れも脛部の細片で縱方向のZ字状の結節繩文が縱方向に施文される。154では同様の結節繩文が縱方向に2条施文され、条間にLRの繩文が縱方向に施文される。本類は同類a種の脛部破片であろう。

c種 155～163

155～158は口縁部の破片である。155・156・159などで口縁部直下に折り返しが観察され、口縁部はほぼ直立する形状となる。155では幅広の折り返しが観察され、LRの繩文が縱方向に施文される。155以外では横方向のZ字条結節文様を施文する特徴を行する。前種の遺物が縱方向の結節紋の施文に対して縱方向に施文される本種は所謂下小野式と称される。五領ヶ台式土器の一地方形式と考え本類の中に含めた。159～163は脛部の破片である。同様の結節文が横走する。何れも薄手の土器で焼成は良好である。また、胎土中の砂粒も少ないが僅かながら雲母の混入が目立っている。

##### 第2類 阿玉台式上器 (第8図 図版29)

a種 164・165

164は大波状口縁を呈する土器で波頂部より縱方向の棒状の隆帯が垂下する。隆帯の断面は三角形でやや尖る。165は断面がややかまぼこ状の隆帯が円形に配され、橋状の把手が隆帯から波頂部に連結される。また、隆帯によって区画された内部には角押文が全面に充填されている。阿玉台I式と判断される。

b種 166～174

口縁に窓枠状の区画帯を有し隆帯に沿って複数の角押列が施文される一群である。隆帯はかまぼこ状や方形に近いものもある。169は大波状の把手部分で中心に円孔が穿たれる。174は脛部下半の資料で断面かまぼこ状の隆帯が曲線を描いて垂下する。阿玉台II式と判断される。

c種 175

脛部下半の破片である。襞状の文様がヘラ状の工具による刺突列へと形態化するものである。b種の脛部破片と判断される。阿玉台II式の資料であろう。

##### 第3類 勝坂式土器 (第8図 図版29)

a種 176～179

176は小形の深鉢で波状口縁となる。口縁部直下には刻みを有する隆帯が曲線を描いて貼付けられ、脛部上半部の文様帶と下半を画している。下半は無節と思われる繩文を地文にし、太い沈線が2条垂下する。上半には同様の短沈線による刺突列が加わる。177は蛇行する組状隆帯が貼付けられ、隆帯上にはRLの繩文が施文されている。178は無節の繩文を地文とするもので、角押文が縱方向に垂下している。179は渦巻状の幅広の

貼付文上にキャタピラ状の刺突列が加わる。本種は勝坂式の範疇で捉えた。

b 種 180

断面方形の隆帯が曲線を描き貼付され、隆帯に沿って太い沈線が描かれる。胎土中には砂粒が多く、雲母の混入が目立つ。色調は赤褐色を呈する。勝坂式後半の焼町類型に酷似するもので本種として区別した。

第4類 中峰式土器 (第8図 図版29)

a 種 181・182

181は深鉢形土器の突起部分の破片である。口縁に沿って隆帯が巡り、突起の内側には円形の窪みが穿たれている。外面はRLの繩文が口縁直下から胴部にかけて施文され、頸部付近に太い沈線によって波状文が描かれる。胎土中には雲母の混入が顕著で砂粒も多い。阿玉台式最終段階に類似する部分が見られる。182は深鉢の口縁部破片である。口縁部は幅広の無文帶を有し、頸部にクランク状の貼付文が描かれる。内面には段を有す。勝坂式又は大木7b式の影響を感じさせる上器で、何れも中期中峰式と判断した。

第5類 加曾利E式土器

a 種 12・13・15号土坑出土遺物 (第9図 図版30)

キャリバー形を呈し、口縁部文様帯が二重隆帯によって区画され、文様部には渦巻き文と劍先状の文様が描かれる。加曾利E I式古段階土器である。

b 種 210・211

本種は加曾利E I式新段階の土器とした。明瞭な遺物の検出は無い。中期の遺物とした大量の遺物の中で胴部の幅広な摩り消し懸垂文を有する遺物は掲載資料の他には認められていない。僅かに2点出土しているがいずれも土器片鍾であった。

c 種

加曾利E II式を本種とする。本種の遺物は明確に確認されていない。

d 種

加曾利E III式を本種とする。本種の遺物も明確に確認されていない。

e 種

加曾利E IV式を本種とする。本種の遺物も明確に確認されていない。

第5群土器 繩文時代後期

第1類 堀之内式土器 (第8・9図 図版29)

a 種 183

183は口縁部に縁帯状の無文部を有し、波頂部に円形の刺突文が施される。深鉢の口縁部細片である。堀之内I式中段階と判断される。

b 種 184～186

184は朝顔形の深鉢口縁部破片である。口唇端部には1条の沈線が巡り、波頂部に向かって沈線が斜方向に描かれる。185・186は深鉢の胴部破片である。直線で区画された内部に「く」の字の平行沈線が充填される。堀之内I式新段階と判断される。

c 種 187～190

187は外反して聞く口縁の破片で、口縁部直下は無文となり、以下上半部には単節LRの繩文が施文される。

188は外反する口縁部の破片で、地文に単節LRの繩文を配した後、口唇直下に3条の沈線が巡る。口縁は平縁である。189は胴部で屈曲した後聞く深鉢の口縁部破片であろう。波状口縁を呈し、波頂部は双頭にわれ頂

部より指で押えられた跡が垂下する。地文には単節 LR が施文され、括れ部には沈線が巡っている。190 は胴部の破片で櫛歯状の工具により波状文様が縱方向に描かれる。壇之内 2 式古段階と判断される。

d 種 191・192

191・192 は同一固体と判断される。大きく外反気味に聞く胴部の破片で器壁は薄い。平行沈線による幾何学的な文様を描き内部に LR の縄文を充填させている。壇之内 2 式新段階の遺物である。

第 2 類 加曾利 B 式土器

a 種 193・194 (第 9 図 図版 29)

193 は鉢形若しくは台付鉢の口縁部破片であろう。口唇頂部は平坦に面取られた後、中央に沈線が 1 条巡らされる。口縁部直下は丁寧な横方向のナデが行われ、以下は単節 RL の縄文が施文される。194 は小形の鉢の口縁部であろう。口縁部は直角に屈曲して外反する。口唇直下に 1 条の沈線が巡り、以下に帶縄文が施文される。195 は胴部がソロバン形に張る鉢形を呈する土器の肩部付近の破片と判断される。曲線により区画された内部に単節 LR の縄文が充填される。無文部はよく磨かれている。加曾利 B2 式土器と判断した。

b 種 196

196 は弧形を呈する土器の胴部の破片と判断される。弧線により区画された内部に LR の縄文が充填施文され、無文部は良く磨かれている。加曾利 B3 式から曾谷段階と判断される。

c 種 197

197 は浅鉢形土器の口縁部は片であろう。口縁部は屈曲して立ち、口辺部に 2 条の沈線が巡る。口縁の内面には太い沈線による段を有している。胴部は無文であるが磨かれる。形式が不明であるが胴部の磨きなどから、加曾利 B 式の後半段階の資料と推定した。

第 6 群土器 縄文時代晚期

第 1 類 大洞 A 式並行土器 (第 9 図 図版 29)

a 種 198

本遺跡の中で晚期と判断された資料は本遺物 1 点のみである。薄手で浮線文により工字文が描かれる。内傾する破片で、小形の壺又は鉢の口縁直下又は肩部の破片と判断される。色調はやや暗い灰色を呈する。千網式、又は荒海式段階の資料と判断されるが細片で他に供伴遺物もなく明瞭ではない。

第 7 群土器 土製品

第 1 類 土器片錐 (第 9 図 図版 30)

a 種 199 ~ 202

本種の遺物は方形に近く周辺の整形を殆ど行わないもので、長軸側に紐掛けの溝を切っている。201・202 は破損している。ために片側の切り込みのみ確認される。用いられる土器は 201 がやや古い第 2 群の土器の可能性がある。その他は第 4 群 3 類の阿玉台式土器が用いられている。

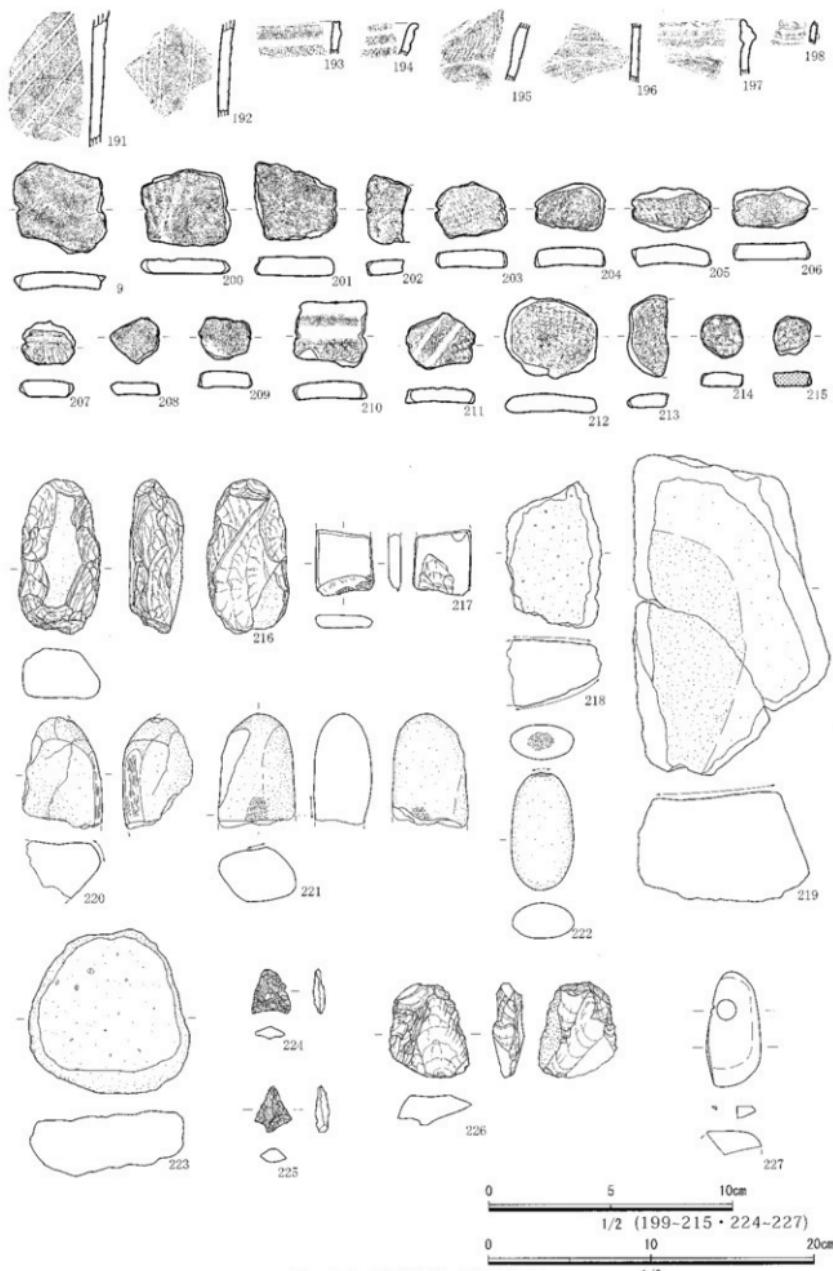
b 種 203 ~ 206

楕円形に近く全体が荒く整形されている。長軸が短軸に対して極端に長くなるものである。切り込みは何れも長軸側に切り込まれていて阿玉台式と判断される第 4 群の土器が用いられている。

c 種 207 ~ 209

小形の円形を呈し、周縁の整形はやはり殆ど行われない。長軸側に切り込みを設けている。やはり第 4 群の土器を用いているようである。

d 種 210・211



第9図 遺構外出土遺物(5)

a種とb種の中間の大きさで、210は方形の破片で周縁の整形は行っていない。211は楕円形に近い形状で僅かながら周縁の整形を行っている。何れも長軸側に切り込みを有す。中期後半の土器片で本遺跡の遺構外出土遺物としては確認できなかった加曾利E式の遺物が用いられている。

#### 第2類 土製凹盤

##### a種 212・213（第9図 図版30）

短軸側が4.5cm前後とやや大形で、周縁が削られて楕円形を呈する。212は完形で胎土中に砂礫を多く含む第2群の土器が用いられ、213は半分に欠損するが、第4群の土器が用いられている。

##### b種 214・215

直徑が2~3cm程度の小形の円盤である。周縁の整形は比較的よく研磨されている。214は器面に三角連続文が施文される第3群第4類の浮島3式上器が用いられている。215は器面に0段多条の羽状繩文が残っており、胎土中に纖維を含む第3群1・2類の関山式土器を利用している。

#### 第8群 石器（第9図 図版30）

##### 第1類 打製石斧 216

本類の遺物はC-27グリッドに於いて1点、遺構では1号住居跡で1点検出されている。216自然の礫を素材にするもので剥離面は側面から粗雑に行われている。断面の形状は厚みのある楕円形で、打製石斧としての機能的にはあまり良好なものとは言えない。石材には凝灰岩である。石材的にも打製石斧に適するものではない。尚、15号住居跡出土遺物は、側面に加工痕が認められることより種類的には別類扱いにした。

##### 第2類 磨製石斧 217

本類の遺物は1点のみの出土であった。扁平な自然礫の先端部及び側面を部分的に研磨し整形している。刃部は片面のみ研磨が行われており、片刃となる。素材には片岩質の石材（緑泥片岩カ）を用いている。形状的には繩文早期の第2群の上器に伴う遺物の可能性が想定される。

##### 第3類 石皿 218・219

本類は石皿で、2点の出土が確認されている。218は多孔質安山岩で上面及び下面が磨かれている。破損した端部の破片で全体の形状は不明である。219は花崗岩を素材にするもので、中央の機能部分は僅かながら浅い皿状に凹む。中央部分に楕円形によく研磨された試用部分が広がっている。左側は破損して欠損している。従って本遺物も全容は不明である。

##### 第4類 磨石 220

本遺物は凝灰岩を素材とする磨石である。然により破損しており、全体は不明であるが、断面が三角形の石材を意識的に用い、側面の三角形の頂部を機能面としている。遺物は繩文早期第2群の土器に伴うものと判断される。

##### 第5類 凹石 221

本遺物は砂岩を素材とするもので、所謂扁平な楕円形を呈する凹み石とは異なる。自然礫をそのまま使用するものであろうか、側面の整形はほとんど見られず表皮のままである。断面が楕円形で棒状の素材を用いている。凹み部分は折損部分に僅かながら確認され、表裏両面に凹みが確認出来る。裏面の凹みは僅かである。

##### 第6類 敲石 222

本遺物は砂岩を素材とするもので、楕円形の自然礫の端部をハンマーとして用いている。端部には敲打による潰れが観察される。その他は加工痕は見られない。被熱痕が見られる。

##### 第7類 整石製石製品 223

本類の遺物は1点のみ確認されている。多孔質で気泡の抜けた孔が多数見られる安山岩を素材にするもので、表面に察痕が観察される。軽石製石製品として呈示した。

#### 第8類 石 鋸 224・225

224は本遺物は黒曜石製の石鋸である。凹基三角儀で基部側は僅かに凹む。側縁は内湾するもので、全体に正三角形に近い。225はメノウ製の有茎石鋸である。側縁は外反するもので、茎部は短く突出する。逆し部がやや突出するタイプである。このタイプの石鋸は晩期の所産である可能性がある。

#### 第9類 剥片石器

遺構外での掲載ではない、15住居跡出土26がある。素材は頁岩で縱長の剥片である。打点は表皮側で、腹面の左側にも表皮を残す。側面に僅かながら刃部の摩滅が観察されることより、使用痕のある剥片と判断される。

#### 第10類 横 226

226は剥片を利用する石器である。プラットホームはほぼ平坦で、上端より剥がされているが、背面には下方向からの剥離が観察され、尚かつ打点を取り除くための剥離が試みられている。結果的にはプラットホームの除去はできていないが、縱長の剥片の両極から剥離を加えていることより横の可能性が高い。材質は珪質頁岩である。

#### 第11類 大 珠 227

227は翡翠の大珠である。調査区の中央付近、7号住居と切りあう(3号溝)カクラン部分で出土している。確認古時に検出されたものである。小形の鏗節型と判断され、穿孔は管錐状の工具によりほぼ垂直に穿たれている。熱を受けて破損しており、表面の研磨が剥落して白濁した状況を呈する。しかし、光に透かしてみると薄緑色の艶暈を呈し、良質の石材が用いられていることがわかる。意識的に熱を加えたものか判断できないが、破碎した後に破損部の端部を僅かながら磨いている。残存は縱4.6cm、横2.2cm、厚さ0.9cm、孔径0.8cm、重さ13.4gを測る。熱による破損については、上野(2007)によって論考が示されている。表面が白濁して表面の粉状化が看守される点から、上野分類では類型1B種でLevel3～4段階になるものであろう。尚、細かな表面観察では、破損部分の表面にも細かな粉状化が見られた。節理面に沿った破損の後に研磨を行い、再生を試みている。その後、熱が加えられているものと判断される。

尚、供伴する遺物も無くその時期については明確にはできない。従来に於ける、大珠の出土事例では、中期加曾利E式後半に伴う資料が多い傾向にあるが、7号住居は阿玉台II式段階と判断している。本遺物の所属時期は所謂大型の鏗節型とは異なる小形の大珠であり。中期後半の資料とはやや異なるものであろう。中期中葉に伴う可能性がある。

#### 第9群上器 弼生土器 228

本遺跡から出土した弼生土器は、228の1点のみである。亜形土器の頭部付近の破片で、屈曲部に補強帯状の隆帯が1条巡る。器面の剥落が激しく整形は不明である。胎土は砂粒を多く含み、金雲母の混入が目立つ。繩文土器の第4群土器の胎土に酷似する。型式不明。

#### 第10群 古墳時代の上器

##### 第1類 古墳時代前期

本類の遺物は遺構から検出された僅かなものであった。遺構が検出されている割りには遺物量は少ない。

##### 第2類 古墳時代中期

本類の遺物は、古墳の周溝から出土した高杯の脚部片のみである。

### 第3類 古墳時代中期末葉～後期初頭 229

本遺物は遺跡内の表採品である。滑石製模造品の有孔円板である。1/3を欠損している。扁平な板状を呈し、上下両面共に研磨される。直径1mm程の孔が2孔対峙して穿たれている。模造品の形状から中期末から後期初頭の遺物と判断される。

### 第11群 中世

#### 第1類 かわらけ（第10図 図版30）

a種 230

本種の遺物は2点の出土が確認されているが、形状のわかる1点のみ提示した。直径5cmほどで器高も1.2cmと小形のものである。底部は平底でロクロ整形により回転糸切りされ無調整である。体部は短く内湾気味に立つもので、薄く尖る。16世紀以降の遺物と判断される。

#### 第2類 陶器（第10図 図版30）

a種 231

16世紀後半の志野焼の皿である。内外面に白色の長石釉が全体にかけられている。底部は削り高台で体部は緩やかに内湾気味に開く。

#### 第3類 石塔（第10図 図版30）

a種 232

上面が円形に整形され、下端が平らになる。当初五輪塔の水輪と考えたが、下雄部が平坦になることより、傘塔の傘の可能性もある。材質は花崗岩である。直径22.5cm、厚さ9cm、重量は7500gを測る。

b種 宝鏡印塔

遺構外からの出土はない。6号土坑から1点出土している。

c種 五輪塔

遺構外からの出土はない。やはり、6号土坑から1点出土している。

### 第12群土器 近世

#### 第1類 陶磁器（第10図 図版30）

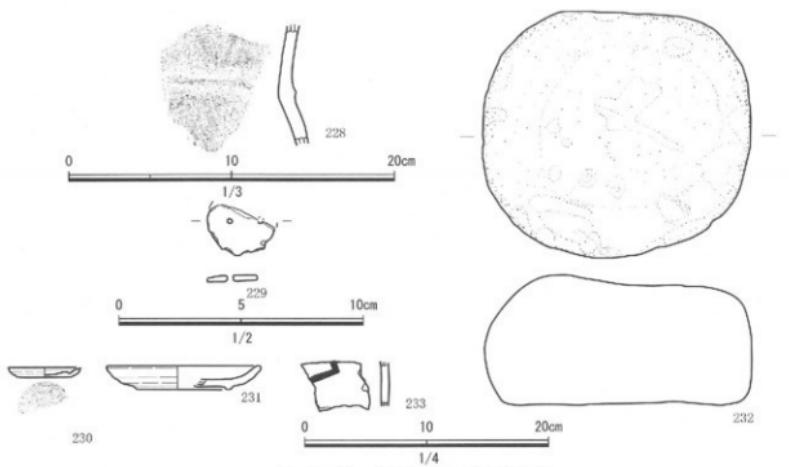
a種 233

素焼きの陶器で捏鉢と判断される胴部の破片である。焼成は極めて良好で、黒斑等の焼疵は見られず、窯で焼かれた製品と判断される。胴部に墨書きが観察される。固構であろうか文字が書かれているものの、判読はできない。市教育委員会で実施した確認調査資料の中に同一個体と判断される同遺物の底部資料がある。底部は砂目で、拙鉢状を呈する。

b種

近世陶磁器を本種とした染付磁器や陶器がある。染付の呉須は合成コバルトを用いるもので近世の以降の遺物と判断されるものである。2号溝出土遺物1がある。

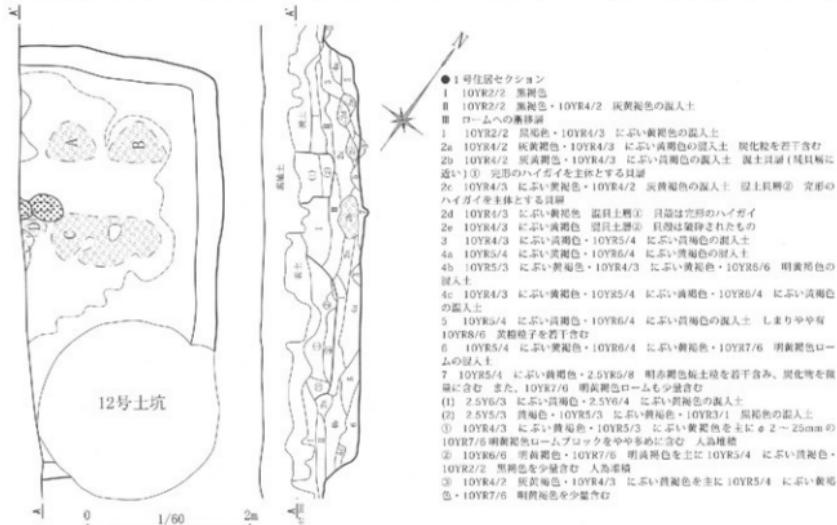
以上本遺跡より出土した遺物について12群に分けて説明した。これを基に以下遺構出土遺物について説明を行う。



第10図 遺構外出土遺物(6)

表2 遺構外出土遺物観察表

遺構番号	No.	立派	種類	器種	口径 直径 深さ	重量	器形の特徴	整形の特徴	色調	施土	焼成	保存率	備考
遺構外	230	漆器面	土胎質土器	小口付鉢	(5.5) (4.0) (0.8)	9	高台は底面で、底盤は口 内に凹みを持ち直絞るよ く短く聞く。口唇部は口心 を掩み上げたのが窪く丸み がある。	口縁は丸め、底盤は約6% 角切り。左側6cm、 右側4cm。	内面 5YR7/6 外面 5YR6/6 埋	漆器底盤。白 色和子・白色 計状地質背景。	1/2	中世末	
	231	1フラン溝	陶器	II	(12.7) (7.7) (1.9)	17.7	高台は底面で、底盤は底 やかに内凹した後、直筋 に則り、器底は厚い。高台 は内側溝跡。	口縁は丸め、底盤はシ ンカツリ。長石軸が底盤 を避け凹面にまでか な。	外表面 5YR7/2 底面 5YR7/6	高台 灰黄褐色	1/8	古墳 漆器底盤。	
	233	西壁面	土胎質土器	粗ねじ鉢	—	—	底盤の高台がある。底盤 は底面で、直筋で なる。	口縁は丸め、外表面に ナヂ。	外表面 5YR7/6 底 5YR7/6	漆器少量、黑 色和子や 白立つ、白色 和子・薄沙少 量。	漆器底盤 片	漆器「口」	



第11図 1号住居跡(1号貝塚)

### 第3節 遺検出された遺構及び遺構出土の土器

#### 第1項 繩文時代

##### 1 住居跡

1号住居跡(1号貝塚) (第11・12図 図版6・31)

本住居跡はC-25グリッドに於いて検出された。南西側が調査区外に延びているために全容は捉えられていないが、おおむね方形を呈するものと判断される。また、南側には12号上坑が重複しており、本住居を切つ



第12図 1号住居跡(1号貝塚)出土遺物

ている。住居の規模は南北方向で5.20mを測る。東西方向では2.34mのみ調査が行えている。確認面から床面までの深さは、最深部で34cmを測る。住居跡の北側に於いて覆土中に貝の投棄が見られる。貝ブロックはA～Dの4地点に分かれて検出されている。覆土は13層に分割した。2b～2eが貝を混入する層で、2b・cが混土貝層、2d・eが貝土層である。いずれもハイガイを主体とするもので、貝層の堆積は明らかに人為

的なものであるが、その他の堆積は自然堆積の様相が看守される。このことは、住居の覆土がある程度堆積した窪地に貝を投棄したことが想定され、4地点の貝層と住居跡には時間差があることを示唆するものである。

床面はほぼ平坦で、壁溝並びに柱穴は検出されていない。中央部分に炉が2基検出されている。楕円形を呈し瓢形に連結している。掘り込みは浅い皿状を呈するもので、火床面はよく焼けている。

出土遺物は土器としておよそ3029.9g検出されている。このうち縄文早期の遺物が83g、中期の遺物が218.1g混入している。中期の遺物は12号土坑の遺物が混入したものであろう。

本住居跡に伴う遺物としては土器26点、石器2点について呈示した。1・2は口縁部の破片である。1～8は口縁部の破片である。1・2は口縁直下に半裁竹管によるやや間延びしたコンバス文が描かれる。第3群第1類f種、3は直交する半裁竹管が描かれる。第3群第2類b種の遺物、4は口唇部に沿って角棒状の工具による刺突列が加わるもので、同2類d種に含まれられるもので、口縁部が極端に湾曲していることから、片口部付近の破片であろう。5・22は組紐が回転施文されるものである。同類f種の遺物である。6～8は縄文のみが口縁部に施文されるもので、6・7はでは無節、8では付加条の縄が施文されている。9～24は胴部の破片である。9・10は半裁竹管による曲線文様が描かれるものである。第3群第1類f種であろうか、18は同2類g種の遺物である。梯子状文様や点付文を有する資料は検出されていない。25は細片で混入遺物と判断しているが1類j種の結節縄文である。26は底部の破片である。下端部への縄文施文は行われない。

本遺構出土遺物は1類の関山I式土器を少量含むものの、主体は第3群第2類の上器群と判断されるもので、関山II式の遺構と判断した。出土した石器は2点で27は小形の打製石斧である。扁平な円礫を素材にするもので基部側と上下両面には大きく表皮を残している。側面は剥離が行われ、片面からの剥離を主体に剥がすもので、片刃状を呈する。搔器的な使用を行った可能性がある。石材は砂岩である。熱を受けた可能性があり部分的に赤変している。28は石核である。小形の剥片を剥ぎ取っている。素材はチャートである。おそらく石器の製作に関わる石核と考えられる。

検出された貝は全量を採取し、土糞袋で112袋を数える。このうち全量の10%について水洗・分類を試みた。この結果、ハイガイ、マガキ、オキシジミ、ハマグリ、ヤマトシジミ、の6種類が検出されている。汽水域のヤマトシジミは僅かに7点で大半が鹹水域産の貝類である。その大きさ別の組成は表14にまとめた。殻幅が計測できなかったものも含め種類別の割合は第3・4表にまとめた。尚、水洗いを全量行ったものではないが、魚骨・骨角器等の検出は無かった。

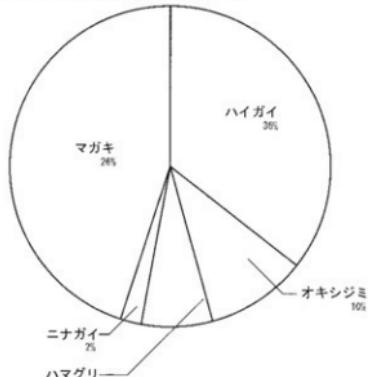


表3 1号貝塚A地点貝組成

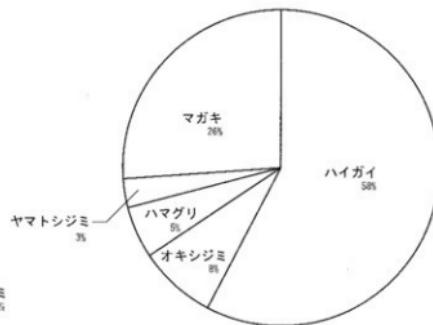
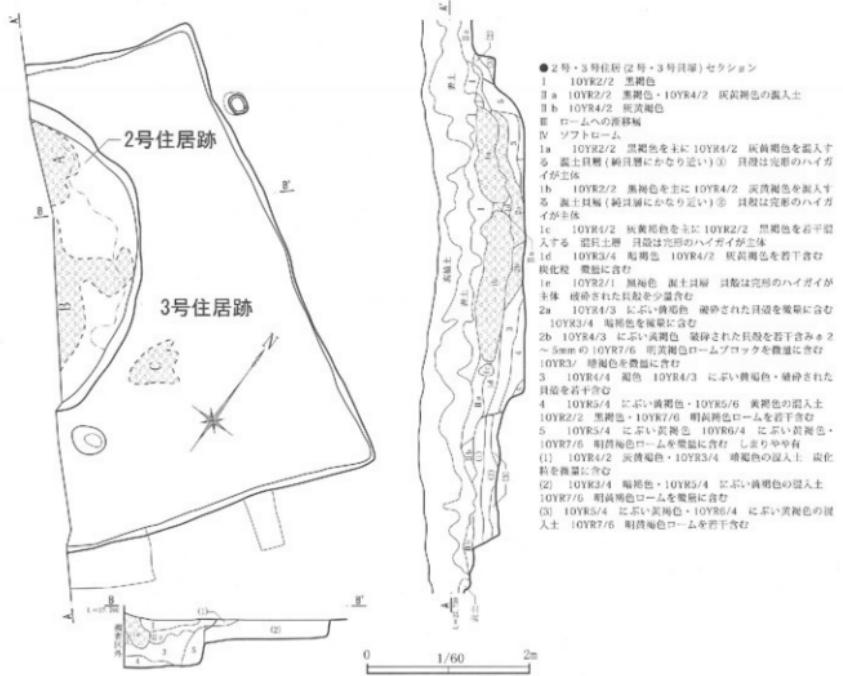


表4 1号貝塚B地点貝組成



第13図 2・3号住居跡(2号貝塚)

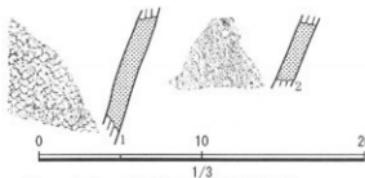
2号住居跡(2号貝塚) (第13・14図 図版7・8・31)

本住居跡はC-24・25グリッドにおいて、1号住居跡の西側に近接して検出されたものである。やはり覆土中に貝層を有する住居内貝塚である。プランは円形と想定されるが、調査を行えたのは短軸側で1.34m、長軸側で4.80m、確認面下の掘り込みの深さはおよそ60cmを測る。円形のプランを想定するならば、おおむね全体の3分の1程度の調査と判断される。西側は調査区の外となっており未調査である。

3号住居跡の覆土中に切り込まれている。断面から判断して本住居の方が3号住居跡よりも新しい。覆土は9層に分層され、1aから1c層までが貝層で、a・b層が混土貝層、c層が混貝上層である。ハイガイを中心とする。2層以下はレンズ状の堆積が観察され、1号住居跡同様に住居の埋没過程で窓地に貝が投棄されたものと判断される。平面的に見れば貝層は住居中央部に広がっているが、ブロックとしては北東側のAと南側のBブロックに分かれている。

床面はほぼ平坦であるが、ほぼ全面に硬化面の広がりが確認される。しかし、柱穴、壁溝、炉とともに確認されていない。

出土遺物は僅かで、関山式土器を中心に72.9gの土器が出土している。覆土中の遺物として中期の遺物が僅ながら混入している。掲載遺物は2点である。1は組紐を横帯施文する深鉢の副頭破片で原体は右巻LLと左巻RRの組紐文と判断される。2は内外条痕文の土器である。1は第3群第2類f種の関山II式と判断される。2は第2群第2～4類の土器底部付近の破片である。広義の茅山式と判断される。従って、本住居の所属年代は、1号住居跡同様に関山II式段階と判断される。



第14図 2号住居跡出土遺物

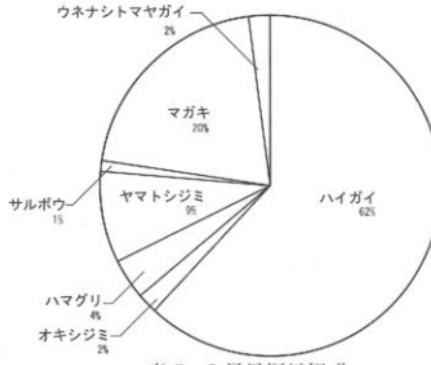
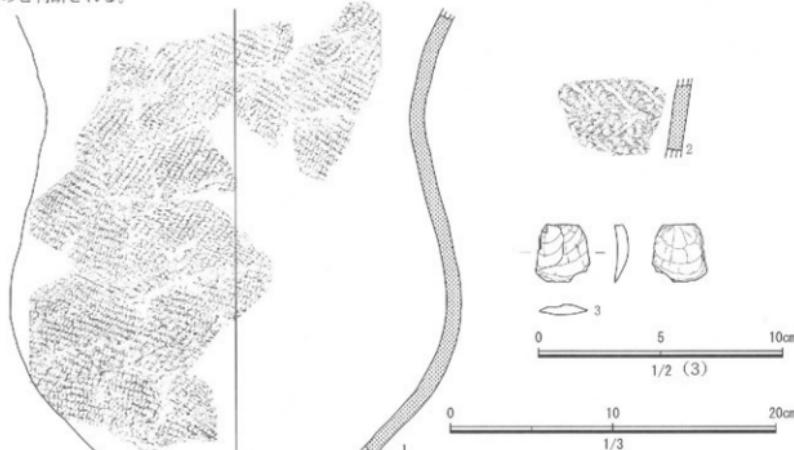


表5 2号貝塚貝組成

3号住居跡(3号貝塚) (第13・15図 図版7・8・31)

本住居跡はC-25グリッドに於いて、2号住居跡と重複して検出されたものである。プランは方形を呈するものと想定される。南北方向は5.80mを測る。西側が調査区外となっており、東西方向は不明。確認面下の深さは、25cm程度で、2号住居跡の方が深い。西側のおよそ2分の1が調査区外となっており、調査は全容を捉えるには至っていない。床面も軟弱で明確な床面の硬化は見られない。また、炉及び壁溝も検出されていない。南側壁より1基のピットが検出されている。断面観察より本住居を2号住居跡が切っており、本住居跡が古いものと判断される。



第15図 3号住居跡出土遺物

検出された貝は全量を採取し、土嚢袋で42袋を数える。このうち全量の10%について水洗・分類を試みた。この結果、ハイガイ、マガキ、ヤマトシジミ、ハマグリ、オキシジミ、ウネナシトマヤガイ、シオフキ、ツメタガイ、サルボウ、二ナ類、アカニシの12種類が検出されている。アカニシは僅かに外殻の断片のみである。汽水域のヤマトシジミは僅かに62点で全体の9%にすぎない。大半が鹹水域産の貝類である。その大きさ別の組成は表14にまとめた。殻幅が計測できなかったものも含め種類別の割合は表5にまとめた。表で見る通り、1号住居跡と本住居跡は貝の組成が類似するもので、何れも関山Ⅱ式段階の住居内貝層の組成として齟齬は無い。水洗いを全量行ったものではないが、魚骨・骨角器等の検出は無かった。

出土遺物は3点を示した。1は深鉢の胸部下半より上半にかけての括れ部の大型破片である。0段多条の縄文が羽状を構成するように全面に施文される。第3群第2類a種に相当する。2は附加条第2種の縄文が回転施文されるもので、やはり羽状を構成する。第3群第2類g種の遺物と判断される。3は黒色緻密質安山岩の剥片である。正方形に近い形状で側縁に加工痕は見られない。出土遺物はその特徴からより本住居は第3群第2類の遺物と判断されることより、遺構は関山II式と判断される。出土遺物に型式差は認めないものの、

重複関係より本跡が古い。同一型式内ではあるものの、時間差により1・2号住居跡に比較し、貝組成は大きな変化を見せていている。

貝層は住居跡の南西側で小規模なブロックながら検出されており、第2層中に投棄されている。検出された貝は全量を採取し、土嚢袋で12袋を数える。このうち全量の10%について水洗・分類を試みた。この結果、ハイガイ、オキシジミ、ハマグリ、サルボウ、マガキ、ニナ類、ヤマトシジミの7種類が検出

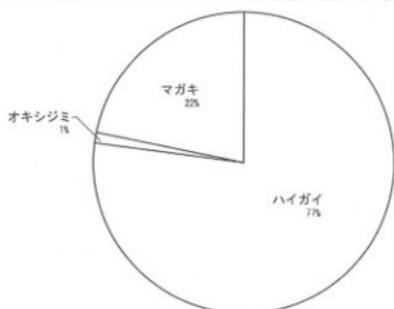
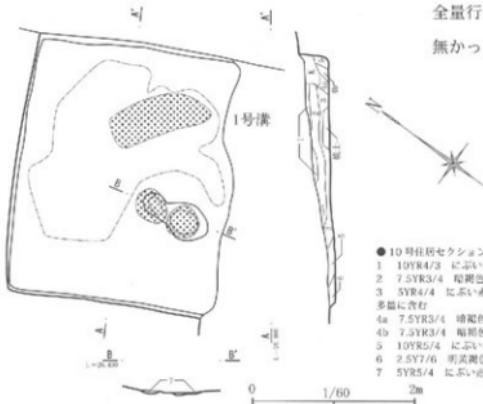


表6 3号貝塚貝組成

されている。汽水域のヤマトシジミ及び鹹水域のハマグリ、ニナ類は僅かに1点ずつで大半がハイガイで全体の77%を占めている。統いてマガキが若干量(22%)混じっている。1号貝塚の組成とは明瞭な違いが認められるもので、採取したハイガイの大きさも3.2~3.8cmのものに集中する傾向が顕著である。大きさ別の組成は表14にまとめた。また殻幅が計測できなかったものも含め種類別の割合は表6にまとめた。尚、水洗いを

全量行ったものではないが、魚骨・骨角器等の検出は無かった。



- 10号住居セクション
- 1 10YRA/3 にぶい黄褐色 7SYR4/3 和程度を少部分含む
- 2 7SYR3/4 棕褐色 10YRA/3 にぶい黄褐色と焼土を若干含む
- 3 SYR4/6 に赤褐色 2.5SYR5/6 明赤褐色の焼土との混入土 2.5SYR6/6 棕褐色の焼土を多量に含む
- 4 7SYR3/4 棕褐色 ローレルを少量に含む
- 45 7SYR3/4 棕褐色 ローレルを微量に含む しまり焼 粘性や半緻
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YRA/2 黄褐色を若干含む
- 6 2.5Y7/6 明赤褐色のローム 10YR5/4 にぶい黄褐色の混入土
- 7 5YR5/4 にぶい赤褐色・SYR6/6 棕褐色の焼土との混入土

第16図 10号住居跡

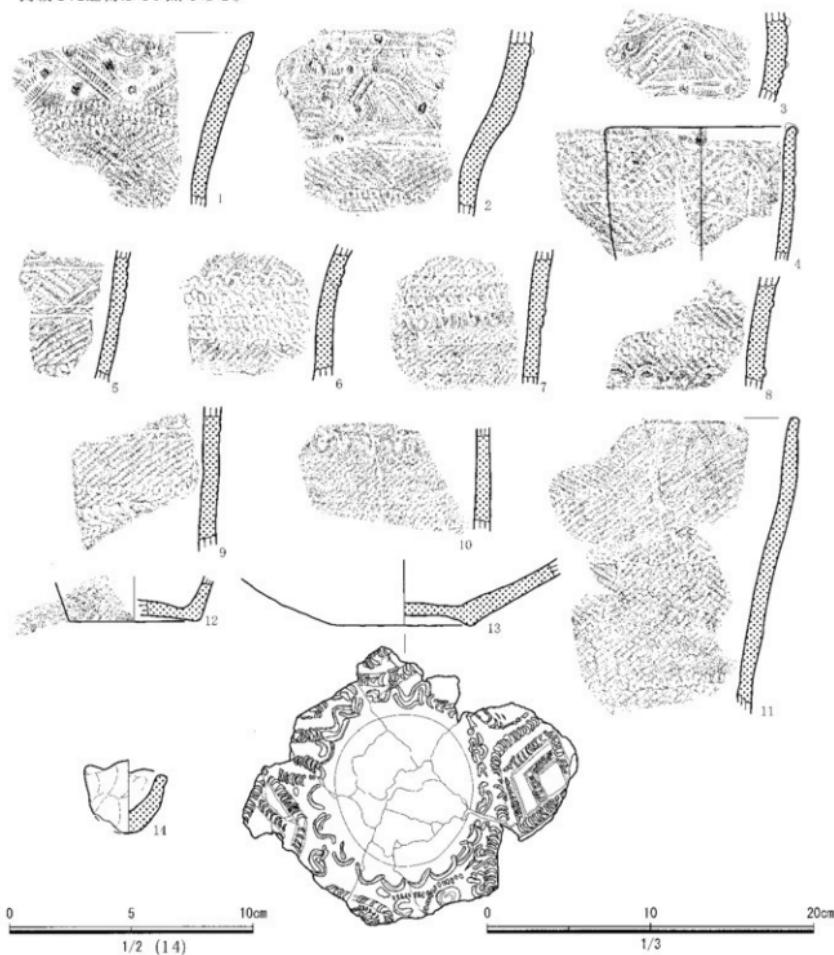
10号住居跡 (第16・17図 図版10・11・32)

本住居跡はB-10・11グリッドに於いて検出された。1号溝によって南側を切られ、さらに東側は調査区域の外となっている。検出できた壁は南北2.64m、東西3.06mで、全体は不明である。プランは方形を呈するものと判断され、検出された床面の中央付近に2基の炉が連結して設置されている。長軸は88cm、短軸は北側で26cm、南側で44cmを測る。火床面はよく焼けている。柱、周溝、柱穴共に検出されていない。床面は平坦で全体に硬化している。床面の東側に南北1.24m、東西0.46m幅で焼土の分布が観察され、本住居は火災

住居であると考えられる。

遺物は 3087.8g 出土している。遺物は全て縄文時代前期の遺物と判断されるもので、他の時期の遺物は混入されていない。

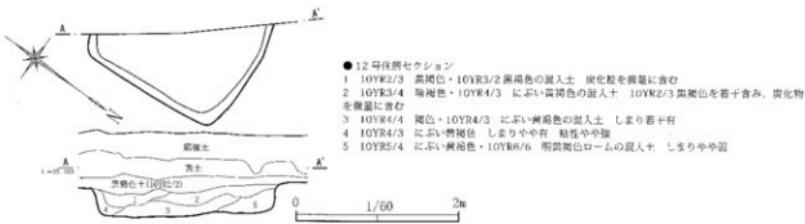
掲載した遺物は 16 点である。



第 17 図 10 号住居跡出土遺物

1～3 は口縁部文様帯が区画され、平行沈線による梯子状文で鋸齒状の文様が描かれる。円形の貼付文が多数貼付けられている。胴部には 0 段多条の縄文により羽状の構成が行われる。1 は胴部上半の破片であろう。2・3 に比べてやや幅広の文様帯を有する。4 はやや小形の平線の深鉢である。上半部に文様帯を有し、曲線状の紋様が半截竹管による梯子状文で描かれる。地文は 1～3 と同様である。5 は平行沈線による鋸齒文が描かれるもので、梯子状の刻みはもたない。6 は胴部の破片であるが、上半に僅かながら平行沈線による区画が観察

される。7～10はコンパス文が胴部に描かれる資料である。11は平縁の口縁を呈する大破片で、口縁部直下より付加条第1種の縄文、0段多条のLR、RLにより帯状に施文され、羽状を構成している。各縄の頂部にはループとなっている。12は単節RLとLRの縄文により羽状縄文を下端部まで施文する底部の破片である。13は器形が判別できる浅鉢である。底部は上げ底になり、胴部には半截竹管による爪形が梯子状に施文され、菱形と渦巻き(羊角状)の文様が交互に配される。下端部には崩れたコンパス文が巡る。内面は剥落しており縄形の状況は明瞭ではない。14はミニチュア土器である。丸底で手捏状の土器で文様はない。口縁部は僅かながら欠損している。胎土中には多量の纖維が混入され、器面は褐色に変化し内面のみがサンドイッチ状に纖維を混入する。1～13と同様の胎土焼成である。以上本住居跡の遺物は遺構外出土の第3群第1類の土器であり、関山I式でも古段階に比定されるものである。本住居跡の所属年代も該期と判断した。



第18図 12号住居跡

#### 12号住居跡 (第18・19図 図版13・32)

本遺構はC-22グリッドに於いて検出されている。西側方向が調査区域の外となっており、全体を調査できただけではない。確認された東側の壁は1.85m、確認面下の掘り込みの深さは、25cmを測る。東西方向は最大で幅1.35mの調査にとどまっている。

住居のプランは小形の方形を呈するものと判断される。床面はほぼ平坦で、炉、柱穴共に検出されていない。覆土は5層に分層され、自然堆積を示す。

遺物は534.3gの縄文土器が検出されている。早期撫糸文系土器、沈線文系田戸戸層式土器、前期関山式等



第19図 12号住居跡出土遺物

#### 15号住居跡 (第20・21図 図版15・32・33)

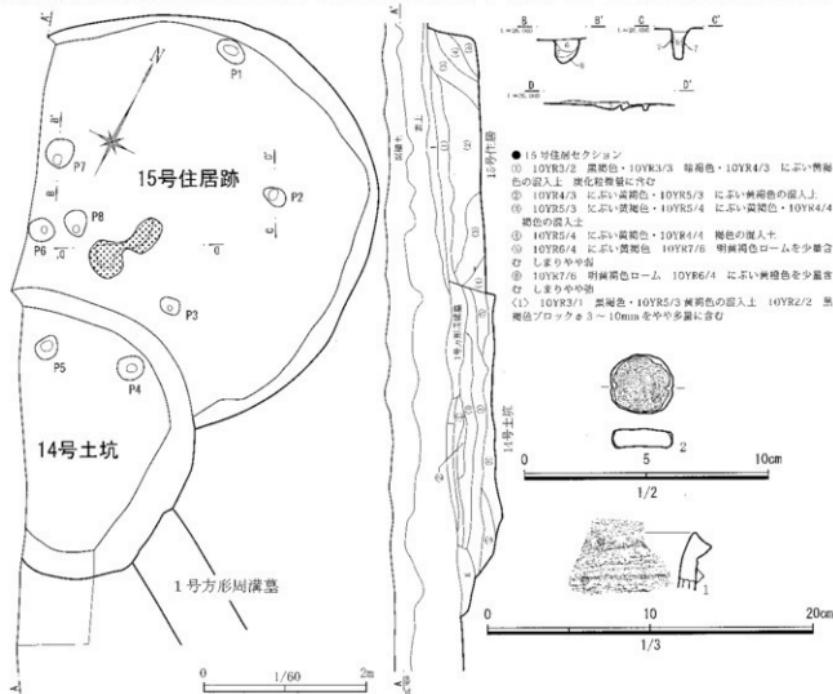
本遺構はA・B-8グリッドにまたがって検出されている。西方向が調査区域の外となっており、さらに南側を14号土坑によって切られている。このため全体を調査できたわけではない。

住居のプランは円形を呈するものと判断され、確認された南北方向の壁は直径5.03m、東西方向は4.13mの調査にとどまっている。14号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。確認面下の掘り込みの深さは、72

cmを測る。掲載した1は深鉢形土器の胴部破片である。屈曲部に接合部を有するもので、接合部分にコンパス文にかわって短沈線を縦方向に刻みを施すように施文している。地文の縄文は単節RL呼びLRの縄文を横方向に回転施文するもので、端部にループ文が付随する。本遺物は、遺構外出土遺物の第3群

式期の遺構と判断される。

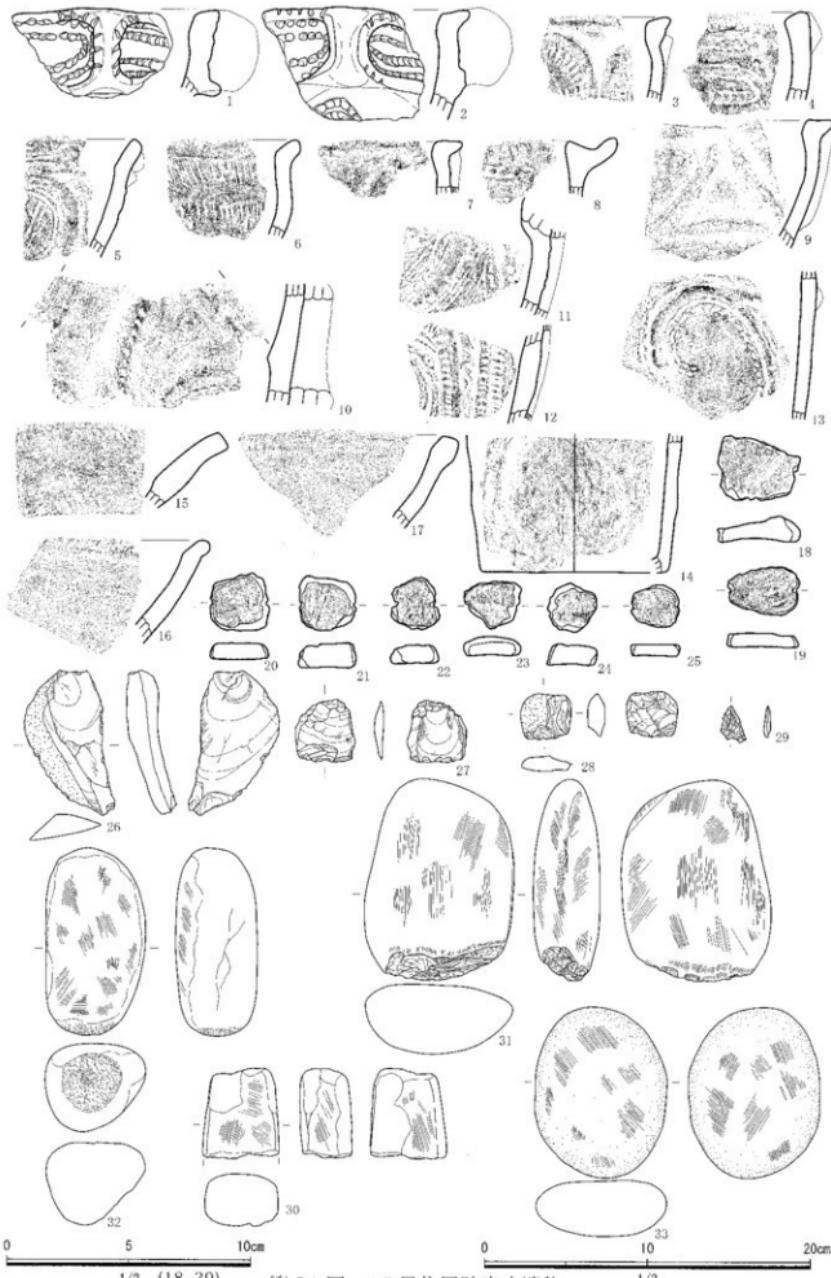
cmと深い。床面はほぼ平坦で、確認された床のほぼ全面が硬化している。炉は中央部分に 2 基連結されて細長い瓢形になる。長軸は 105cm、短軸は北側で 33cm、南側で 50cm を測る。楕円形の掘り込みを有するもので、焼上の範囲はこの掘り方とややずれて検出されている。柱穴は 8 基検出されている。このうち、2 基は 14 号土坑の床面下から検出されたものであるが、位置関係及び覆土の状況より本遺構に伴うものと判断した。P1 は北壁よりに配置される。37 × 24cm、深さ 19cm、P2 は 30 × 20cm、深さ 42cm、P3 は炉の東側に近接するもので 26 × 21cm、深さ 36cm、P4 は 14 号土坑の床面下より検出されたもので、14 号土坑の方が本住居跡よりも掘り込みが深く、確認面から床面下の掘り込みの数値は小さくなる。32 × 32cm の円形で深さは(15)cm、



第 20 図 15 号住居跡・14 号土坑・14 号土坑出土遺物

P5 も P4 と同様で、14 号土坑に切られている。30 × 26cm、深さ (13)cm、P6 は南西壁際に位置している。31 × 28cm、深さ 25cm、P7 は炉の西側に近接する。31 × 27cm、深さ 41cm、P8 は北西調査区付近に墻付近くに位置し、35 × 32cm、深さ 37cm を測る。

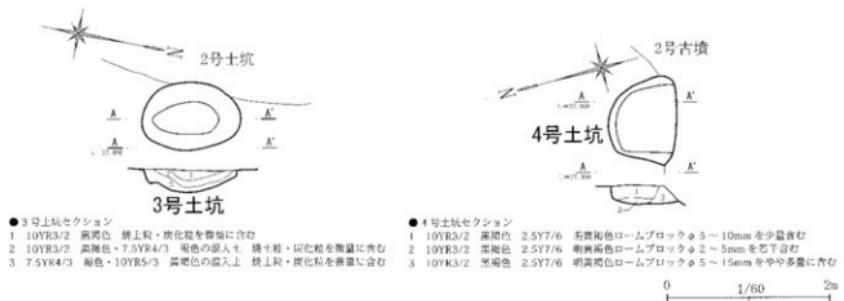
遺物は 27165.1g の縄文土器・石器類が検出されている。縄文中期中葉の阿玉台 II 式土器を中心に早期条痕文系土器・前中期山式・浮島式土器等が出土している。掲載資料は 33 点で縄文土器片 17 点、土器片鍤 8 点、石器 8 点である。1 ~ 9 は口縁部の破片である。1・2 は橋状の取っ手が付されるもので窓窓状の横口画の内部に角押文が施文される。木遺物の 2 点がやや古い様相を呈するが、その他は大形の扇状取っ手を有し、隆帶に沿って 2 列の角押文が施文される 3 ~ 5、11 ~ 13、断面がかまぼこ状の太い隆帶が巡る 6・8・10・11 ~ 15、16 ~ 18 は浅鉢の口縁部破片である。3 以降は第 4 群第 2 類 b・c 種の土器であろう。19 ~ 25 は土器片利用の上器片鍤である。本遺構の所属時期は阿玉台 II 式期の遺構と判断される。第 7 群上器としてまとめたも



第 21 図 15 号住居跡出土遺物

のである。19は第7群b種の資料で、横長の楕円形を呈するものである。20～25は同群c種の資料である。何れも側面の研磨はほとんど見られず、組掛けの溝が僅かに両端に刻まれるだけである。

26～33は石器で、第8群に分類した資料である。26は頁岩の剥片である。27・28は楔である。27はガラス質安山岩、28は鉄石英である。29は石鎚である。形状は小形の円基三角錐である。側縁はほぼ直線的で、鋸歯状の押圧剝離が行われている。材質は珪質頁岩を用いている。30は磨製石斧である。定角式の石斧で凝灰岩を用いている。31は緑色岩類の自然礫を素材とするもので、下端部に荒い打撃が加わり、刃部を作り出している。礫核石器とするべきか、刃部に摩滅痕が観察されることより打製石斧として扱った。32・33は磨石である。何れも楕円形の自然礫の上面を用いて磨っており、磨石とした。第4類とした磨石とはタイプが異なる。



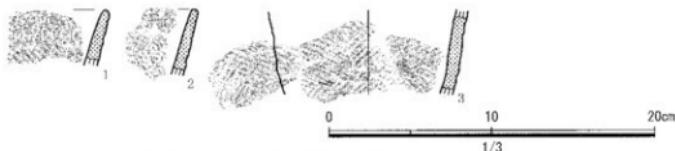
第22図 3・4号土坑

## 2 土 坑

### 3号土坑（第22・23図 図版19・33）

本土坑はC-22・23グリッドにおいて検出された。長軸122cm、短軸は78cmの楕円形を呈する。確認面下の掘り込みの深さは、30cmを測る。覆土は黒褐色を基調に3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は中期の上器の細片がわずかに含まれるが、床面から出土した遺物では関山式土器が中心となる。掲載遺物1～3は同一個体と思われる。1・2は口縁部の破片である。口縁直下にループ文が多段に施文され、以下は横帯のO段多条の縄文LR及びRLが羽状に施文される。遺構外出土遺物の第3群第1類g種の土器を中心となっていることより、本遺構の所属は関山I式段階の遺構と判断される。



第23図 3号土坑出土遺物

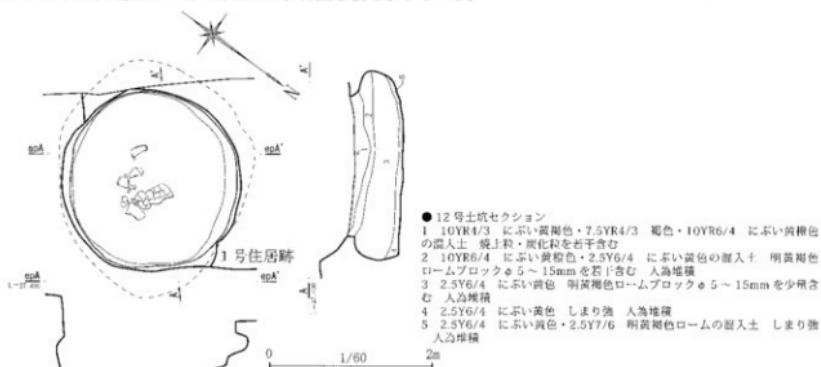
### 4号土坑（第22図 図版20）

本土坑はB-16グリッドにおいて検出された。2号古墳によって切られている。長軸は110cm、短軸側は不明である。楕円形を呈するものと思われる。確認面下の掘り込みの深さは、26cmを測る。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は覆土中より関山式土器の細片が僅かに出土したのみである。遺構外出土遺物の第3群第1・2類の土器が中心となっていることより本遺構の所属は関山式段階の遺構と判断される。

12号土坑（第24・25図 図版22・33）

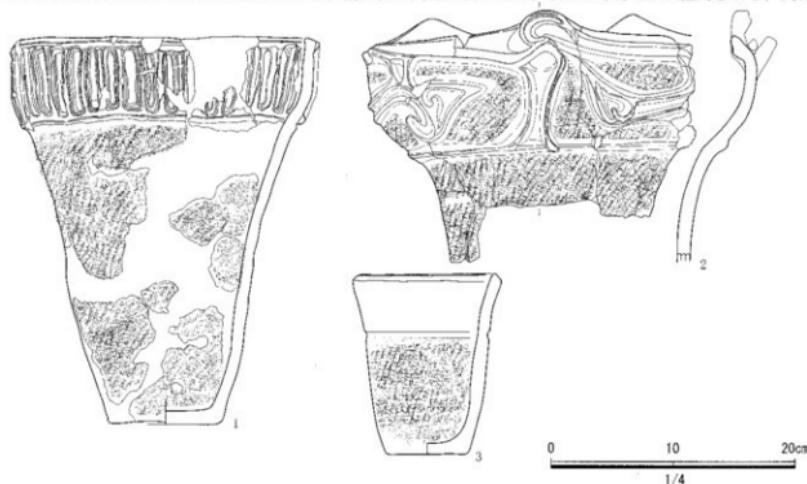
本土坑はC-25グリッドにおいて検出された。1号住居跡と重複するもので、同住居跡を切って構築されている。土坑確認面に於ける規模は南北2.20m、東西2.15mのほぼ円形であるが、袋状を呈する所謂プラスコピットであり、底部は最大で東西方向2.83m、南北2.37mの掘り込みを有する。確認面下の掘り込みの深さは、95cmを測る。覆土は5層に分層され、自然堆積を示している。



第24図 12号土坑

遺物は覆土上～中層にかけて完形の縄文中期加曾利E式土器が押しつぶされた状態で検出されている。遺構外出土物の第4群第6類a種の土器が中心となっていることより、本遺構の所属は加曾利E I式古段階と判断される。尚、本群の遺物は、遺構外からの出土は極めて少なく、僅かに土器片錠が2点検出されているのみで、該期の遺構の中心は北西側区にその中心部が存在する可能性が高い。

1は加曾利E I古式のキャリバー形を呈する深鉢のほぼ完形品である。中柱式土器の影響を受けるものであろうか、口縁部文様帶には棒状の隆帯により、竪区画の文様が描かれる。胸部は単節LRが施される。文様



第25図 12号土坑出土遺物

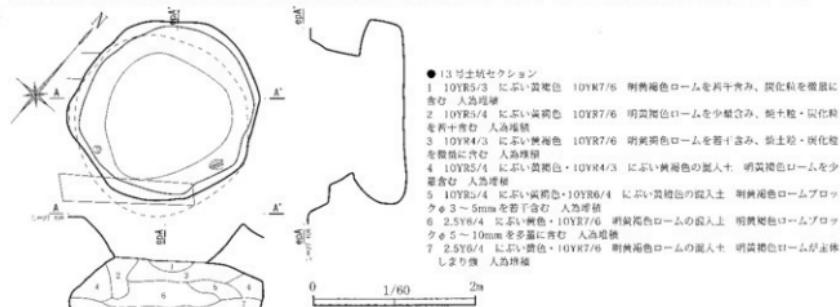
部には縄文は施文されていない。胎土中には金雲母の混入が目立つ。同様の遺物は県内では石岡市東大橋原遺跡に見られる。東大橋原例では、区画帶の中央に棒状の隆帯による渦巻き文が施文されるが、本遺物では横方向の梯子状に棒状の隆帯が全周するもので、渦巻き状の文様構成は行われていない。

2は3単位の渦巻き状の突起を有するキャリバー形の深鉢である。口縁部は外反して無文部を有す。口縁部文様帶は胴部の折れ部に巡る隆帯によって区画され、突起部から垂下する隆帯によって3区画に縱割される。内部に、渦巻き状の文様から劍先状の文様へと連結される横S字状の紋様構成が3単位描かれる。地文は単節LR。大木8a式の影響を強く感じさせるものである。加曾利E I式土器と判断した。

3は小形の深鉢である。ほぼ円筒状を呈し、口縁部わずかに開き、口唇部がやや外削ぎとなる。口縁部は太い沈線によって区画され、幅広の無文帶を形成する。胴部はLRの單節縄文を密に横回転施文するもので、胴部下半には施文されていない。供伴遺物遺物から本遺物も加曾利E I式土器と判断される。

### 13号土坑（第26・27図 図版22・34）

本土坑はC-26・27グリッドにおいて検出された。15号土坑と近接して検出されたものである。当初本地域は、縄文前期を中心とする包含層として捉えられていた部分であるが、精査を行ったところ2基のプラスコピットと2基の小ピットが確認されたものである。造構の南北軸は204cm、東西軸212cmの円形で袋状を呈するもので、底部は中断から東西方向では最大70cm掘り込まれ、所謂プラスコ状を呈するピットである。覆土最下層において3の縄文中期加曾利E I式の浅鉢が検出されている。確認面下の掘り込みの深さは、87cmを測る。覆土は7層に分層され、壁の崩落によるものか複雑な堆積状況を示すが、おおむね自然堆積と判断している。



第26図 13号土坑

遺物は縄文前期の土器、土師器がわずかに含まれるが、床面から出土した遺物は6個体が確認されており、加曾利E I式土器が中心となる。遺構外土遺物の第4幅第6類a種の上器が中心となっていることより本遺構の所属は加曾利E I式段階と判断される。遺物の総量は7247.4gを測る。

1はキャリバー形を呈する深鉢の上半部大破片である。口縁部は二重隆線が巡り、3単位の横S字状の文様に連結する劍先文様が配される。隆帯による窓枠状の区画の内部には、地文に単節LRの縄文が施文される。加曾利E I式土器と判断される。

2はやはりキャリバー形を呈する深鉢。接合しないが同一個体と判断される大破片2片である。口縁部には渦巻き状の小突起が付され、二重隆線によるクランク状の懸垂文及び渦巻きが連結されて描かれる。区画内には地文として0段多条のRL縄文が横回転で施文され、胴部は同縄文原体を縱方向に回転施文し文様部と胴部の地文を使い分けている。また、胴部には沈線による方形を意識する沈線による区画が二重線沈線(1本ずつ

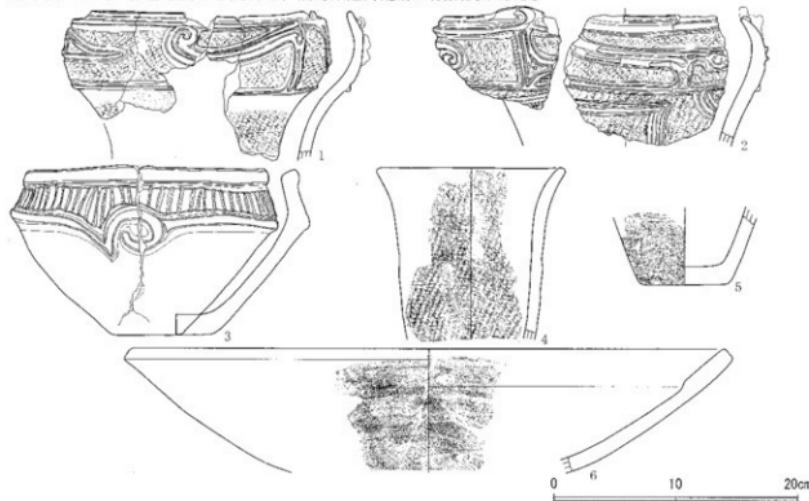
描かれる)によって描かれている。加曾利 E I 式土器と判断される。

3 は加曾利 E I 式浅鉢で、口縁の一部分を僅かに欠損するがほぼ完形である。口縁部は短く立つ。渦巻き状の文様部を起点とする隆帯により、3 単位の窓格状の凹画を設け、内部に縱方向の沈線が充填される。胴部はそろばん玉状を呈して屈曲するもので、胴部は無文である。加曾利 E I 式土器である。

4 は口縁が僅かに外反して聞く筒型の深鉢である。頭部の活れはもたずキャリバー形にはならない。口縁部文様帶を有しない縄文系の土器である。胎十中に金雲母の混入が顕著である。全面に単筋 LR の縄文が施文される。加曾利 E I 式土器と判断した。

5 は底部の破片資料である。全面無文で、胎上中には 4 同様に金雲母が多量に混入しており、一見では阿玉台式の土器にも似ている。器面の調整から本遺物も加曾利 E I 式と判断した。

6 は大形の浅鉢の破片である。口縁部は平縁と判断されるもので、無文である。口縁内面に断を有するものである。破損した資料は、広範囲に分散して出土しており、同一個体の資料で 1 号古墳の周溝からも出土している。大木 8a 式の影響を受ける資料で、福島県連郷遺跡に類似例がある。



第 27 図 13 号上坑出土遺物

14 号上坑 (第 20 図 図版 22・23)

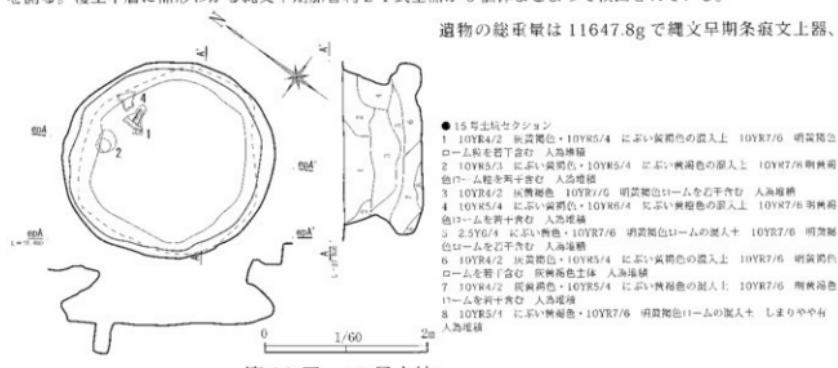
本土坑は B-8・9 グリッド、15 号住居跡の南側に重複して検出された。同住居跡を切っており本土坑の方が新しい。また、1 号方形周溝墓の西側溝の北端部が本遺構の上層を切っており、層位的に見れば縄文時代中期阿玉台 II 式よりも新しく、古墳時代前期の遺構よりは古い。

長軸南北方向は 3.32m、東西軸は西側が調査区の外になるため、2.02m のみ調査を行えている。円形を呈するものと判断される。覆土は黒褐色土・黄褐色土を基調にして 6 層に分層され、自然堆積を示している。確認面下の掘り込みの深さは、70cm を測る。柱穴は検出されておらず、また炉も無いことから土坑としているが、住居跡の可能性もある。

遺物は示した資料は 2 点で、1 は第 4 番第 2 類 b 種の遺物であり、15 号住居跡よりも掘り込みが深く別遺構であるが、出土した遺物から判断して 15 号住居跡とほぼ同時期の阿玉台式期と判断される。2 は同時期の上製品で土器片錐である。周縁がやや削られており、b 種とした遺物にやや近い。

15号土坑（第28・29図 図版22・23・34・35）

本土坑はC-26グリッドにおいて13号土坑に近接して検出された。南北軸は220cm短軸218cmの円形で袋状を呈する所謂フ拉斯コピットである。中段は擂鉢状に一日突った後、底部は大きく広がりオーバーハングする。中場の突出部分から南北方向で北に凡そ45cm、南に32cmオーバーハングする。底部北側より小ビットが1基穿たれている。ビットの規模は長軸25cm、短軸22cm、掘り込みは斜め方向で深さは底部から37cmを割る。覆土中層に器形わかる縄文中期加曾利E I式土器が6個体まとめて検出されている。



第28図 15号土坑

前期関山式土器、浮島式土器、中期初頭の下小野式土器等の破片が含まれるが、出土した遺物では加曾利E式が中心となる。遺構外出土物の第4扉第6類a種の土器が中心となっていることより本遺構の所属は加曾利E I式段階と判断される。

1はキャリバー形を呈するほぼ完形の土器である。口縁部に3単位の渦巻の橋状把手が付され、把手は2カ所で欠落している。頸部から口縁部にかけて文様部が構成される。口縁部文様帯は刻みを有する隆帯が巡り、3単位の窓枠状の区画を作る。また把手部の設置される3単位の中間部に渦巻き状の文様が構成され、窓枠状の区画の隆帯がこれに連結される。頸部は胴部上半に巡る太い2重隆帯によって区画帯が設けられる。何れも棒内には太い縱方向の沈線が充填される。胴部はLRの縄文を施文した後、平行沈線と蛇行沈線が垂下する。胎土には砂粒が多く含み雲母の混入も目立つ。加曾利E I式と判断した。

2はキャリバー形を呈する深鉢の資料である。底部を欠損しているがおおむね器形は判別出来る。口縁部には3単位の突起が付されていたものと思われるが、突起は何れも欠落している。口唇部は無文帯となって短く外反して開く。口縁部直下には縄目を回転施文した細い隆帯が突起部分より弧状に連結され、胴部上端部にはRLの縄文が横方向に1列整然と回転施文され、以下胴部には同じ原体のRL縄文が等間隔に縱方向に回転施文される。文様の構成と縱方向に縄文を施文する手法は、大木7b式の影響を強く感じさせるもので、加曾利E I式古段階又は中絆段階の資料である可能性が高い。

3はキャリバー形を呈する深鉢の胴部上半部の大破片である。口縁部の凡そ1/2程度遺存している。口縁部には渦巻き状の小突起が付され、これを起点に二重隆帯が口縁部に巡る。口縁部文様帯は頸部との境に巡る1条の隆帯によって区画され、区内にはやや細めの隆帯が波状に全周する。地文は口縁部紋様帯の内部は0段多条の単節RLが横方向の回転で施文され、胴部は同一原体が縱もしくは斜め方向に施文される。本遺物は、形状から加曾利E I式と判断されるが、同様の遺物としては日立市諭訪遺跡で出土している。同資料では、把手が付されているものの本資料では把手は確認出来ていない。欠損部分に存在した可能性もある。大木8b段階



第29図 15号土坑出土遺物

の古式とするか8a段階の影響と見るか問題のある資料である。

4はキャリバー形を呈する深鉢の同上半部大破片である。凡そ全体の1/2が残っている。平縁の口縁である。口縁部文様帶には、隆帯によるクランク文と渦巻きから連結される剣先文様が描かれる。また。口縁部文様帶の直下には繩文を施し無文帯が僅かながらの幅で巡る。地文は口縁部文様帶、胸部共に0段多条の単節RLが用いられるが、3同様口縁部では横方向の施文、胸部では方向に施文されている。

5は口縁がやや外反気味に聞く簡状の器形を呈する深鉢である。口縁直下は無文帯が幅広く巡り、胸部には縱方向に単節RLと無節Rの2種類の縄が施文されている。供伴関係より加曾利E I式と判断した。

6はコップ形を呈する小形の深鉢である。文様構成はもたず、ミニチュア土器とは言えない。底の底部から胸部は直線的に立ち、口縁部で僅かに内湾する。外面は無文である。胎土中には金雲母が目立つ。供伴関係より加曾利E I式と判断した。

### 3 炉穴

#### 1号炉 (第30図 図版23)

本炉跡は2号古墳の墳丘部C-17グリッドにおいて検出された。9号土坑及び2号炉が近接している。長軸は71cm、短軸55cm、深さ13cmの浅い皿状を呈する。焼土は北方向に偏って検出されている。焼土の範囲は

長軸方向で 50cm、短軸 46cm である。火床面はよく焼けており赤褐色を呈する。本炉跡からの出土遺物は確認されていない。しかしながら、2 号古墳の周溝内より第 2 群～4 級の条痕文土器が 169.1g 出土しており繩文早期の炉穴（ファイヤーピット）と想定される。

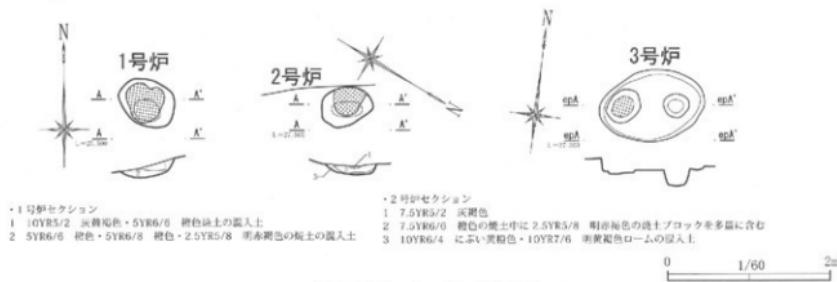
#### 2 号炉（第 30 図 図版 23）

本炉跡は 1 号炉同様 2 号古墳の埴丘部 C-17 グリッドにおいて検出された。9 号土坑と近接する。長軸 66cm、短軸 47cm、深さ 19cm を測るやはり浅い皿状を呈し、焼上は調査区域外に伸びているが確認部分で長軸 40cm、短軸 35cm の範囲に広がっている。火床面はよく焼けており、赤褐色を呈する。1 号同様遺物の検出はなかったが、やはり繩文早期末の遺構と判断している。

#### 3 号炉（第 30 図 図版 23）

本炉跡は 1 号古墳の埴丘上やや南寄りの C-27 グリッドにおいて検出されている。長軸は 127cm、短軸は 88cm、深さ 9cm を測る。炉の底部北側に円形の小ピットが確認されている。掘り込みの大きさは長軸 31cm、短軸 30cm のほぼ円形を呈し深さは 15cm を測る。南側には火床面が検出されている。規模は長軸 43cm、短軸 35cm、深さは 6cm で浅い皿状の 2 段の掘り込みとなっている。小ピットを有するタイプの炉穴である。日床面はやや被熱の程度が弱いものの、焼土の分布は明瞭で赤褐色を呈している。

遺物は検出されていない。しかし、1 号古墳の周辺及び周溝内より条痕を有する第 2 群 2～4 級の土器が 500 g 出土しており、やはり早期の遺構と捉えられる。



第 30 図 1・2・3 号炉

#### 4 ピット

##### 1号ピット（第 31 図 図版 23）

本ピットは C-22 グリッドに於いて検出された。長軸 62cm、短軸 58cm、深さは確認面下 38cm を測る。2 号土坑及び 12 号住居跡に挟まれるように検出されている。断面形状は鍋底状で覆土は黒褐色を基調に上下 2 層に分層される。

遺物は条痕文系土器と加曾利 E 式土器が出土している。遺物から繩文中期の遺構の可能性がある。



第 31 図 1・2 号ピット

## 2号ピット（第31図 図版23）

本ピットはC-22グリッドに於いて1号ピットに近接して検出された。長軸38cm、短軸30cm、深さは確認面下26cmを測る。2号土坑の南側に近接する。断面形状はU字状で覆土は暗褐色を基調に上下2層に分層される。

遺物は条痕文系土器と加曾利E式土器（第4群5類）のが出土している。遺物から縄文中期の遺構の可能性がある。

## 第2項 古墳時代

### 1 古 墳

#### 1号古墳（第32図 図版16・35）

本古墳は調査区の東端部C-26・27グリッドにおいて検出された。調査区の外側に延びているため全容を調査できていないが、円墳と判断される。周溝外側の立ち上がり部分までの直径は10.68mを測る。周溝は幅1.38～0.96m、深さ北西側の深い部分で確認面下45cm、東側では31cmほどになる。遺物は周溝内より土師器が213.1g出土している。その他では縄文前期の遺物が圧倒的な量を誇っている。

主体部は検出されていない。中央やや南東寄りに焼土を有する1号炉跡が検出されているものの、本遺構にかかわるものではない。

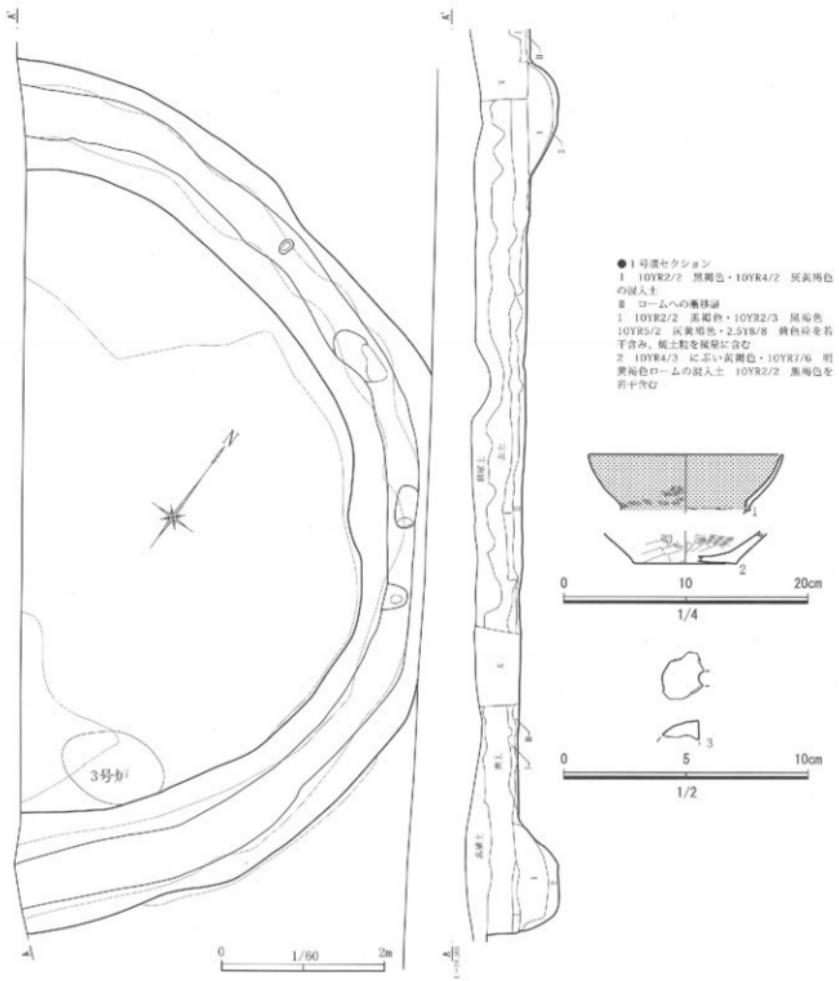
本住居出土遺物として掲載した資料は3点である。1は壺である。本遺物は13号住居出土遺物と接合している。2は甕の底部片である。3は球状を呈するとと思われる土玉である。再編で明瞭ではない。これらの遺物が本古墳に伴うものならば第10群1類の古墳時代前期の資料ということになる。古墳群が中期末から後期の群集墳となるならば船棺が生じてしまう。おそらく周辺の古墳時代前期の集落を破壊して古墳が構築されたために混入した遺物と判断したい。尚遺物の観察は表7にまとめた。

#### 2号墳（第33図 図版17・35）

本古墳はB・C-16・17・18・19・20グリッドに於いて検出されている。南西側及び北東側の一部が調査区の外となっているために全容を知ることはできなかったが、確認された部分から円墳と想定される。中央部分まで調査が行えているものの主体部は検出されていない。周溝外側の立ち上がりまでの直径は、22.18mを測り円墳としては1号に比較して規模が大きい。主体部は検出されていない。墳丘の中央付近には9号上坑と1・2号炉跡が存在するが本古墳に伴うものではない。9号土坑は墳丘が削平された後に構築されたものと想定される。

周溝は最大幅4.3m、最小部分で2.53mと周溝の幅も広い。深さは82～95cmの掘り込みをもつ。斜面部に構築された後期の群集墳と想定される。周辺に存在する古墳時代前期の集落4・7・9・13号住居跡及び1号方形周溝墓とは時期が後出のものとなる。

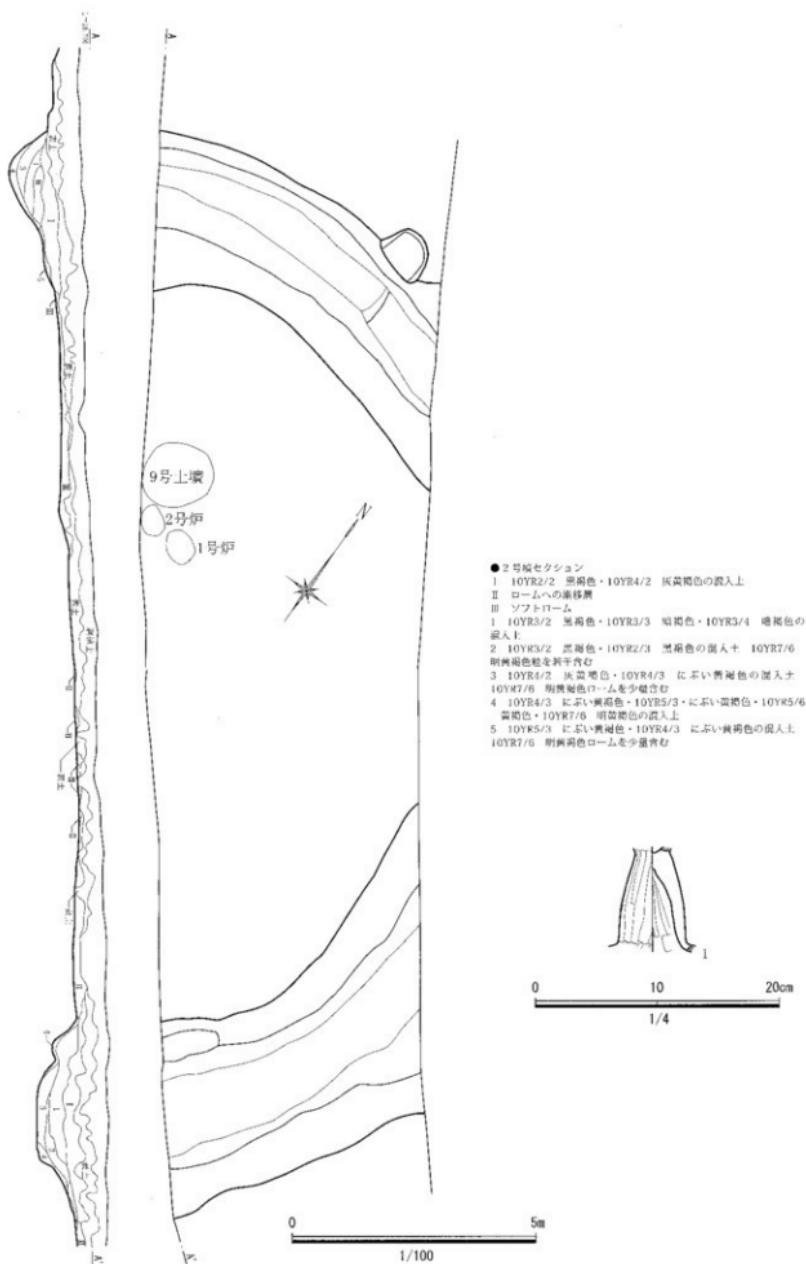
遺物は本遺構に伴うと判断される資料は、古墳中期の高杯脚部破片1点のみである。その他、出土遺物では縄文草創期撚糸文系土器群から中世かわらけや近世陶磁器まで出土している。特に条痕文系土器群が集中する傾向にあり、中央部の炉跡はファイヤーピットと判断している。尚遺物の観察は表8にまとめた。



第32図 1号古墳・出土遺物

表7 1号古墳出土遺物観察表

遺物番号	No.	江紀	種類	形状	11年 武井 勢高	直鑿	器物の特徴	器物の特徴	色調	粘土	焼成	保存率	備考
1号三脚	1	1フン	土師製	壺	(19.8) (4.8) —	19.5	口縁部のみの資料。口縁は様やや内凹溝と短く開く。	内部面尚方にテラグ付でガラ、外面部は粘土付着部分に微少な凹起がある。	内面 2.5YR8/6 外面 2.5YR5/6 明赤褐色	浅灰色やや多い。 黑色斑子 白色斑子 黄色斑子	良好、一部 次焼成有り。	1/4	1号古墳出土遺物 と比較して、 古式土師器 内外共共に色彩
	2	1フン	土師製	壺	— (8.4) (2.6)	34.7	底面の2/3の資料。底盤はやや上昇気流の形跡。 斜面下端は底盤に向て傾く。	舟底面にテラグの痕。 部分的に火照が観察され、内側はヘナナゲの形跡。 外側は上昇の煙灰、底部はハケアリ。	内面 10Y6/4 外面 10Y5/6 明赤褐色	褐色やや多く 黑色斑子 白色斑子 黄色斑子 青色斑子	良好	壺 1/3	古式土師器
	3	1フン	土師器	土瓦	和(1.9) (0.3) —	2.3	底盤。	舟底面に上昇形。	2.5Y8/6 橙	褐色斑子、黒色 斑子	良好	1/8	



第33図 2号古墳・出土遺物

表8 2号古墳出土遺物観察表

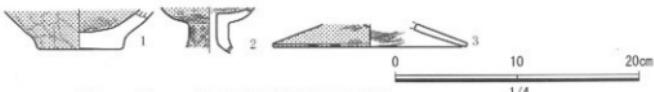
遺物番号	No.	記述	種類	基種	口径 底径 高さ	重量	表面の特徴	盤形の特徴	色調	胎土	焼成度	保存率	備考
2号古墳	1	2片	土師器	高杯脚形	— (8.4)	149.2	表面に凹凸の鋸歯状溝、周縁部に膨らみを持ち、側面で凹曲して窪く。	外縁は直角の方角からカクツアリ、内面は逆U字上に横方向の長いナギ状溝の後に下縁をへて側えていく。	内面赤 7.5V10B/8 外面赤 7.5V10B/8	赤好 赤褐色 子灰石-石灰 灰青灰や 多い、白色 淡褐色斑點。	細粒や多 い、黑色粒 子灰石-石灰 灰青灰や 多い、白色 淡褐色斑點。	良好 相手形 (底部 大箱)	古墳時代中期

## 2 方形周溝墓

## 1号方形周溝墓 (第34・35図 図版18・35)

本遺構は東西方向に走る北側溝はA・B-7 グリッド、これにはほぼ直交する西側溝はB-8・9・10 グリッドにおいて検出された。この2条の溝をもって方形周溝墓と想定した。調査を行えたのは北側の溝が3.70m、西側溝が7.60mである。確認面における規模は北側溝で幅1.55m、深さ31cm、西側溝が幅1.1m、深さ27cmを測る。溝の断面形状は浅い皿状を呈している。覆土は古墳前期の集落の覆土に酷似しており、黒褐色を呈する自然堆積で4層に分層される。

遺物は多量の縄文土器に混じって僅か3点の土師器が出土している。1は甕である古式土師器の底部片である。2は器台で中央部に孔が貫通している。赤彩されている。3は高环の裾部片である。刷毛整形され、赤彩される。以上の出土遺物から本住居跡は第10群1類の遺構と判断した。尚遺物の観察は表●にまとめた。



第34図 1号方形周溝墓出土遺物

表9 1号方形周溝墓出土遺物観察表

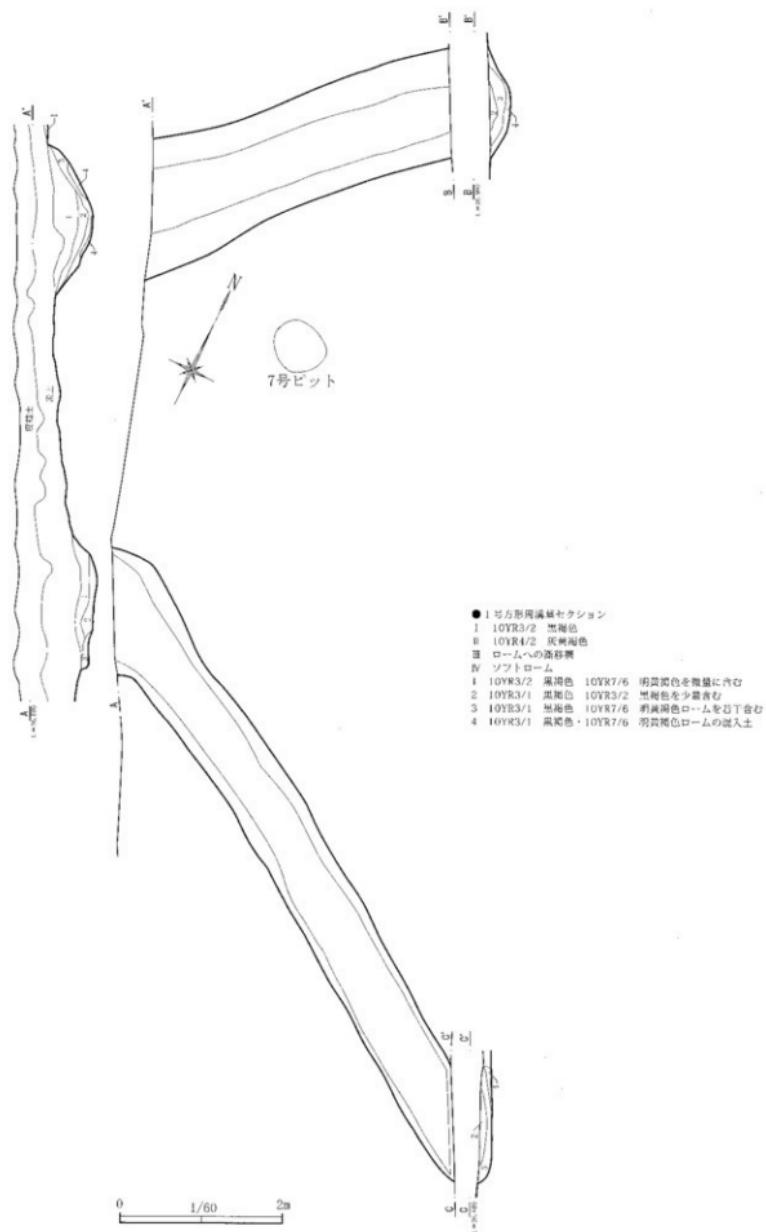
遺物番号	No.	記述	種類	基種	口径 底径 高さ	重量	表面の特徴	盤形の特徴	色調	胎土	焼成度	保存率	備考
1号方形周溝墓	1	1方	土師器	甕	— (2.2)	173.9	高圓底平底、口部は壊れ、内面は釉無し、側面は下端に強烈な内向気球形に向く。	舟底及び内面に横2ヶ所アリ、内面は刷毛が底工具によろこび。	内面 7.5V10B/8 外面 7.5V10B/8	赤好 赤褐色 子灰石-石灰 灰青灰や 多い、白色 淡褐色斑點。	良好 0/4	古式土師器 外面赤彩	
	2	1方	土師器	器台	— (3.7)	59.2	縦合縫の資料、土塊削下 型の器台で、側面は直角的、中央部に開通孔があり。	外縁部に丁寧なび き、内面は舟底型の 刷毛が施設される。側 面内面はナダ。	内面 7.5V10B/8 外面 7.5V10B/8	赤好 赤褐色 子灰石-石灰 灰青灰や 多い、白色 淡褐色斑點。	良好 0/4	伝令器 のもの 柱片 古式土師器	
	3	1方	土師器	高杯	— (16.6) (13.6)	縦壓器の資料、底部は直 角的で大きめ、縁部は 山字形で形成される。	内面は舟底型の刷 毛アリ、内面は舟底型の 刷毛アリ。	内面 19V10B/3 外面 19V10B/3	赤好 赤褐色 子灰石-石灰 灰青灰 白帶 淡褐色	良好 次第成 りつつ ある。 堆積少 量。	伝令器 のもの 柱片 古式土師器 外表面赤彩		

## 3 住居跡

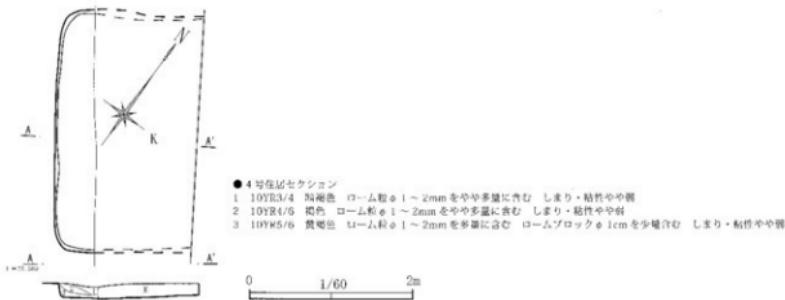
## 4号住居跡 (第36図 図版8)

本住居跡はB-C-24・25において検出された。確認調査におけるトレンチが住居のほぼ中央を縦断しており、さらに北東側は調査区域の外となっており、調査を行えたのは南西壁際的一部分にとどまっている。南北方向は2.9mを測り、やや小形の住居と判断される。確認面下の掘り込みの深さは、凡そ17cmと浅い。僅かに残る堆積部分では土層は暗褐色土を基調に3層に分層され、壁際の三角堆積からレンズ状の堆積から自然堆積と判断される。

遺物は縄文土器を中心に出土しているが僅かに1点のみ赤彩が施された古式の土師器で片が1片出土している。覆土の状況及び第10群第1類の同遺物をもって古墳時代前期の遺構と判断した。その他縄文土器は関山式土器186.6g、中期土器片43g、条痕文土器33.3gが出土している。尚掲載遺物は無い。



第35図 1号方形周溝墓



第36図 4号住居跡

#### 7号住居跡（第41図 図版9）

本住居跡はC-15 グリッドに於いて検出されている。平面形状はおおむね長方形を呈するもので。東西幅最大4m、南北4.87mを測る。確認面下の掘り込みは壁際の最新部で17cm程度と浅い。中央部分に近世の3号溝及び8号土坑によって擾乱されており、全体のプランがほぼ検出できているものの状況は不明な点が多い。

遺物は全く検出されておらず、本住居からの遺物は無い。従って住居の所属時期は不明であるが、古墳時代前期の遺構の覆土と類似することから、該期の遺構と判断した。



第37図 9号住居跡

#### 9号住居跡（第37図 図版9）

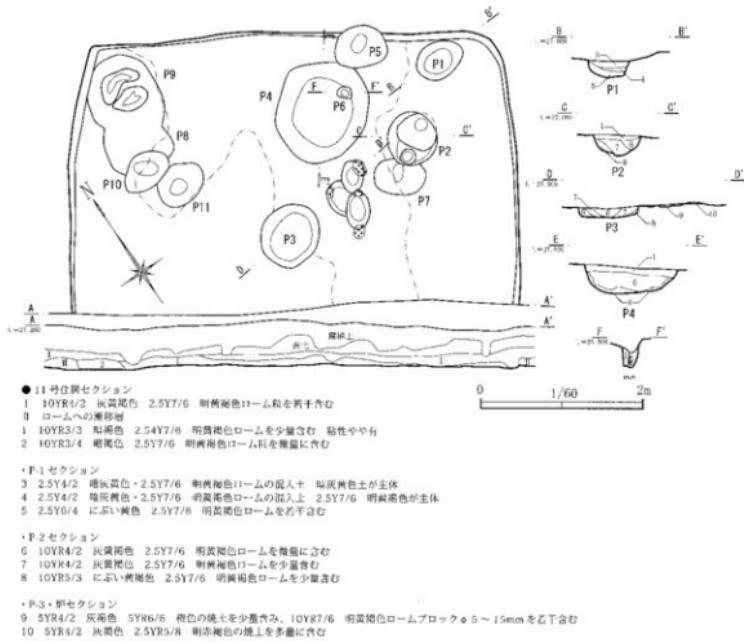
本住居跡はB-12 グリッドに於いて検出された。住居跡の掘り込みが浅く、西側が傾斜のために削平されている。東及び北壁はほとんどが削られて確認できていない。住居跡の平面形状は方形を呈するものと想定される。南北方向の規模は2.02mを測る。東西方向は不明。住居跡の東側半分ほどの調査を行っているものと判断される。覆土は3層に分層され、東側の最深部分で16cmと深い。東側床面は全体に硬化面が広がる。硬化面が途切れる住居跡の中央付近に炉が設置されている。長軸68cm、短軸58cmを測る。掘り込みは浅い皿状を呈し、深さは8cmほどで橙色の焼土が充填されている。

遺物は前期縄文土器 30.4g、土師器細片 3gが出土している。掲載資料は無い。

覆土の状況及び細片の土師器の出土より、古墳時代前期の住居と判断した。

### 11号住居跡（第38・39図 図版12）

本住居跡は調査区の北西端部のD-1・2グリッドに於いて検出されている。北西から南東方向の壁は5.46mを測る。南西方向は調査区域の外となり、北東から南北方向は不明である。3.35mほど調査が行われている。全体の2分の1強であろうか。確認面下の掘り込みは、2~4cmと浅い。覆土は、2層に分層されるが、極めて浅く明確に堆積状況は確認できていない。床面の硬化面は北東側壁の中央部分から南西側調査区の南側に偏った方向に広がる。床面の中央付近に4基の楕円形の炉が鉗足状に連結されて検出されている。1号炉は65×40cm、2号炉は43×30cm、3号炉は45×29cm、4号炉は38×28cmを測る。何れも掘り込みは1~2cm程度と浅く火床面はよく焼けている。また、床面に5基のピット（P）が検出されている。P1は住居跡東側コーナー付近に近接するもので60×45cm、深さ20cm、P2は63cmの円形で底部は西側と東側の2基に分かれ瓢状になる。東側は深さ78cm、西側は27cmでテラス状になっている。P3は楕円形の土壌状を呈する。76×68cm、深さ13cmで浅い皿状を呈する。P4はP3同様に楕円形の土壌状を呈するもので、125×105cm、深さ29cmを測る。何れも住居跡に伴うものと判断されるが、柱穴の掘り方となるものは、P2のみでその他の性格は不明である。



第38図 11号住居跡

また、調査終了後に床面を剥がしたところ、P5~11が検出された。P7・8、P10・11は位置関係より本来の柱穴の可能性がある。それぞれ近接しており、立て替えが行われた可能性を示している。P5は壁際に位置するもので65×52cm、深さ52cm、P6は20×15cm、深さ52cmを測り、柱痕が検出されている。P7は55×47cm、深さ45cm、P8は63×42cm、深さ49cm、P9は北側コーナー付近に位置し規模は112×89cm、深さ28cmで貯蔵穴の可能性が想定できる。P10は、60×40cm、深さ74cm、P11は59×47cm、深さ63cm

を測る。

遺物は第10群第1類古式土師器の高杯が3点出土している。1は高杯の脚部、2は上塊部、3は高杯の脚部である。脚部の側面には円孔が穿たれ短くラッパ状に開く形状のものである。尚遺物の観察は表10にまとめた。



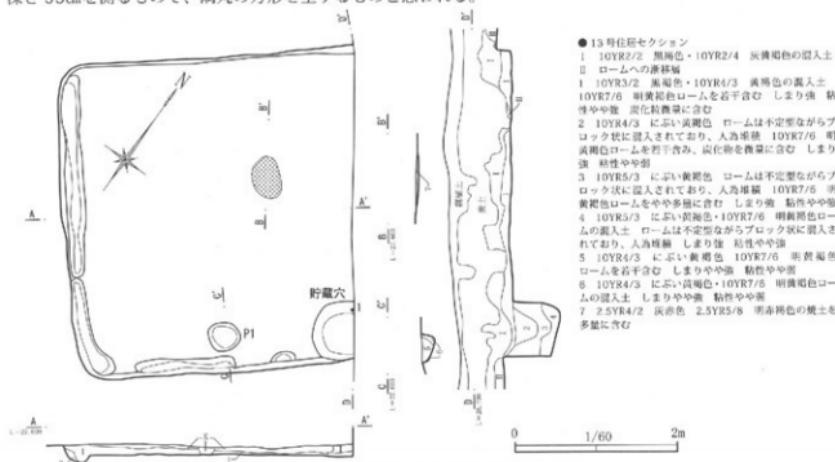
第39図 11号住居跡出土遺物

表10 11号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	No.	記述	種類	断面	直径 横径 縦径 高さ	表面の特徴	断面の特徴	色調	土質	洗成	保存率	備考	(cm・g)
11号住居跡	1	一例	土師器	高杯	— (14.0) (4.3)	細部の付着物有り。脚部は手前にやや膨らみを持ち、底面には内側から外側に向かって横格子が打たれている。	底面は黒目、内面はナチュラル。口部は外表面に凹凸があり、孔が残されている。	0YR7/4 に赤い痕跡	砂粒多く、黄褐色～黄褐色～青色	高杯	断面 1/8	古式土師器	
	2	No.1・2	土師器	高杯	— (11.2) — (CL)	土塊削りの痕跡。土塊削りは内側と外側に施されている。	外表面に凹凸がある部分は白目で塗装される。内面はナチュラル。口部は内側に凹凸がある。	内面 7.5YR7/4 に赤い痕跡	砂粒多い、黄 色～灰白色～青 色	上層 1/8	古式土師器		
	3	No.1	土師器	高杯	— (11.0) (4.3)	脚部は直角的に削り、これは4cm等高部に寄り付いている。	外表面は黒目、内面はナチュラル。脚部は外表面に広がり、孔は外側から穿孔され内側に軸子が施されている。	内面 7.5YR6/6 に赤い痕跡	砂粒多く、黄 色～青色～青 色	底盤 1/2	古式土師器		

13号住居跡（第40図 図版14）

本住居跡はB・C-20・21グリッドにまたがって検出されている。北東側は調査区の外になり、全容は捉えていない。方形を呈するものと判断され、南北方向の壁は3.87mを測る。東西方向は3.45mの幅で調査を行っている。確認面下の掘り込みの深さは、12cm、周溝部分で21cmを測る。覆土は黒褐色土を基調に2層に分層される。床面の硬化は明瞭ではないが、中央や北よりの位置に炉が設置されている。長軸52cm×短軸33cmの焼上の分布として捉えられたもので、掘り込みはほとんどない。火床面はよく焼けており、赤褐色を呈する。南側及び西側壁下には壁溝が巡る。北側には確認されていない。南側壁に近接して長軸40cm×短軸36cm、深さ16cmのP1が、さらにその東側に近接して貯蔵穴が1基検出されている。長軸70cm、短軸方向は不明、深さ53cmを測るもので、隅丸の形を呈するものと思われる。



第40図 13号住居跡

#### ● 13号住居セクション

- 1 10YR2/2 黒褐色～10YR2/4 明黄色の混入土
- 2 ロームへの変移層
- 1 10YR3/2 黑褐色～10YR4/3 深褐色の混入土
- 1 10YR7/6 明黄色のロームを若干含む しまり強 粘性やや強 腐食性無
- 2 10YR4/3 に赤い黄褐色 ロームは不定形ながらブロック状に侵入されており、人為堆積 10YR7/6 明黄色ロームを若干含み、腐食性を含む しまり強 粘性やや強
- 3 10YR5/3 に赤い黄褐色 ロームは不定形ながらブロック状に侵入されており、人為堆積 10YR7/6 明黄色ロームを若干含む しまり強 粘性やや強
- 4 10YR5/3 に赤い黄褐色～10YR7/6 明黄色ロームの混入土 ロームは不定形ながらブロック状に侵入されており、人為堆積 しまり強 粘性やや強
- 5 10YR4/3 に赤い黄褐色 10YR7/6 明黄色ロームを若干含む しまり強 粘性やや強
- 6 10YR4/3 に赤い黄褐色～10YR7/6 明黄色ロームの混入土 しまりやや強 粘性やや強
- 7 2.5YR4/2 漆赤色 2.5YR5/8 明赤褐色の焼土を多量に含む

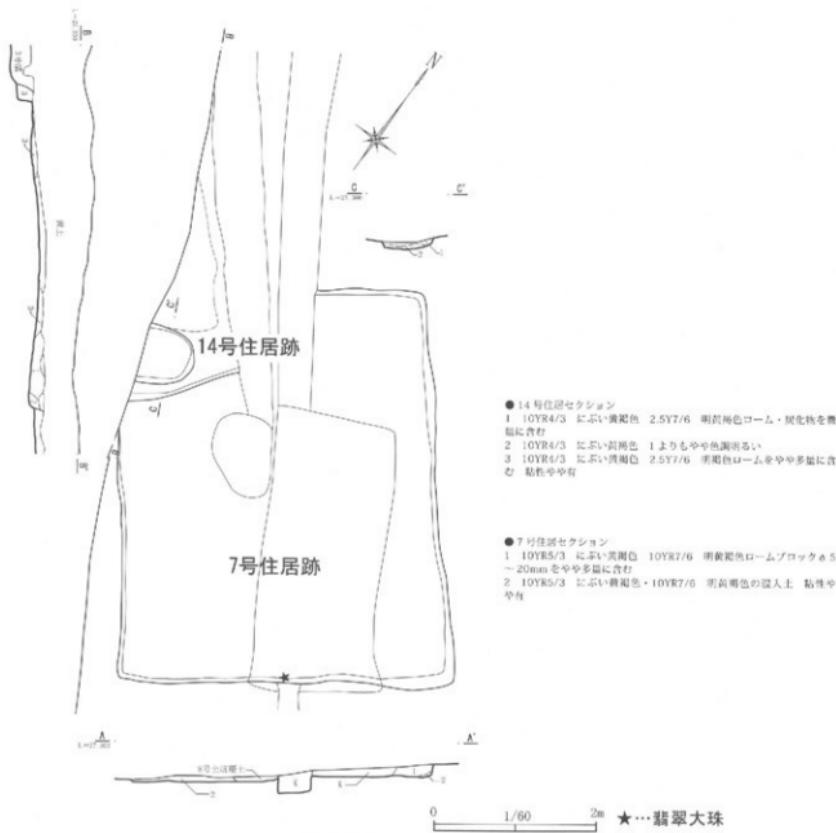
遺物は1の古式土師器の壺が貯蔵穴より出土している。尚、1の遺物は1号古墳出土遺物と接合している。1号古墳の遺物として掲載している。その他古式土師器の細片が106g出土しているものの、形状を示せる資料は無かった。縄文時代の遺物は撚糸文土器から壠之内式まで混在している。

従って本遺構は第10群1類の遺物が出土したことより、古墳時代前期の所産と考えられる。

#### 14号住居跡（第41図 図版14）

本住居跡はC-14・15グリッドに於いて検出された。7号住居跡を切って構築され、3号溝（現代の擾乱）によつて切られている。調査を行えたのは南側壁で1.37m、南北方向が2.45mである。中央部に硬化面が広がっている。南壁側にピットが1基検出されている。楕円形を呈し、長軸は調査区外にかかり不明、短軸69cm、深さは14cmを測る。長楕円形を呈するものと判断され、断面系は浅い皿状である。柱穴とするよりも貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物では繩文前期及び中期の土器が24.5g出土しているものの、本住居跡に伴うと判断された遺物は検出されていない。7号住居跡との重複関係、住居跡の形状並びに覆土の状況から古墳時代前期の遺構と判断した。



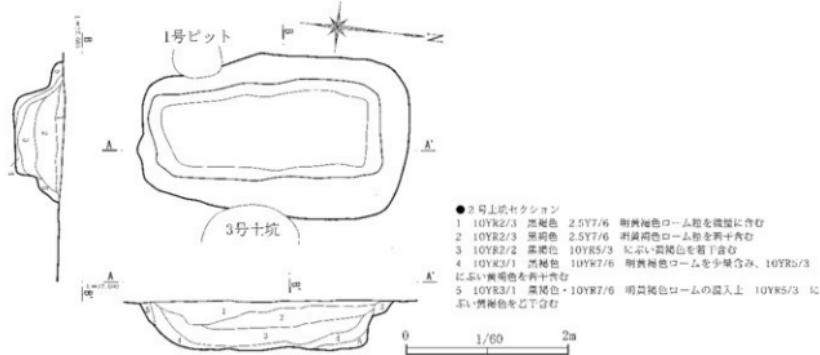
第41図 7・14号住居跡

## 4 土坑

### 2号土坑（第42図 図版19）

本土坑はC-22・23グリッドにおいて検出された。長軸は3.25m、短軸1.92mの長方形を呈する。断面の形状は箱型で、上端部が緩やかにテラス状に開く。確認面下の掘り込みの深さは、最深部で60cmを測る。覆土は黒褐色を基調に5層に分層され、自然堆積を示している。

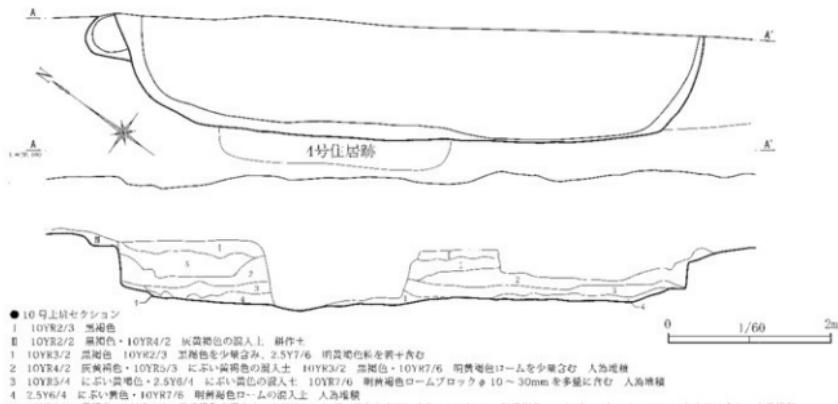
遺物は縄文早期より縄文後期の資料まで出土している。中期の土器の出土量が601.5gと最も多いが、上坑の形状及び覆土から古墳時代以降の遺構と判断した。1号古墳と2号古墳のほぼ中間に位置している。古墳の主体部の可能性が想定されるものの、本土坑を取り廻む溝は検出されておらず、古墳とは直接関連づけるものではなかった。



第42図 2号土坑

### 10号土坑（第43・44図）

本土坑はB-24・25グリッドに於いて検出された。確認調査時に大型土坑として捉えられていたものである。東側は調査区域の外になっており、全容は捉えられていない。4号住居跡との重複部分に確認トレンチが入った。



第43図 10号土坑

たために、新旧関係を捉えられていないが、4号住居跡よりも古い可能性が高い。プランは長楕円形を呈するものであろうか、北西から南東方向の軸は7.21mを測り、北東から南西方向は最大で1.35mの幅で調査が行えている。確認面からの掘り込みの深さは、92cmを測るもので、覆土は自然堆積で5層に分層される。形状から判断して住居跡の可能性がある。

遺物は呈示出来たものは古式土師器2点である。遺物から判断して古墳前期の遺構としたが、縄文時代の遺物も多量に検出されており、覆土及び形状から縄文時代の住居跡の可能性も高い。尚遺物の観察は表11にまとめた。



第44図 10号土坑出土遺物

表11 10号土坑出土遺物観察表

遺物番号		No.	作紀	種別	基準	目録 番号 (基準)	基質	断面の特徴	表面の特徴	大きさ	地十	種別	保存状 態	備考
10号土坑	1	SK10	土師器	漆	(22.5) (6.5)	23.2	円錐形ののみの資料。漆 皮はやや薄く灰褐色に 變化し、内面はくの字に開 け、細かい孔を意識的に施 す。	表面は無施色で上部 に漆皮やや薄く灰褐色に 變化し、下部は漆皮を剥 離する所がある。	外径 10.0cm 厚 1.4cm	漆 皮を剥 離する 所がある。	漆 皮を剥 離する 所がある。	漆 皮を剥 離する 所がある。	古式土器類	口縁部 片
	2	SK10	土師器	高杯	— (5.05)	61.1	上端加厚付縁部は欠失 し、下部は内側に開けた 状態で、内側にシケ付 いたところが痕跡として 残る。	表面は堅苦しい丁寧な 施色で、内側は漆皮を剥 離したところが空氣で 変色している。孔は外側より開け られ内側より開けられた ところが確認できる。	内径 3.7cm 外径 2.6cm 厚 0.5cm	漆 皮を剥 離する 所がある。	漆 皮を剥 離する 所がある。	漆 皮を剥 離する 所がある。	古式・かわ器	

## 5 ピット

### 6号ピット（第45図 図版23）

本ピットはB-10グリッドに於いて検出された。長軸42cm、短軸38cm、深さは確認面下27cmを測る。本遺構は10号住居跡に近接して検出された。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は1号方形周溝塗に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

### 7号ピット（第45図 図版24）

本ピットはB-8グリッドに於いて検出された。長軸65cm、短軸58cm、深さは確認面下33cmを測る。本遺構は15号住居の覆土中に於いて検出されたもので、同住居跡よりも新しい。覆土中から阿玉台式土器が出土しているものの15号住居跡の遺物が混入したものと判断される。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は1号方形周溝塗に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に古墳時代の遺物の出土は無い。

### 22号ピット（第45図 図版24）

本ピットはC-23グリッドに於いて検出された。長軸25cm、短軸20cm、深さは確認面下18cmを測る。本遺構は3号住居の東側に近接して検出されたものである。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は1号古墳に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

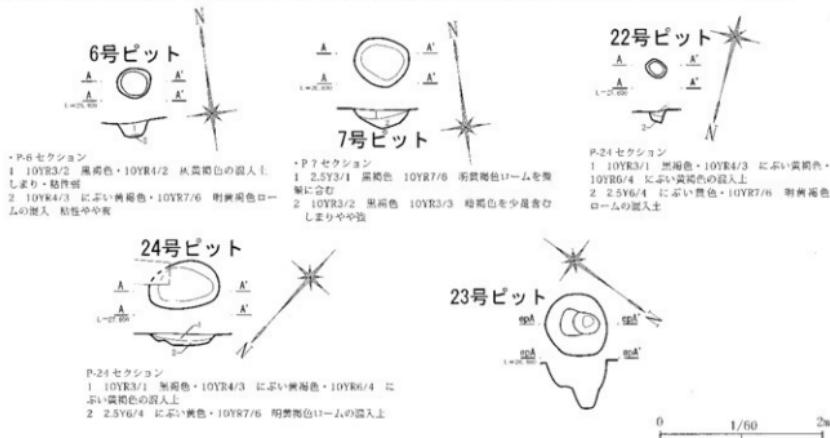
### 23号ピット（第45図）

本ピットはC-26グリッドに於いて検出された。長軸76cm、短軸74cm、深さは確認面下56cmを測る。本遺構は13・15号土坑の間で検出されたものである。覆土は、暗褐色の单層で底部は2段になっている。遺構は縄文時代の包含層を掘り下げ中に検出されたものであり、縄文時代の遺構の可能性があるが、古墳の墳丘上か

らの検出と、15号土坑と明らかに覆土が異なることより古墳時代とした。

#### 24号ピット（第45図）

本ピットはC-26グリッドに於いて検出された。長軸85cm、短軸57cm、深さは確認面下13cmを測る。浅井皿状を呈する。本遺構も23号ピット同様13・15号土坑の間で検出されたものである。覆土は、黒褐色を基調に2層に分層される。遺構は縄文時代の包含層を掘り下げ中に検出されたものであり、縄文時代の遺構の可能性があるが、古墳の墳丘上からの検出と、15号土坑と明らかに覆土が異なることより古墳時代とした。



第45図 6・7・22・23・24号ピット

### 第3項 中・近世

#### 1 土坑

##### 5号土坑（第46図 図版20）

本土坑はB-10グリッドに於いて検出された。短軸68cm、長軸側は調査区の外となり不明である。深さは確認面下21cmを測る。覆土は黒褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は6号土坑に似ていることより、中・近世の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

##### 6号土壙（第46・47図 図版20）

本事例は調査区の西側A・B・4グリッドに於いて検出された。遺構確認面に五輪塔の空風輪、及び宝篋印塔の塔身部が検出されており、墓坑の可能性が想定されていた。掘り方は長軸97cm、短軸70cmの長方形を呈し、鍋底状の掘り方を呈す。確認面下の掘り込みの深さは、56cmを測る。覆土は明黄褐色上の4層に分層され、人為的堆積である。

調査の結果、底部付近3層から人骨の出土が確認された。骨は火を受けておらず、土葬されたものと判断される。坑の規模からはやや疑問が残るものであるが科学分析鑑定によって成人骨と判っており、小規模ではあるが成人の墓と想定される。尚、石塔が遺存していた点より、身分の高い武家・僧侶の墓の可能性が考えられる。遺物は人骨の外に石塔2点がある。石塔は遺構確認面で出土しているもので、墓坑の上に設置されていたものと判断される。また、五輪塔と宝篋印塔の組み合わせとなっており、本来別の組み合せであったものを利

用している可能性がある。但し、宝篋印塔の上下両面には差し込みのための突起が設けられているため、2の塔身上に1の空風輪を重ねることは困難と考えられる。

1は五輪塔の空風輪である。空輪と風輪は連結されており、風輪の下端は差し込みのための突起の造り出しされらず、平坦に整形されている。種子は風化によって消滅している。石材には花崗岩が用いられているものの風化が激しい。規模は縦29.3cm、厚さ18.7cm、重量14600gを測る。かなり大型の五輪塔と想定される。但し、2の宝篋印塔の塔身が方形を呈し、地輪に似る遺物で近接して出土していることから組み合わせて用いられていた可能性がある。

2は宝篋印塔の塔身部である。側面4面には造り出しによって方形に区画を設け、上下両面には接合のための突起が設けられている。横16.8cm、縦16.6cm、内面の区画は縦9.4cm、横8.0cmを測る。突起部は直径4.7cmの円形で天地共に1.3cm程突出している。側面4面共に内部に種子が墨書きで書かれている。尚遺物の観察は表12にまとめた。

尚、出土人骨については国立歴史民俗博物館の西本教授に所見による科学分析を依頼した。その結果は以下の通りである。

人骨は歯を見ると2体分の可能性がある。1号人骨はLM3上(親知らず)、RM1上の歯が確認されており、50代の熟年成人の歯である。2号人骨は30~40代の上顎左右RM3、LM3の親知らず、LM1の下顎歯、骨は1体分と判断される。頭骸骨、骨盤、手、足の何れも一部である。歯のみ2体分検出されていることは、疑問が残る。

表12 6号土壙出土遺物観察表

遺物番号	No.	状況	特徴	判明 部位 位置	重量	剥離の状態	裏面の状態	色調	粒子	機械	保存状	備考
6号土壙	1	SK06No.1	五輪塔	表面	縦29.3 横18.7 14600	表面である。外輪は風化が進み、風輪は剥離されている。裏面の突起部は剥離している。石材には花崗岩が用いられており、風化が激しい。種子は確認できない。倒壊したものを想定される。						
	2	SK06No.2	宝篋印塔	塔身	縦16.8 横16.6 9600	9.4cm×8.0cmの区画で構成される。裏面の突起部は剥離され、裏面の裏面に墨書きで種子が残されている。石材は花崗岩が用いられている。風化が激しい。						
	3	SK06No.4×5	人骨	—	108.6	頭蓋骨・脊柱・手・足の骨等の遺物。骨盤に附着している。頭蓋骨は複数の骨で構成され、骨盤は複数の骨で構成され、手足は複数の骨で構成されている。骨盤は骨盤骨と坐骨の連続性・強度に問題がある。手足は手・足の骨と指の骨である。年齢は30~40代と推定される。手足は2体分の資料と判断される。						

### 8号土坑 (第46図)

本土坑はC-15グリッドに於いて検出された。長軸107cm、短軸68cm、深さは確認面下33cmを測る。本遺構は7号住居の覆土中に於いて検出されたもので、同住居跡よりも新しい。覆土は黄褐色を基調として2層に分層できるが、覆土は6号土壙に似ていることより、中・近世遺構と判断した。3号溝が重複するが新旧関係は不明。同溝は現代ゴミが混入したことより擾乱としている。本土坑出土遺物はない。

### 9号土壙 (第46・48図 図版21・36)

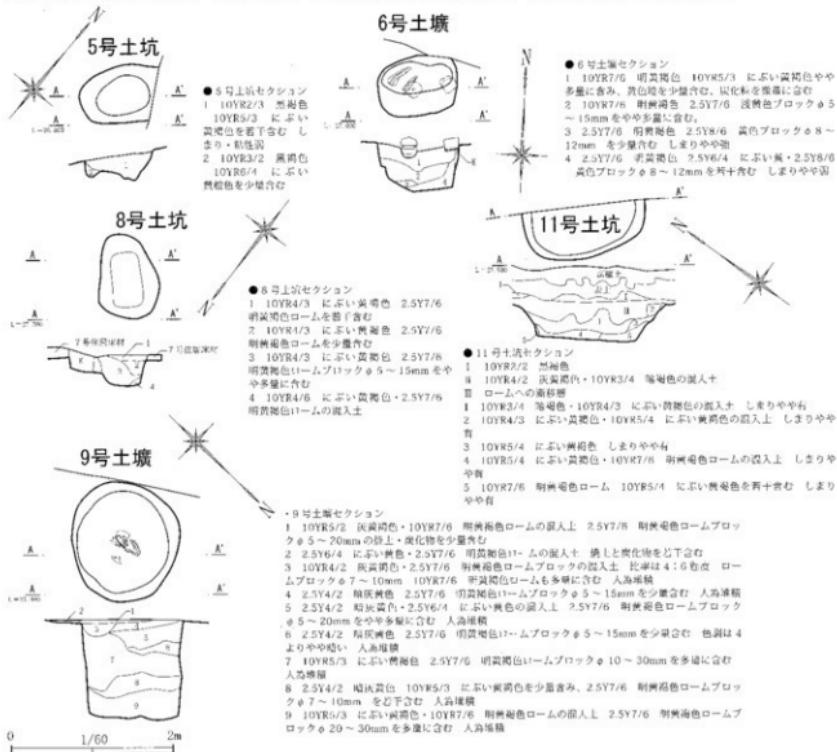
本遺構は、C-17グリッドに於いて検出された。2号古墳の墳丘上にあって、ほぼ中央に位置する。長軸1.46m、短軸1.33mのほぼ円形を呈するもので、深さは確認面下1.21mを測る。当初土坑又は井戸の可能性があるとして調査を進めたところ、中から人骨が出土したために、2号古墳の主体部の可能性が想定された。しかしながら覆土中の骨は、釘やかわらけが出土したことにより、中世以降の墓坑と判断した。覆土は人為的な埋め戻しが行われるもので、締まりはない。灰黄褐色土を基調に9層に分層される。このことから、2号古墳は中世段階で既に墳丘部を削平されていたものと想定される。さらに20点近い釘が出土していることから、木製で円形の桶状の棺に納棺・埋葬されたものと想定される。尚遺物の観察は表13にまとめた。

人骨は6号土壙出土人骨同様に西本教授に科学分析を依頼した。結果は以下の通りである。

人骨は左上腕骨の中間部分である。海綿体の状況より人骨と判断される。被熱は受けていない。成人の骨である。年齢・性別は不明である。おそらく土葬にふされた中世から近世初頭の墓坑と判断された。

### 11号土坑（第46図 図版21）

本土坑はB-22グリッドに於いて検出された。長軸152cm、短軸側は調査区の外となり不明である。深さは確認面下22cmを測る。覆土は上層で黒褐色を、下層で黄褐色土を基調として5層に分層できるが、覆土上層が1号方形周溝墓に似ていることより、古墳時代の遺構と判断した。覆土中に遺物の出土は無い。

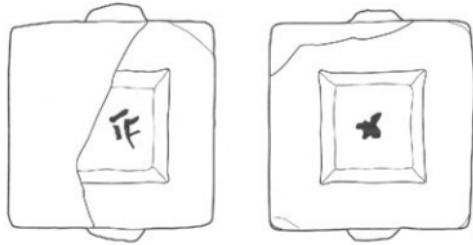
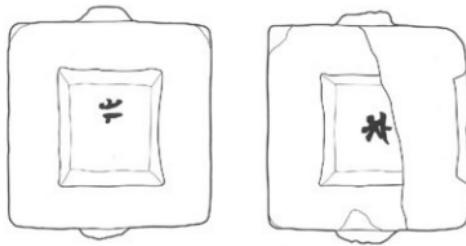
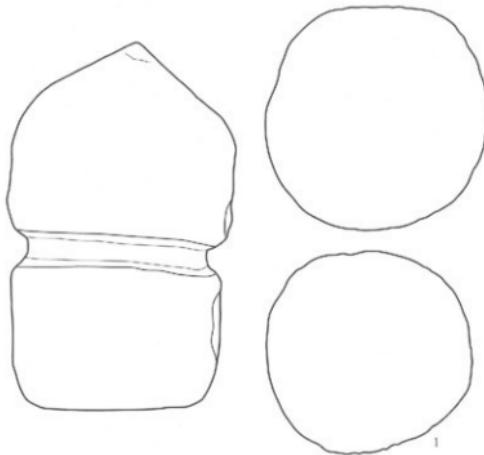


第46図 5・6・8・9・11号土坑

### 2 溝・道状遺構

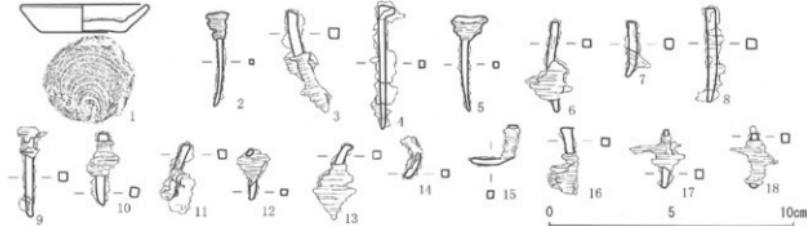
#### 1号溝（道状遺構）（第49図 図版24）

本遺構は調査区の中央や西よりのB-C-11グリッドに於いて検出された。調査を行えたのは3.97mである。幅は最大で130cmを測り、調査区を北東から南西方向に横断している。断面の形状は緩やかな薬研状を呈し、掘り込みの深さは確認面下89cmを測る。覆土は9層に分層され、その堆積状況から5~9層までが当初に堆積した土で、1~4層は一度埋没したものを掘り返した後に堆積した土と判断される。第4~9層は硬く踏み固められて、硬化している。このために本溝の性格は道状の遺構と判断した。始めに第9層を路面とした道が何らかの理由で埋没した為に、掘り返しを行って、4層を路面とする道が再構築されたものと判断される。



0 10 20cm  
1/4

第47図 6号土壤出土遺物

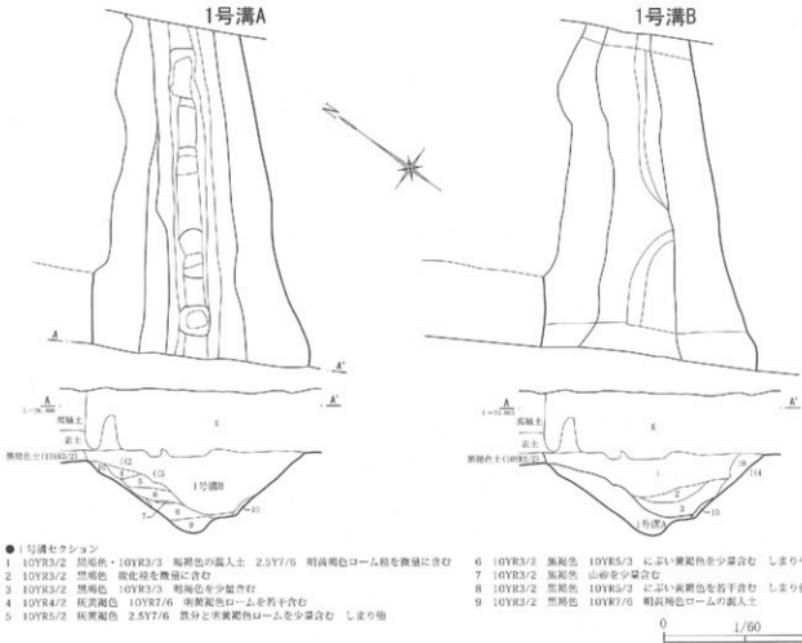


第48図 9号土壤出土遺物

表13 9号土壤出土遺物観察表

(表・p)

遺物番号	No.	種別	種類	器種	自然 乾燥 状態 状況	重量	器形の特徴	器形の特徴	色調	粉土	焼成	保存率	備考
9号土壤	1	SK09	かづきけ	墨	5.3 3.6 1.1	16.3	底部は平ら。体部は直線 形で軽く腰く。	口の底部。底部は斜面。 墨は斜面を含む。口には左回転。	内面 3YR6/6 外面 3YR7/6	細やかな 表面模様。表面 部分や口立 子、白色斑 子、黑色斑 子、墨色斑 子。	良好	定期	
	2	SK09	鉄製品	釘	長さ3.8 幅0.2	1.1	完全。木質付着。						
	3	SK09	鉄製品	釘	長さ4.2 幅0.4	2.1	頭部赤銹。本質付着。やや凹凸。						
	4	SK09	鉄製品	釘	長さ5.2 幅0.2	2.8	完全。木質付着。						
	5	SK09	鉄製品	釘	長さ3.8 幅0.2	2	元形か。木質付着。						
	6	SK09	鉄製品	釘	長さ3.8 幅0.2	1.5	頭部赤銹。本質付着。						
	7	SK09	鉄製品	釘	長さ4.4 幅0.4	1	元形か。木質付着。						
	8	SK09	鉄製品	釘	長さ3.8 幅0.4	1.2	頭部赤銹。本質付着。						
	9	SK09	鉄製品	釘	長さ3.6 幅0.35	1.9	先端欠損。木質付着。						
	10	SK09	鉄製品	釘	長さ3.0 幅0.4	1.5	頭部赤銹。先端欠損。木質付着。						
	11	SK09	鉄製品	釘	長さ2.9 幅0.35	1.8	頭部赤銹。先端欠損か。木質付着。						
	12	SK09	鉄製品	釘	長さ2.1 幅0.3	1.2	頭部赤銹。先端欠損。木質付着。						
	13	SK09	鉄製品	釘	長さ2.0 幅0.35	1.3	不明。木質付着。						
	14	SK09	鉄製品	釘	長さ1.7 幅0.3	1	完全欠損。木質付着。						
	15	SK09	鉄製品	釘	長さ1.6 幅0.35	0.8	頭部欠損。木質付着。L字に彎曲。						
	16	SK09	鉄製品	釘	長さ1.6 幅0.35	1.2	頭部欠損。先端欠損。木質付着。						
	17	SK09	鉄製品	釘	長さ1.0 幅0.35	0.7	頭部欠損。先端欠損。木質付着。						
	18	SK09	鉄製品	釘	長さ2.5 幅0.4	0.9	頭部欠損。先端欠損。木質付着。						
	19	SK09	人骨	—	—	31.1	左上腕骨の下関節部の骨。頭部の特徴なし。人骨と判斷される骨部が複数箇所で発見している。頭部は欠け ておらず、年齢・性別は不明であるが、成人骨と判断される。						



第49図 1号溝A・B(道状遺構)

## 2号溝（道状遺構）（第50図 図版25・36）

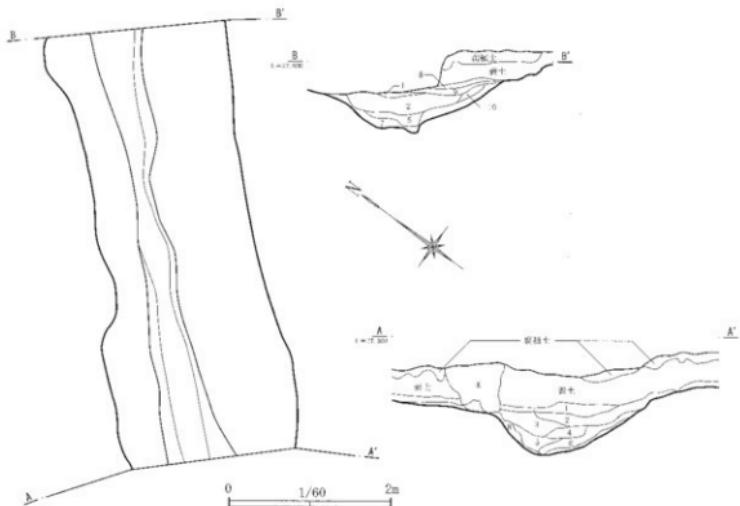
本遺構は調査区の中央やや西より1号溝の西側27m、A・B-5・6グリッドで検出された。調査範囲は長さ5.19mである。北東から南西方向に調査区を横断する形で検出されている。幅は2.25m～1.80m、深さは傾斜に沿って南西方向に向かって深くなる。南西側調査区の壁で確認面下63cmの掘り込みを有するもので、断面の形状は1号溝同様に浅い薺研堀状になる。断面の観察では覆土は10層に分層され、自然堆積を示している。このうち2層が硬化した層である。本来溝として使用されていたものが埋没後に道として機能したものと判断される。

遺物は縄文土器片を多く出土しているものの、僅かながら近世の陶磁器が出土しており、近世以降の遺構と判断された。尚遺物の観察は表14にまとめた。

その他に遺物としては縄文土器中期、近世の内耳鍋片、近世以降の焼瓦等が出土している。

表14 2号溝出土遺物観察表

遺構番号	No.	日記	種類	名稱	上部 底部 底質 岩石	基準	断面の特徴	発見の特徴	色調	層位	成因	時代	参考	
2号溝	1	S002-1	灰器	灰	- (4.2) C2.55	32.2	複数の窓がある。高 度に火照りがある。窓 部で火炎を示す。窓部 部で火炎を示す。窓部 部で火炎を示す。	クロロ形。外壁は筋 理。内側は火照。表み付 け部分は薄壁。	内面 外壁 底面	10YR7/2 灰 5YR2/2 灰	堆積 灰土	良時	体形下 限一辺 501/2	近世鉄鉢



### ● 2号溝セクション

- 1 7.5YR3/1 噪褐色 10YR7/6 明神褐色ローム堆积 硫化鉄を夾平合石 しまりやや淀
- 2 7.5YR3/4 噪褐色 11-ム灰・明神褐色を夹下合石 しまり淀
- 3 7.5YR3/4 噪褐色 10YR7/6 明神褐色を含む・明神褐色を下合せ しまり淀
- 4 10YR3/3 噪褐色 ローム鉄を少量含む しまり淀
- 5 10YR3/2 和褐色 7.5YR3/7 噪褐色の入土 2種の明神褐色上にブロック状に凝集された層 塗装鉄を若干含む
- 6 10YR3/3 和褐色 10YR4/7 にぶる 10YR7/6 明神褐色11-ムブロックも5～8mmの混入土 塗装鉄を若干含む
- 7 10YR3/3 雜褐色 2.5YR7/6 明神褐色ロームの盛入土 噪褐色が主体 硫化鉄を微量に含む
- 8 10YR3/3 和褐色 2.5YR7/6 明神褐色ロームの盛入土 噪褐色が主体 硫化鉄を微量に含む
- 9 10YR3/3 噪褐色 山砂を多量に含む
- 10 10YR3/3 和褐色 10YR6/6 时興褐色ローム鉄を微量に含む しまり淀



第50図 2号溝（道状遺構）・出土遺物

## 第5章 まとめ

### 1 遺跡の概観と検出された遺構の所属時期

検出された遺構は縄文時代早期炉穴3基、前期住居跡5軒（内3軒は貝塚）、中期住居跡1軒、中期土坑3基、ビット1基である。

前期の住居跡は関山段階のI式（10・12号住居跡）から、関山II式段階（1・2・3号住居跡）まで継続性が見られる。続く黒浜式期では遺構の存在は無く、遺物もほとんど検出されていない。貝塚を形成する時期も関山期に限られている。貝塚における貝の組成は住居跡で述べたとおり、1・2号住居跡が関山II段階で、多種の貝を採取する傾向が見られ、これよりも古い同じ関山II式期の3号住居跡ではハイ貝とカキを主体とする、限られた種類の貝組成である。同一型式内にもかかわらず明確に貝の組成の変化が見られることは、関山II式期に自然環境の転換期があったことを裏付けるものであろう。

前期後半から中期前半では遺構の存在は確認されていない。しかしながら、五領ヶ台式上器に平行する粟島台式や、下小野式上器は比較的まとまりを見せており、近隣に遺構の存在が想定される。中期中葉では15号住居跡が阿玉台式期に所属する住居跡で、本時期の集落構成を考えると、舌状台地の縁辺に集落を作り、集落に取り囲まれる様に土抗群が配される場合がいくつかの遺跡で知られる。本住居跡も谷の縁辺に位置する住居跡で台地の基部側に土坑の存在が想定できる。さらに中期後半になるとフラスコビットが多数見られるようになる。中期後半から末葉の遺構・遺物はほとんど検出されていない。

縄文後期から晩期にかけての資料は僅かながら出土している。特に堀之内1式新段階の上器は一定量の出土を見た。しかしながら遺構は検出されていない。また晩期の遺構も確認できていないが、遺構外出土遺物の中に僅かに2片のみ晩期と思われる資料が存在した。そのうち小型の壺形上器の肩部の細片には、浮線網状文が見られ、大洞A式土器と判断した。僅か1片であるが資料的には見逃せないものであろう。

弥生時代の遺構は検出されていない。遺物は1点のみ掲載したが、時期的にも明確なものではなく、弥生時代において本地域に人々の足跡を見出すことはできなかった。

古墳時代では住居跡4軒、古墳2基、方形周溝墓1基、土坑2基、ビット1基である。住居跡及び方形周溝墓からはいずれも古式上器が出土しており、古墳時代前期の遺構と判断された。各住居跡の概要でも述べたが、本期の遺構群としては遺物量が極めて少なく、数点の遺物が検出されたに留まっている。方形周溝墓の存在を考えるならば、これらの住居跡は疫の為の仮の住居であった可能性もある。筆者はかつて、群馬県高崎市倉賀野万福寺遺跡において、同様の遺構を調査したが、継続性のない住居跡が、ほぼ同時期と判断される方形周溝墓によって次々に破壊されている状況を確認している。古墳時代中期では2号古墳の周溝内より高环の脚部が1点出土している。中位に膨らみを有す柱状の脚部で、端部が水平に近く聞くもので、古式の上器とはやや時期が下るものと判断される。さらに、滑石製模造品の有孔円板が1点検出されており、遺構は確認できなかったものの、周辺に古墳時代中期末から古墳時代後期前葉にかかる時期の遺構の存在が想定される。古墳時代後期の鬼高段階の土器資料は検出されていない。

奈良・平安時代の遺構・遺物は検出されなかった。

中世は土坑が2基検出されている。6号土坑では宝篋印塔、五輪塔、が出土しており、中世の墓である。9号土坑も墓であったが、供伴した小形のかわらけから中世未葉16世紀の所産と判断される。かわらけの編年については、筑西市の炭焼戸遺跡において茨木県教育財團の調査資料をもとに想定したものであるが、小形で糸切が行われ、体部の立ち上がりが低いタイプは、本時期に共通するものである。

近世では道状遺構 2 条が検出されている。1・2 号溝（道状遺構）共に、おそらく中世から活用されていた道であろう。覆土中には近世の染付や瀬戸美濃の碗などが出土している。中世末の墓域との関係も想定できる。出土遺物が近世の遺物に限られたことから、近世の遺構と判断したが、遺跡の環境から判断しても、中世末にすでに道として開削されていた可能性がある。

#### 2 繩文前期の上器

本遺跡において検出された遺構のうち貝を覆土中に混入する所謂住居内貝塚は 3 軒であった。これらの遺構はいずれも前期関山式土器を出土するもので、10・12 号住居跡も含め前期の良好な資料が得られている。第 3 群第 1 類と第 2 類に分類した土器群は、関山 I 式と関山 II 式に分けられる。関山 I 式土器の特徴は第 3 章第 1 節で詳述したので割愛するが、茨城県内に於ける霞ヶ浦周辺の遺跡としては極めて良好な資料を得ることができている。特に二ツ木段階直後と思われる古式の関山 I 段階の資料には梯子状の文様をモチーフとする口縁部文様帯がやや幅広く設けられ、円形の貼付文が主体をなす。器種でも浅鉢や小形のミニチュア土器の存在等該期の資料としてはあまり知られていない資料の出土をみた。今後該期の研究に於いて、指標となる資料と想定される。

#### 3 翡翠製玉について

検出された翡翠製玉について補足的な見解を述べ、本項のまとめとする。翡翠は糸魚川姫川流域にその産地がほぼ限られる。同地域から、那珂川下流域には大量の人珠が持ち込まれ、その研究成果も多数報告されている。（2003 真吹、2006・2007 上野）繩文時代に於いて威信材として重要視された翡翠と琥珀が北陸地域に於ける第 1 の威信材統治に対し、関東地方に於ける第 1 の威信材翡翠が交換されその分布を広げていったと栗島（2007 栗島）は推論し、威信材の交換とその分布のあり方に注目している。一方で上野修一は、翡翠が意識的に焼かれたり割れたりすることにより分割をもって、威信材が同一族間での供有を行った可能性を指摘している。今回本遺跡で確認調査時に出土した翡翠の大珠は、意識的か偶発的かは不明であるが（打点を有さない節理面からの破損）破損している。ルーベで表面観察を行うと破損後、破断面は通常鏡面エッジとなるが、全ての破断面は研磨によって丸く加工されている。さらに表面の研磨痕は剥落して細かな粉状化が観察されることより、研磨の後に焼かれた可能性がある。これらの資料は関東地方から東北地方にかけて、中期中葉から後期に至る繩文時代の翡翠人珠に多く見られる現象として報告されている。上野の意見を追認する形になるが、このような資料が検出されたことは、本遺跡が規模の大きな中期集落の一部であることを示している。

蛍光灯の光にかざすとあたかもガラス細工のように半透明の緑色が浮き上がる。表面は粉を吹いたように白濁しているものの、本来は緻密の良質な翡翠であることがわかる。威信材としての本遺物がこの地に運ばれた状況は知る由もないが、遠く糸魚川よりこの地にもたらされた大珠は、やがて威信材として血族間で分割され、ある時は栗島が指摘する部族間の結束に欠かせない威信材として、また上野が指摘するように石棒や石皿のように割られた後に火にかけられた可能性が考えられる。

#### 4 古墳時代前期の遺構

本遺跡の南東凡そ 500m の同一台地上に存在する弁才天遺跡・北西原遺跡では、100 軒を越す古墳前期の大規模な集落が展開していることが報告されている。当該期に於ける墳墓は北西原遺跡で方形周溝墓が 1 基確認されている。この遺跡から僅かの距離に近接する本遺跡でも古墳時代前期の集落が、やまとまって検出されている。調査範囲が道路部分の幅 6m と狭い範囲であったために、全体を確認できた訳ではないが、方形周溝墓の検出もあり、該期の集落として、手賀沼西岸地域の状況と似た状況が見いだせる。霞ヶ浦西岸地域の台地上に展開する集落と、手賀沼周辺に展開する集落の共通点は、水運によって結ばれる。同じく千葉県や茨城県

下に於いても太平洋に面する部分に比較的大規模な弥生後期から古墳前期の集落の展開が知られており、全て水運を切り離して考えることはできない。前期大型古墳の存在もこの位置に多く知られている。4～5世紀の東閨東を考える上で重要な要素と言えよう。出土遺物では、S字口縁の台付甕の出土が見られず、栃木県や群馬県の石田川式の影響よりも南閨東的な様相が強い遺物が出土している点も興味深い。

#### 参考・引用文献

- 山内清男 1979『日本先史土器の繩紋』昭和36年京都大学学位論文請求論文 先史考古学会
- 山内清男 1967『日本先史土器図譜』先史考古学会
- 立教大学考古学研究会 1975『新田貝塚』一千葉縣夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚一
- 埼玉県教育委員会 1975『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第3集
- 埼玉県立和町風早遺跡調査会 1979『風早遺跡』
- 町田市田中谷戸遺跡調査会 1976『田中谷戸遺跡』
- 葛原 正 1978『北總台地における縄文時代草創期後半について』『千葉県の歴史』17号
- 銚子市教育委員会 1991『栗島台遺跡発掘調査報告書』
- 神奈川県教育委員会 1976『草山遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 11
- 小林達雄 2008『縄甕 縄文土器』小林達雄先生古希記念企画
- 中村孝三郎・小片保 1964『室谷洞廻』長岡市立科学博物館
- 西村正衛 1970『千葉県小見川町阿土台貝塚』東部閨東における縄文中・後期文化の研究その二一
- 藤本彌城 1977『那珂川下流の石器時代研究』
- 土浦市教育委員会 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡(第5次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集一
- 『神明遺跡』(第1次・2次) 土浦市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 土浦市教育委員会 1998
- 増山精一『武者塚古墳』茨城県新治村教育委員会 1986
- 横浜市歴史博物館(財) 横浜市ふるさと歴史財團 埋蔵文化財センター 1996『縄文時代草創期』資料集
- 土浦市遺跡調査会 2000『権現前遺跡』土浦市教育委員会
- 西村正衛 1972『阿玉台式土器編年的研究の概要—利根川下流域を中心として—』早稲田大学大学院文学研究科紀要 18号
- 林田利之 1999『古見台遺跡A地点』佐倉市 印旛郡市文化財センター
- 葛原 正 1978『新橋遺跡における阿玉台式土器の竹管文と施文具の研究』『新橋遺跡発掘調査報告』
- 上守秀明 2008『柏北部東地区縄文前期資料—柏市駒形遺跡・常上見遺跡』・千葉県縄文研究会第38回例会(見学会資料)
- 上守秀明 2009『(統)結節回転による施文効果』千葉県縄文研究会第39回レジュメ
- 小林修・高橋清文 2005『見立十三塚遺跡I・II』群馬県勢多郡赤城村教育委員会 (有)毛野考古学研究所
- 縄文セミナーの会 2009『中期初頭の再検討』第22回縄文セミナー
- 齊藤弘道 1991『茨城県の縄文土器』埋蔵文化財研修会資料
- 上野修一 2007『橢かれた玉—縄大珠の二次的変形—』『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会第5回シンポジウム橋木大会資料集
- 栗島義明 2007『成仁材流通の社会的形態—縄大珠から探る交換形態—』同上
- 『縄文セミナーの会』2006『前期前葉の再検討』19回 縄文セミナー
- 伊庭彰一 1988『谷津台貝塚』千葉市遺跡調査会 山武考古学研究所
- 人賀 健 1978『菅原野万福寺遺跡』高崎市教育委員会 山武考古学研究所
- 大賀 健 2008『呼塚遺跡第10次調査報告書』有限会社勾玉工房 Mogi
- 小林紀男 1980『栃木県における五角式土器の研究』『宇大史学』2号

表 15 1~3号貝塚貝殻長幅別分布表

ハイガイ

	1号貝塚			2号貝塚			3号貝塚				
	A	B	左	右	左	右	左	右	左	右	
cm	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
2.2	1		1	3	3						
2.4	2	3	2	3	11	4	1	1			
2.6	6	7	3	6	51	23	7	9			
2.8	4	5	3	3	62	12	10	6			
3	1	8		6	27	9	12	12			
3.2	4	4	4	3	39	8	20	16			
3.4	7	6	8	8	32	6	33	28			
3.6	5	5	15	12	25	6	31	32			
3.8	4	4	8	7	23	3	28	11			
4	4	4	1	1	15	2	3	2			
4.2	4	3		2	8	3	1	3			
4.4	2	6	2	3	4	1	2				
4.6	1	1	4	1	7		1	2			
4.8	1	2	2	4		1					
5	1				2	1	1				
5.2	1				1						
5.4	1				1						
5.6	1				2						
5.8											
6											
8											
10											
12											
14											
16											
18											
20											
22											
24											
26											
28	1				1						
3											
3.2											
3.4											
3.6	1	1			1						
3.8	3	1									
4	1	1	2	1	1	1	1	1			
4.2	4	6	1	2	2	1					
4.4	1										
4.6	2	2	1	1	1	1	1	1			
4.8	2										
5											
5.2											
5.4											
5.6											
5.8											
6											
8											
10											
12											
14											
16											
18											
20											
22											
24											
26											
28	1	2			1		1	1			
3											
3.2	1				1						
3.4						1	2				
3.6	1				1						
3.8											
4	1	1			1	1	1	1			
4.2	4	3			1						
4.4											
4.6	1				1						
4.8						1	1				
5	1	1			1						
5.2											
5.4	1	1			1						
5.6											
5.8											
6											
8											
10											
12											
14											
16											
18											
20											
22											
24											
26	1				1						
3											
3.2	1				1						
3.4						1					
3.6	1				1						
3.8											
4	1	1			1	1	1	1			
4.2	4	3			1						
4.4											
4.6	1				1						
4.8						1	1				
5	1	1			1						
5.2											
5.4	1	1			1						
5.6											
5.8											
6											
8											
10											
12											
14											
16											
18											
20											
22											
24											
26											
28	1				1						
3											
3.2	1				1						
3.4						1					
3.6	1				1						
3.8											
4	1	1			1	1	1	1			
4.2	4	3			1						
4.4											
4.6	1				1						
4.8						1	1				
5	1	1			1						
5.2											
5.4	1	1			1						
5.6											
5.8											
6											
8											
10											
12											
14											
16											
18											
20											
22											
24											
26											
28	1				1						
3											
3.2	1				1						
3.4						1					
3.6	1				1						
3.8											
4	1	1			1	1	1	1			
4.2	4	3			1						
4.4											
4.6	1				1						
4.8						1	1				
5	1	1			1						
5.2											
5.4	1	1			1						
5.6											
5.8											
6											
8											
10											
12											
14											
16											
18											
20											
22											
24											
26											
28	1				1						
3											
3.2	1				1						
3.4						1					
3.6	1				1						
3.8											
4	1	1			1	1	1	1			
4.2	4	3			1						
4.4											
4.6	1				1						
4.8						1	1				
5	1	1			1						
5.2											
5.4	1	1			1						
5.6											
5.8											
6											
8											
10											
12											
14											
16											
18											
20											
22											
24											
26											
28	1				1						
3											
3.2	1				1						
3.4						1					
3.6	1				1						
3.8											
4	1	1			1	1	1	1			
4.2	4	3			1						
4.4											
4.6	1				1				</		

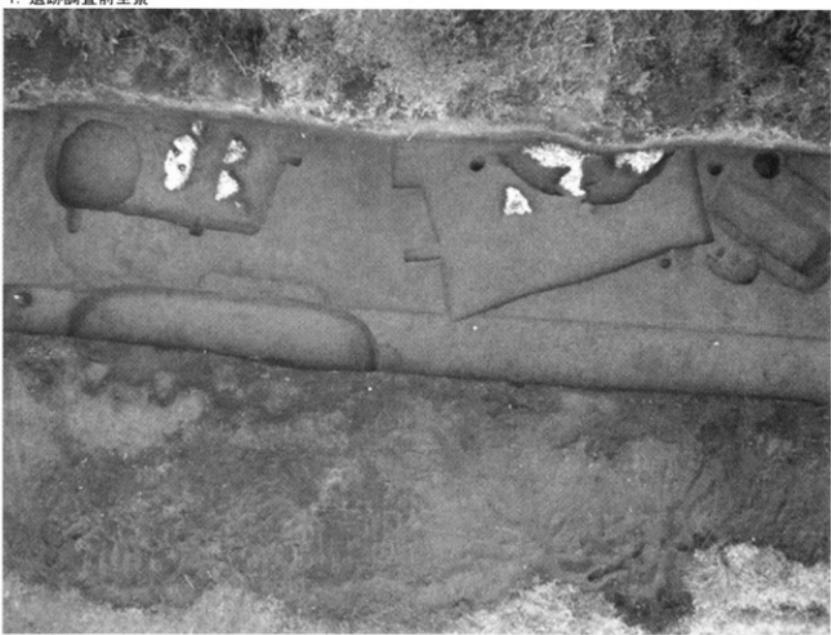
写 真 図 版



1. 赤弥堂遺跡東区全景航空写真



1. 遺跡調査前全景



2. 1・2・3号住居跡（貝塚）全景



1. 機材搬入状況



2. トイレ設置状況



3. テント設営状況



4. 遺構確認作業状況



5. 遺構検出状況 E→



1. 遺構確認状況中央部分



2. 同 中央部分から西側



1. 遺構確認状況西側



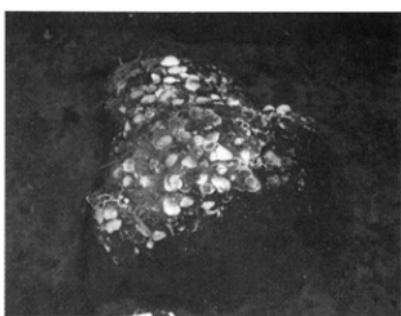
2. 基本層序中央部南壁



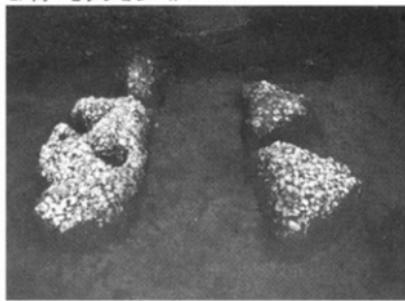
1. 1号住居跡(1号貝塚)貝層検出状況



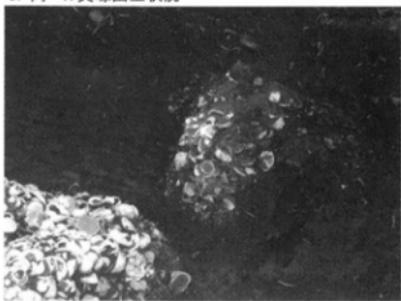
2. 同 セクション N→



3. 同 A貝塚出土状況



4. 同 A～D貝塚出土状況



5. 同 D貝層出土状況



1. 2・3号住居跡 (2・3号貝塚)



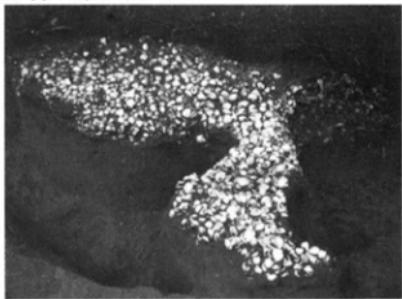
2. 同 セクション W→



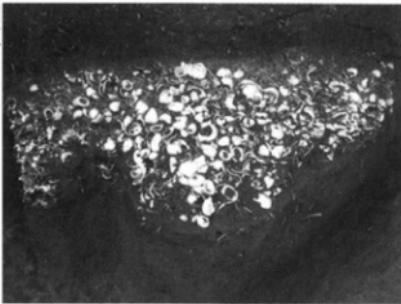
4. 2号住居跡 A・B 貝塚出土状況



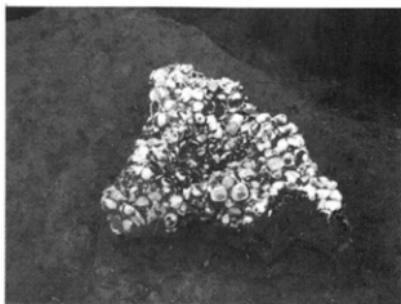
3. 同 セクション N→



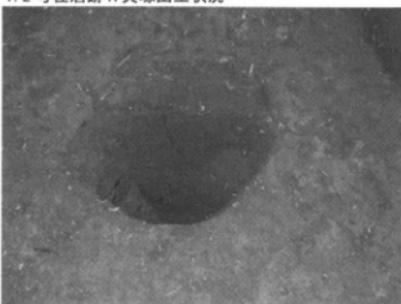
5. 同 B 貝塚出土状況



1. 2号住居跡A貝塚出土状況



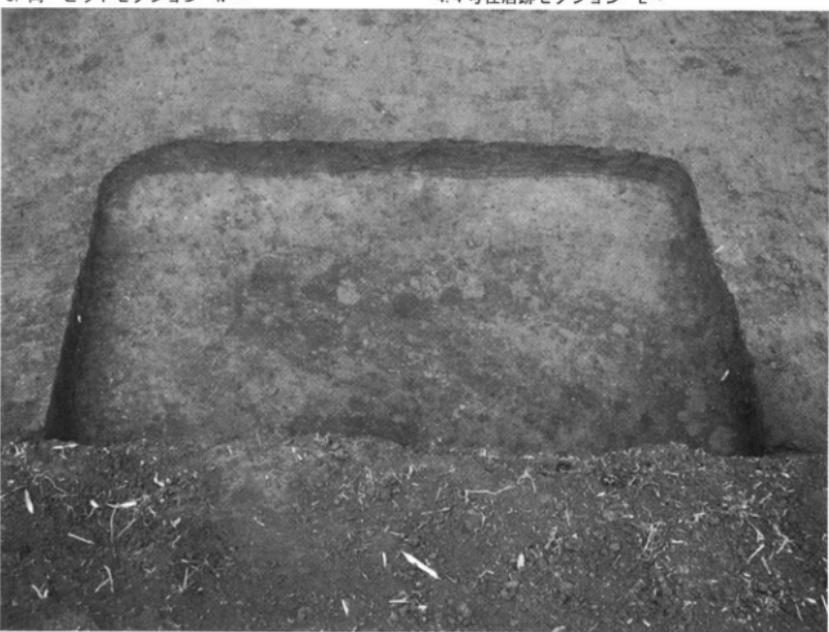
2. 3号住居跡貝塚出土状況



3. 同 ピットセクション N→



4. 4号住居跡セクション E→



5. 4号住居跡全景



1. 7・14号住居跡・8号土坑完掘全景



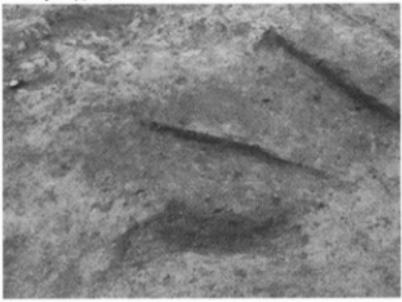
2. 7号住居跡セクション E→



4. 9号住居跡セクション E→



3. 8号土坑セクション W→



5. 同 炉



1. 9号住居跡完掘全景



2. 10号住居跡完掘全景



1. 10号住居跡セクション E→



2. 同 遺物出土状況全景



3. 同 遺物出土状況 1



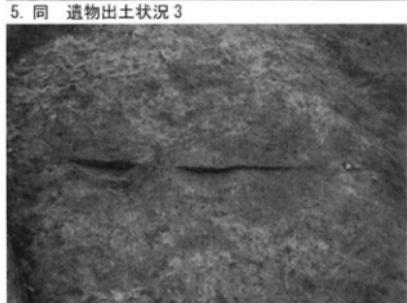
4. 同 遺物出土状況 2



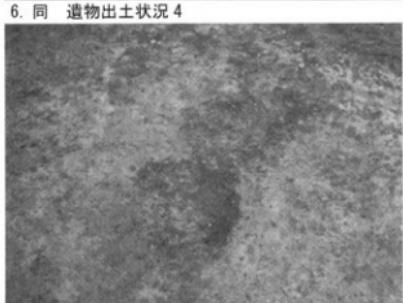
5. 同 遺物出土状況 3



6. 同 遺物出土状況 4



7. 同 炉セクション S→



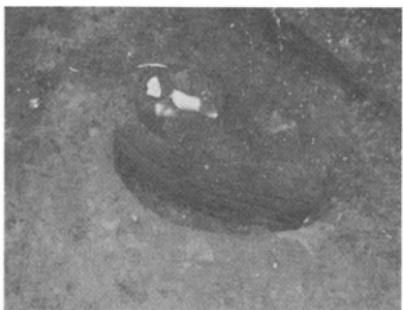
8. 同 炉完掘状況



1. 11号住居跡全景



2. 同 セクション



3. 同 ピット1セクション S→



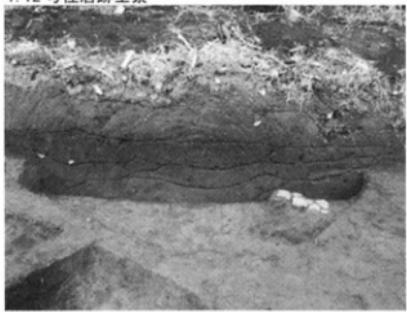
4. 同 ピット3・炉セクション S→



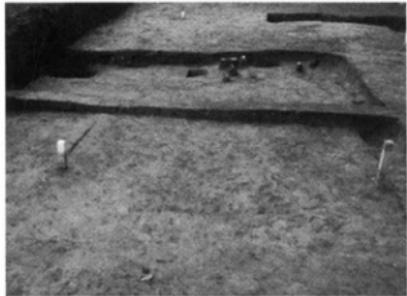
5. 同 ピット4セクション W→



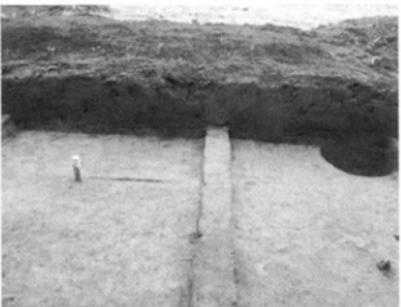
1. 12号住居跡全景



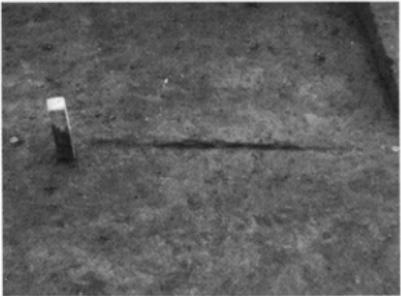
2. 同 セクション



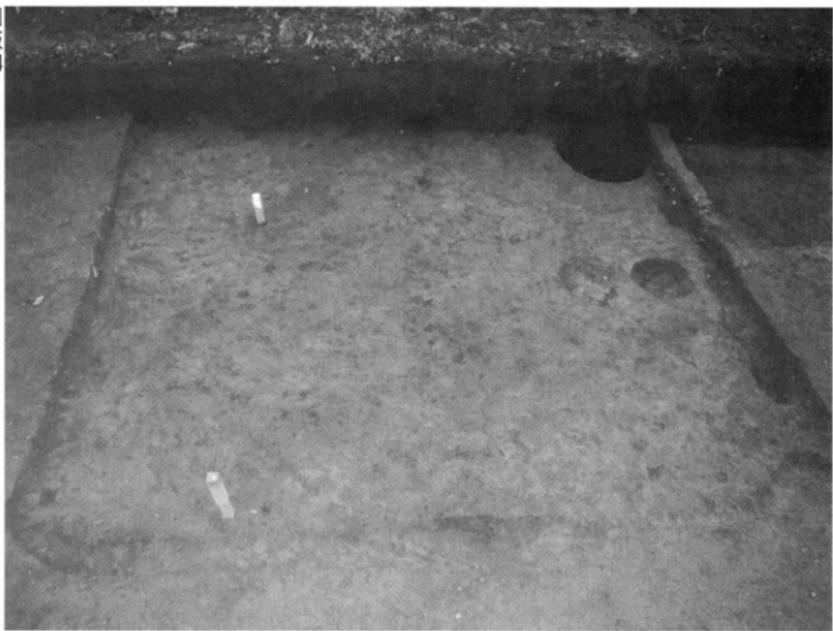
4. 同 セクション2



3. 13号住居跡セクション1



5. 同 炉セクション



1. 13号住居跡全景



2. 14号住居跡全景



1. 14号住居跡ピット1セクション



2. 15号住居跡遺物出土状況



3. 15号住居跡・14号土坑全景



4. 同 セクション



5. 同 調査風景



1. 1号古墳全景



2. 同 セクション東側



3. 同 セクション西側



4. 同 セクション全体



5. 同 調査風景



1. 2号古墳全景 航空写真



2. 同 東側セクション



3. 同 西側セクション



4. 同 完掘 E-1



5. 同 航空写真撮影実施状況



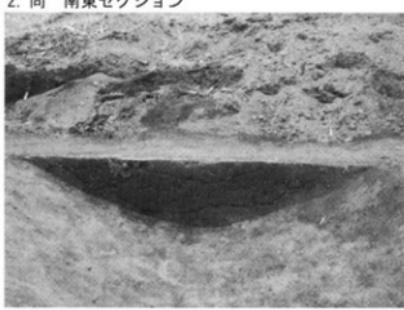
1. 1号方形周溝墓全景



2. 同 南東セクション



3. 同 南西セクション



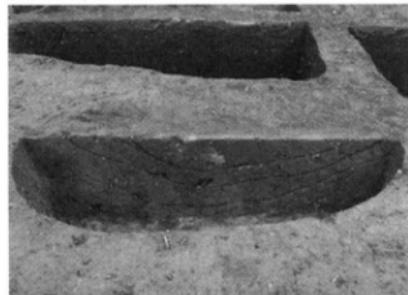
4. 同 北西セクション



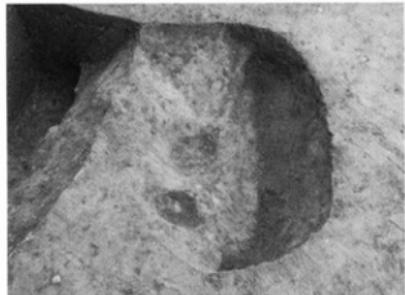
5. 同 遺物出土状況



1. 1・2号土坑全景



4. 3号土坑セクション



5. 同 完掘全景



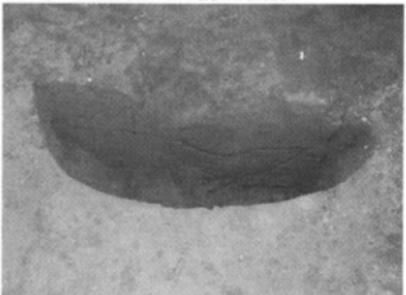
1. 4号土坑



2. 5号土坑



3. 6号土壤確認状況（石塔検出状況）



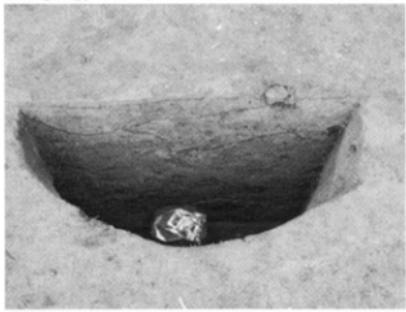
4. 同 セクション S→



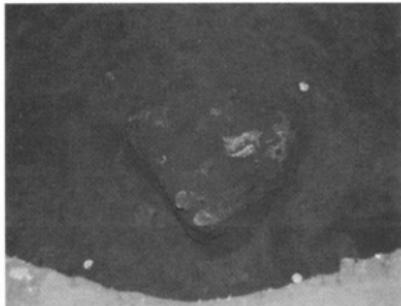
5. 同 人骨出土状況



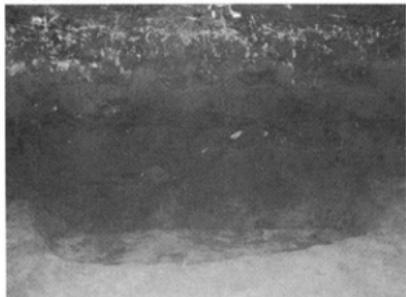
1. 9号土壤



2. 同 セクション



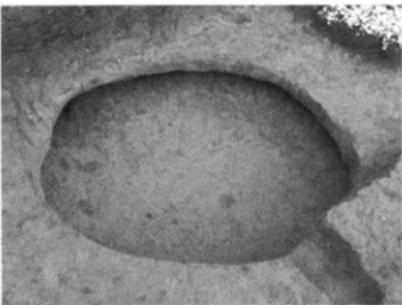
3. 同 人骨出土状況近景



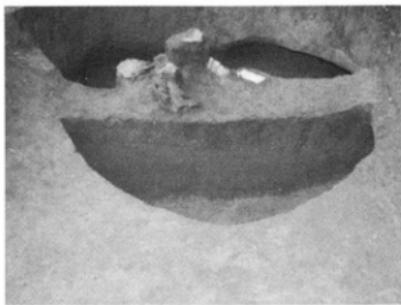
4. 11号土坑セクション S→



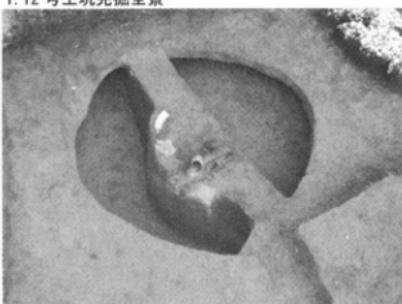
5. 同 完掘全景 N→



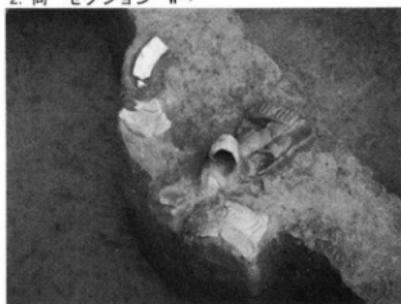
1. 12号土坑完掘全景



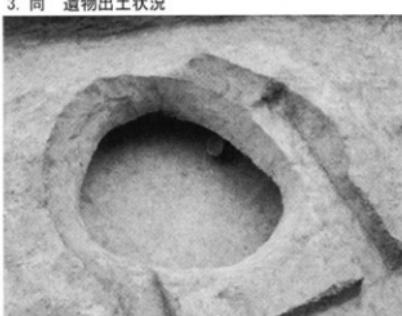
2. 同 セクション W→



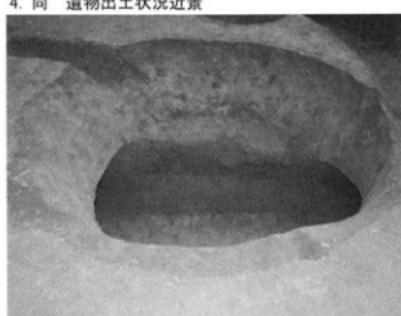
3. 同 遺物出土状況



4. 同 遺物出土状況近景



5. 13号土坑完掘全景



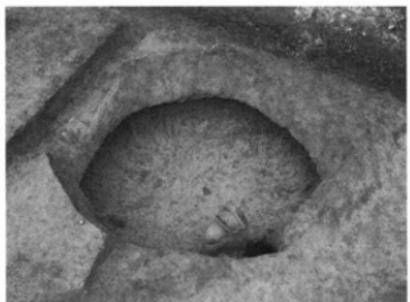
6. 同 セクション SW→



7. 同 遺物出土状況



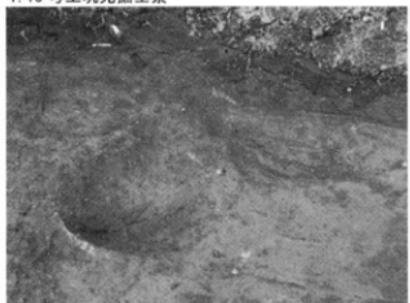
8. 15号土坑セクション E→



1. 15号土坑完掘全景



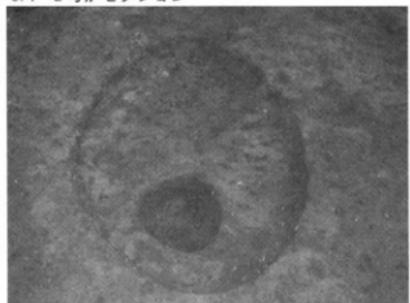
2. 同 遺物出土状況



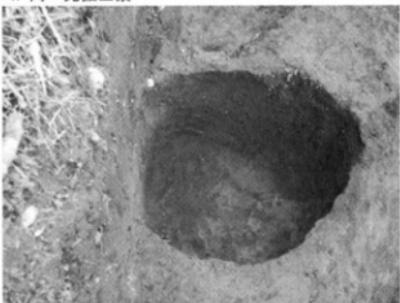
3. 1・2号炉セクション



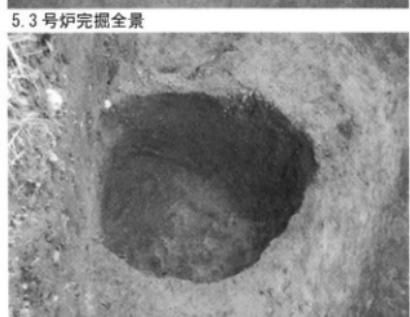
4. 同 完掘全景



5. 3号炉完掘全景



6. 1号ピット完掘全景



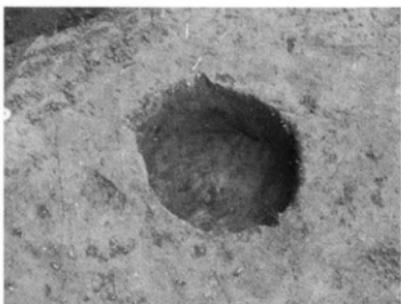
7. 2号ピット完掘全景



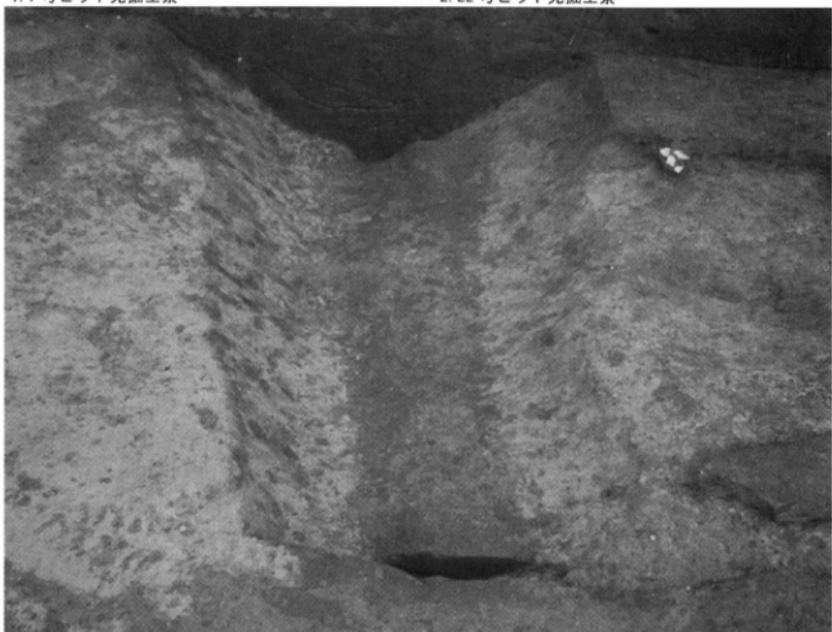
8. 6号ピット完掘全景



1. 7号ピット完掘全景



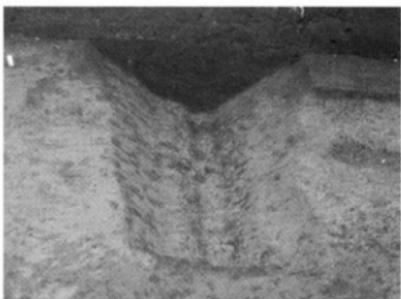
2. 22号ピット完掘全景



3. 1号溝（道状遺構）硬化面



4. 同 セクション N→



5. 同 完掘全景



1. 2号溝（道状遺構）全景



2. 同 セクション1 N→



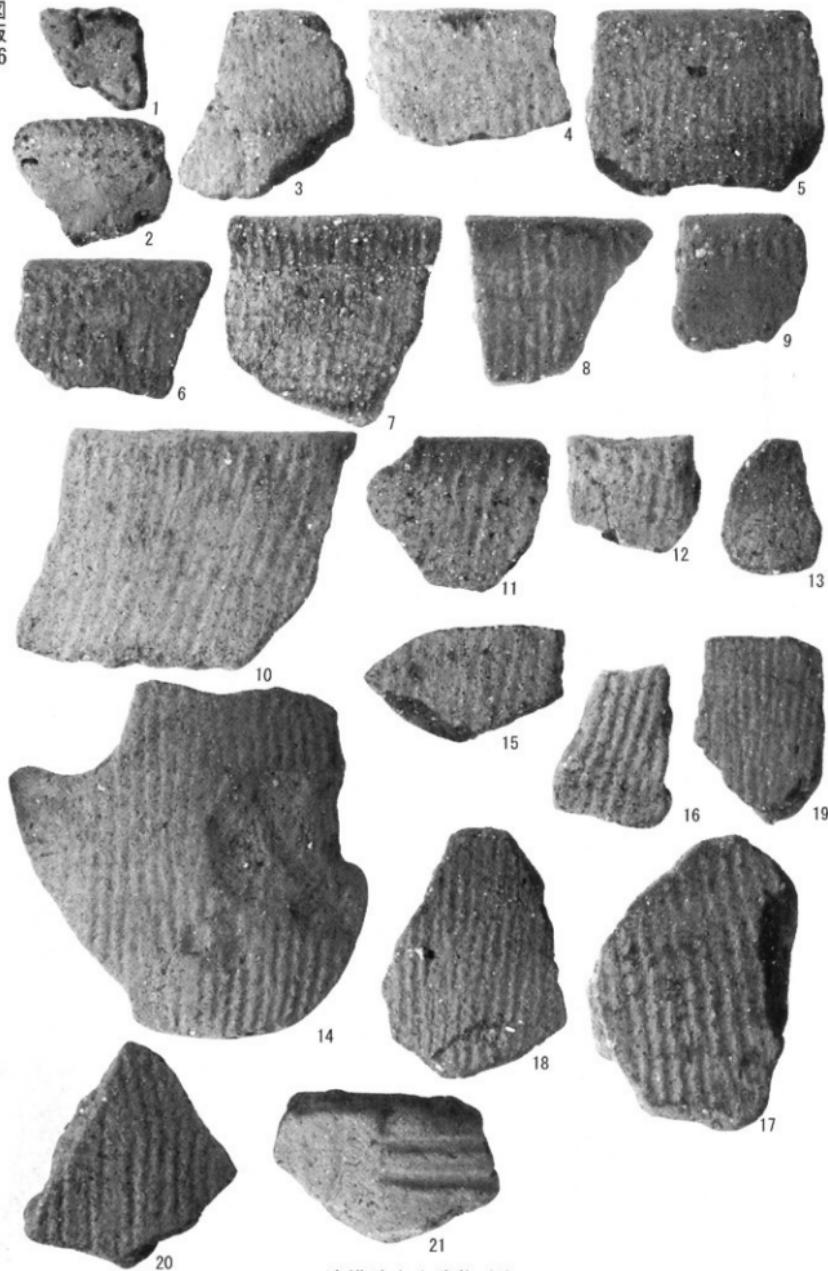
4. 3号溝セクション



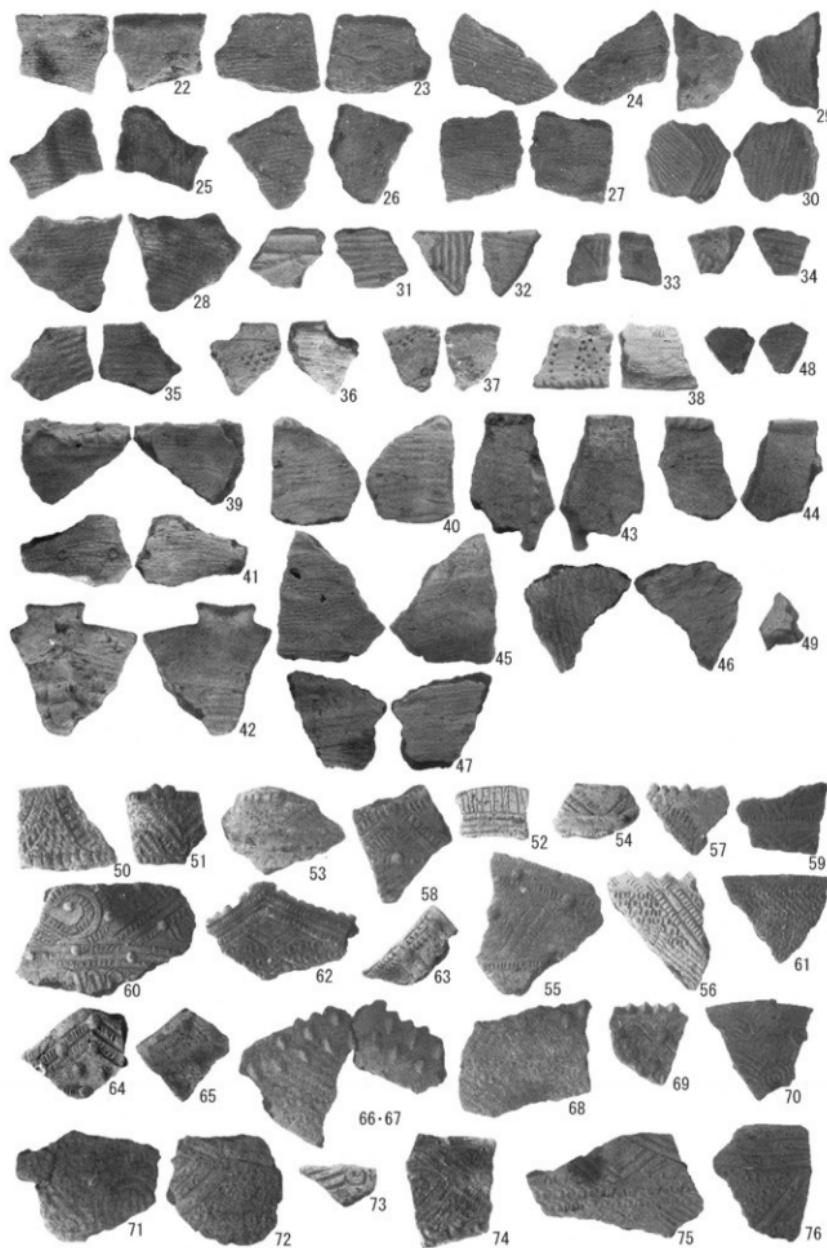
3. 同 セクション2 S→



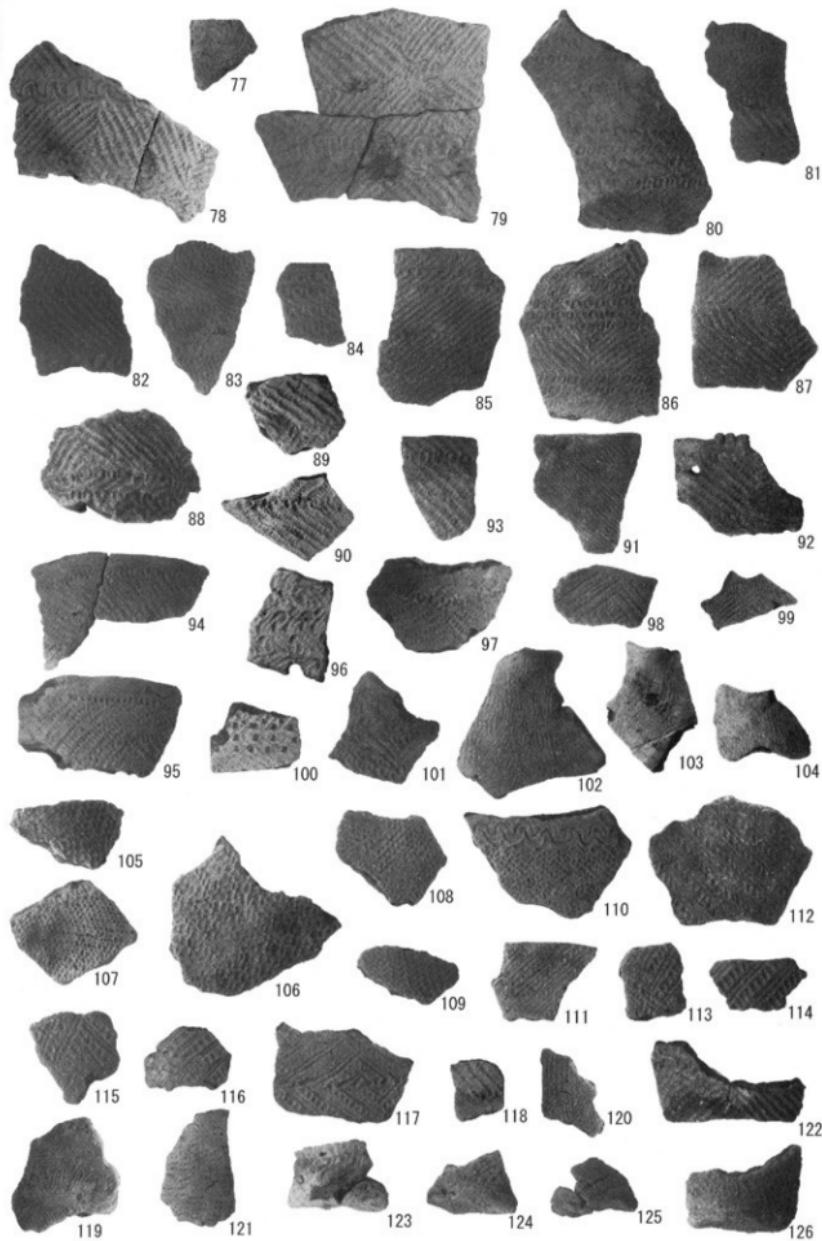
5. 作業風景（杭打設状況）



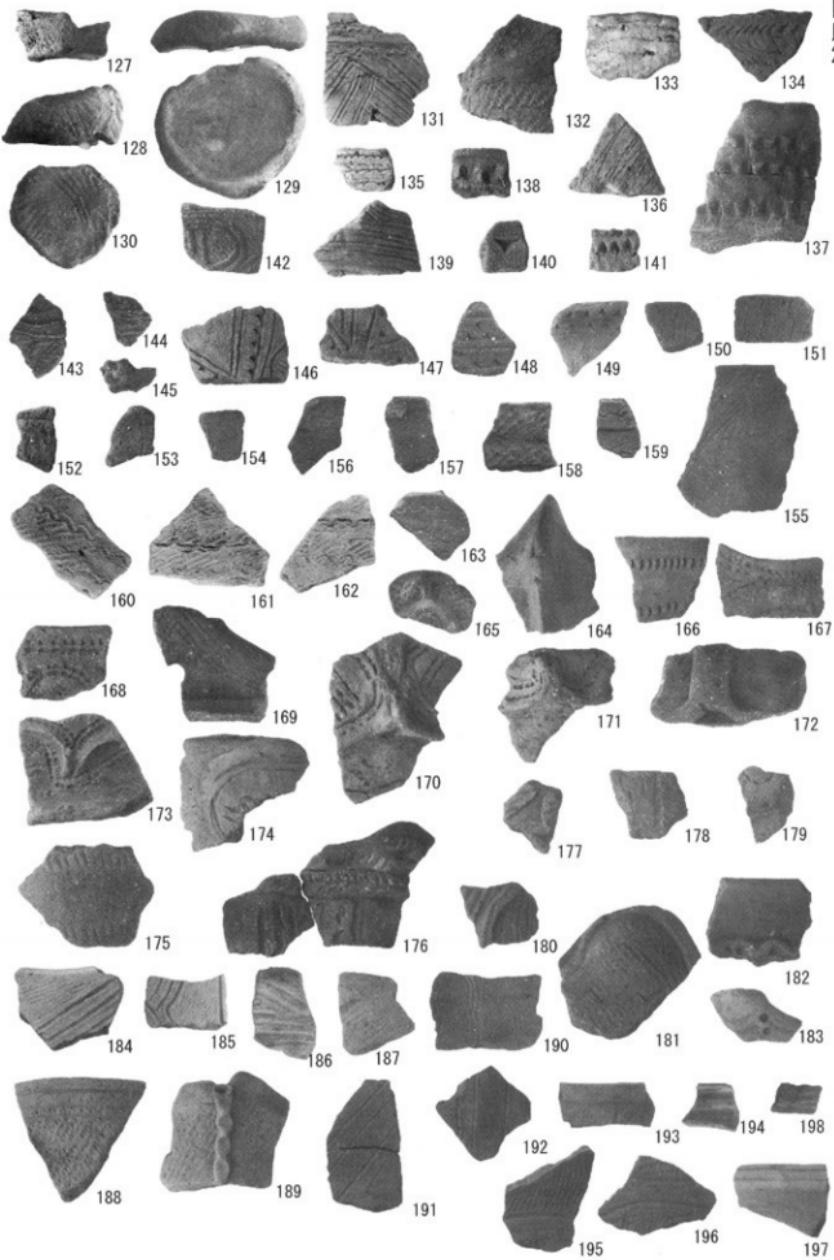
遺構外出土遺物 (1)



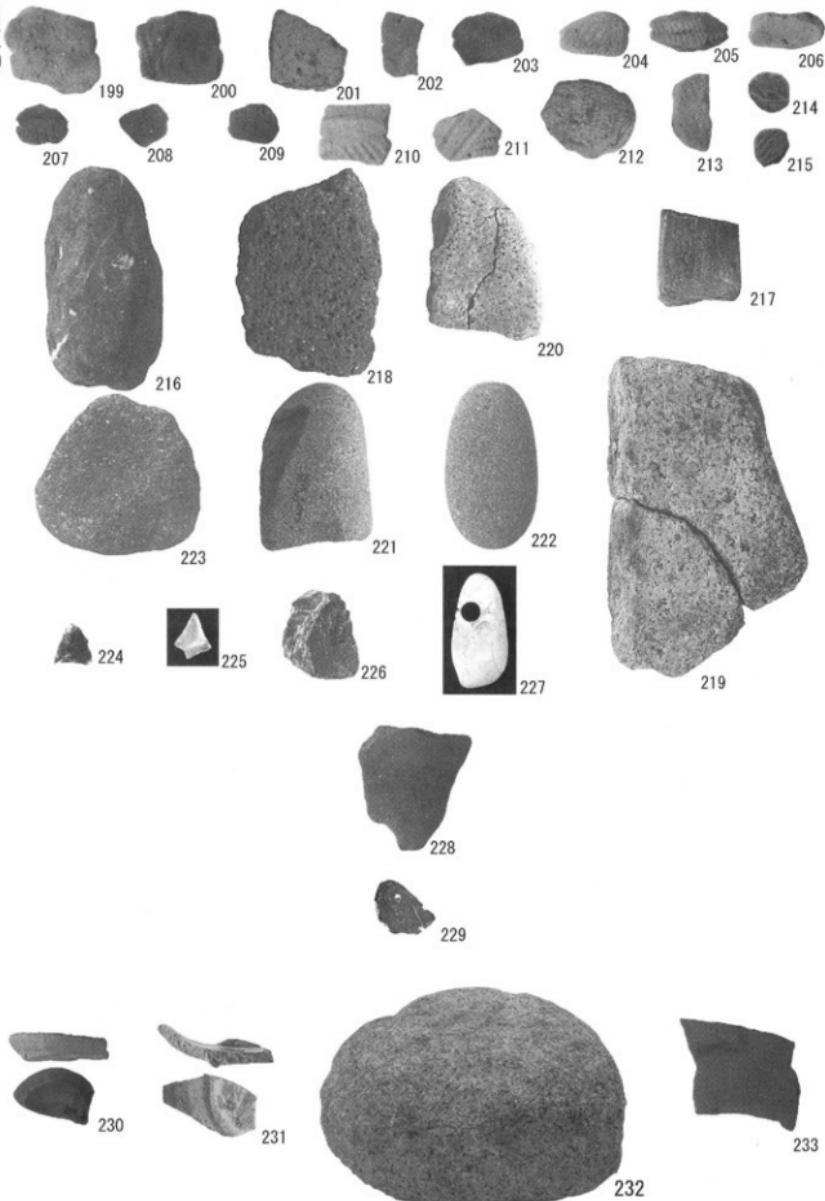
遺構外出土遺物 (2)



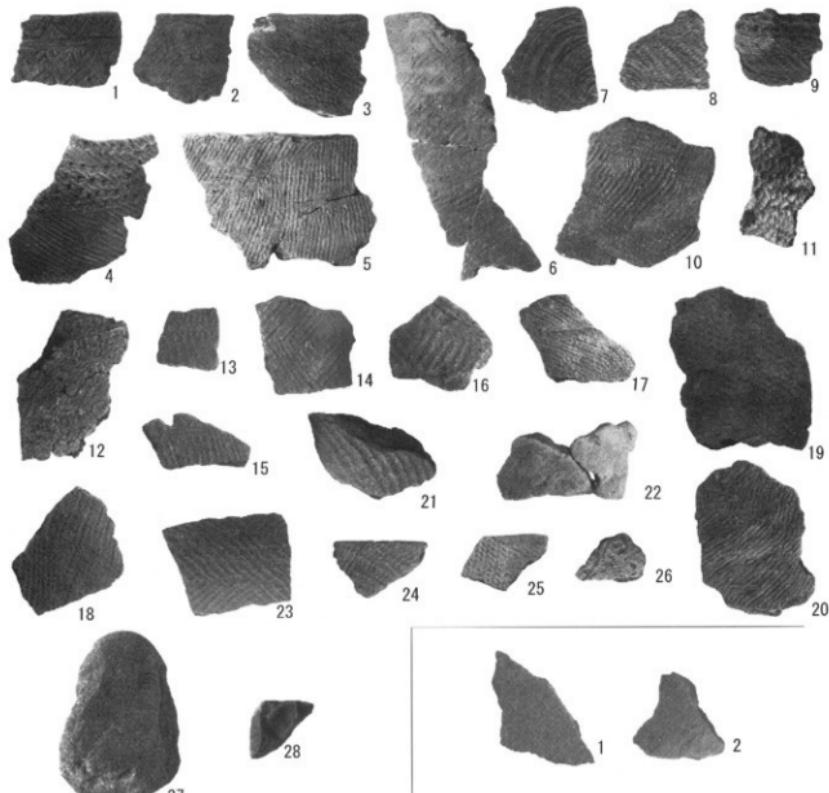
遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物(4)

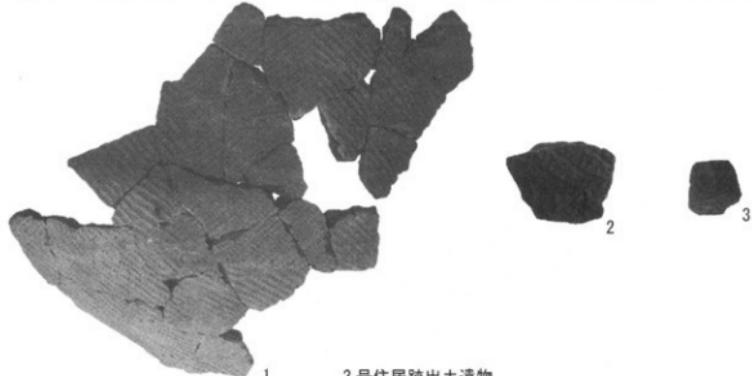


遺構外出土遺物 (5)



1号住居跡出土遺物

2号住居出土遺物



3号住居跡出土遺物

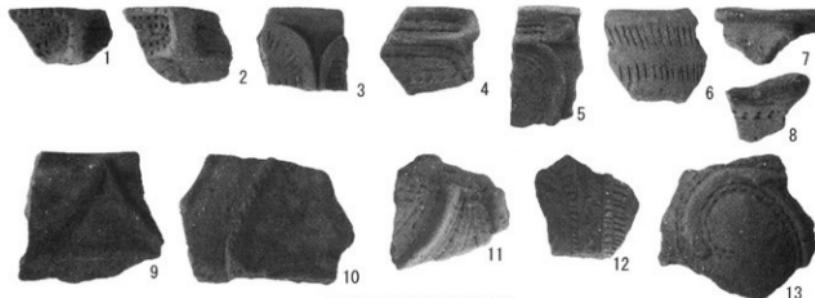
遺構出土遺物(1)



10号住居跡出土遺物

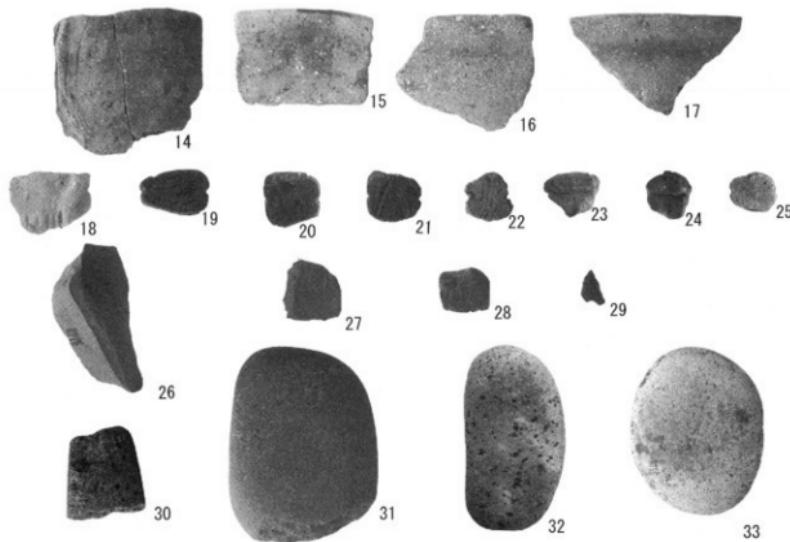


12号住居跡出土遺物

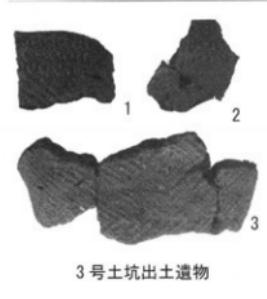


15号住居跡出土遺物(1)

遺構出土遺物(2)



15号住居跡出土遺物(2)

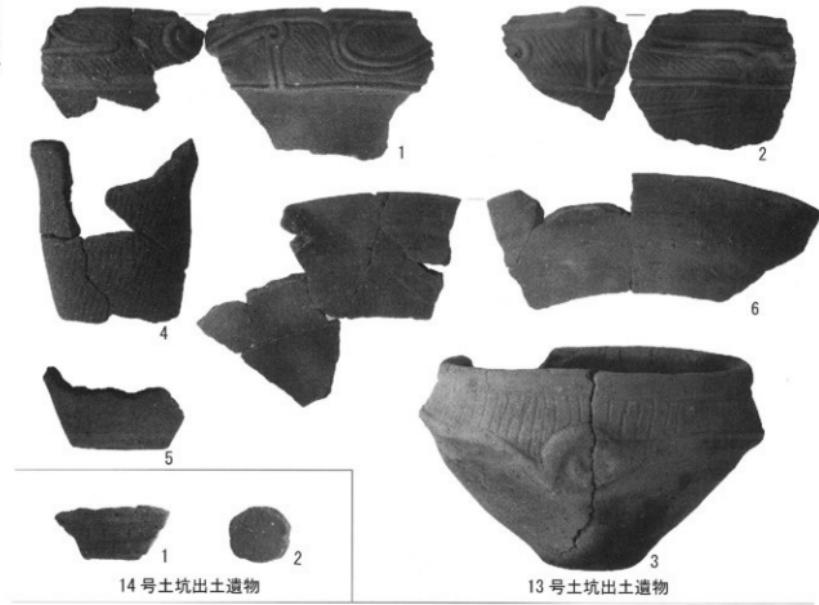


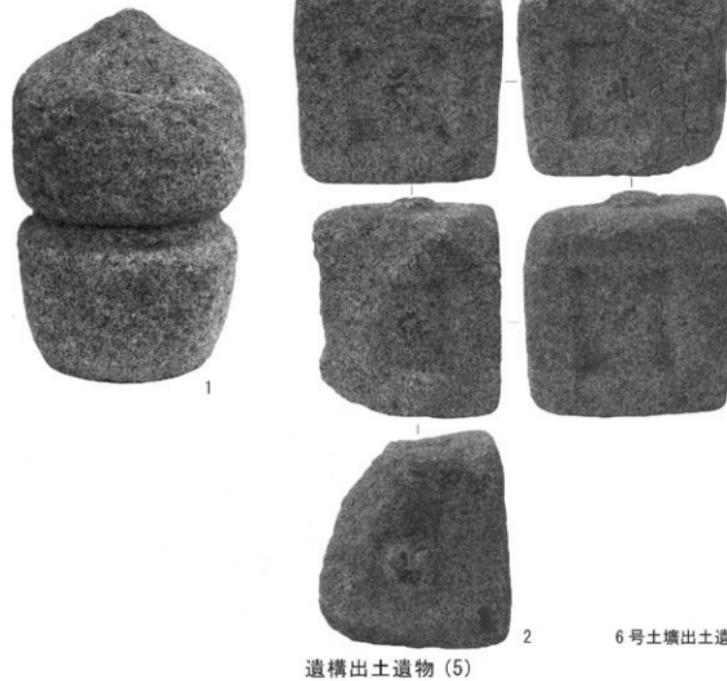
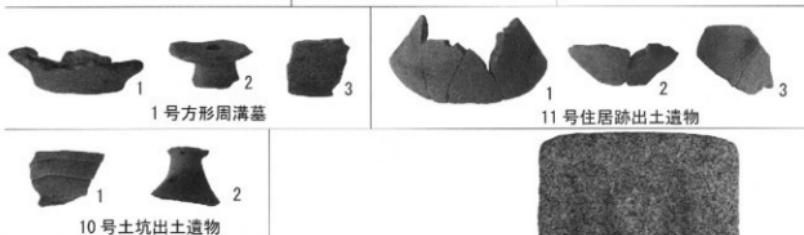
3号土坑出土遺物

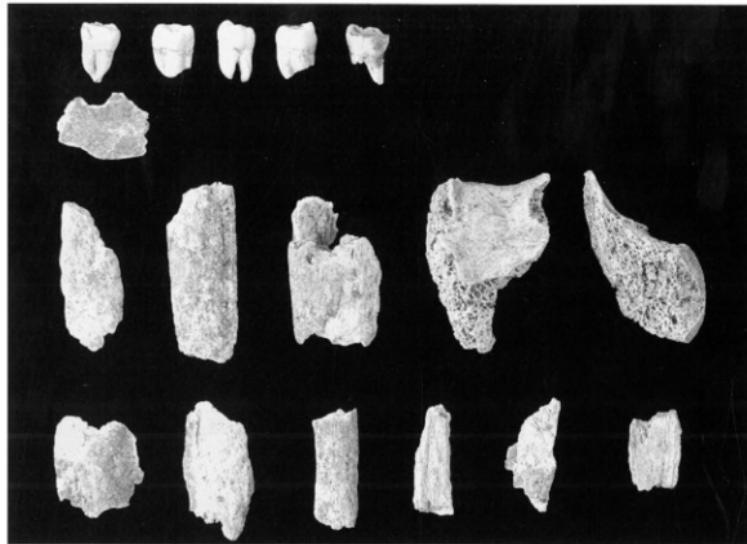


12号土坑出土遺物

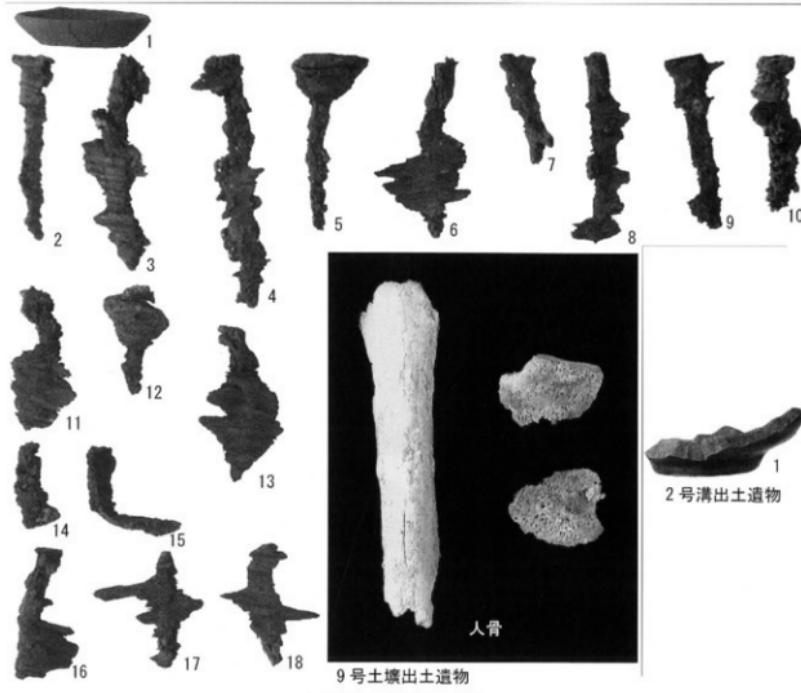
遺構出土遺物(3)







6号土壤出土遺物（人骨）



遺構出土遺物（6）

## 報告書抄録

ふりがな	あかみどういせき (ひがしちく)						
書名	赤弥堂遺跡（東地区）						
副書名	-県営畠地帯総合整備事業（担い手支援型）-坂田地区 墓藏文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	大賀 健 関口 滉 黒澤 春彦						
編集機関	有限会社 勾玉工房Mogi						
所在地	〒286-0203 千葉県富里市久能 238-100 TEL0476(92)0658						
発行年月日	西暦 2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 追跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
赤弥堂遺跡（東地区） <small>坂田地区</small>	千葉県富里市坂田町100-1	08466	36° 00' 19"	140° 17' 32"	20080921 ～ 20081111	871 m <sup>2</sup>	県営畠地帯総合整備事業 (担い手支援型)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
赤弥堂遺跡（東地区）	集落	縄文時代	墳穴式竖穴（真底） 溝穴 上坑 ピット	円文草席（圓文大系・季・火式） 圓文前席（豊山式・農振式・深島角式・ 十三春後式） 圓文中期（河内台式・正鏡ヶ台式・加賀利式） 圓文後期（毬之内式・大隅人式） 石製品（石器・打製石斧・石皿など）			
		古墳時代	低周輪 古墳 円形周溝墓 土坑 ピット 土坎	古墳前席（土師器・滑石製横溝式） 古墳中席（土師器） 古墳後期（滑石製横溝式）			
		十世			干土（宝篋印塔・五輪塔・かわらけ）		

<b>赤弥堂遺跡（東地区）</b> -県営畠地帯総合整備事業（担い手支援型）- 坂田地区 墓藏文化財発掘調査報告書 平成21年3月17日発行  <b>編集・発行</b> 士浦市教育委員会 〒300-4115 茨城県士浦市藤沢975番地 TEL029(826)1111  有限会社 勾玉工房Mogi 〒286-0203 千葉県富里市久能 238-100 TEL0476(92)0658  <b>印刷</b> 株式会社 エイディー 〒289-1115 千葉県八街市八街ほ211 TEL043(444)2024
---